

「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト

数 原 孝 憲

オーラル・ヒストリー

(元駐アイルランド大使、元国連局軍縮室長)



政策研究大学院大学
NATIONAL GRADUATE INSTITUTE FOR POLICY STUDIES

「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト

数原孝憲

オーラル・ヒストリー

(元駐アイルランド大使、元国連局軍縮室長)



日本国領
日本学校

野坡毛路

- 11月22日

1954年14月

- 9

node is
up to 1

۱۰۲

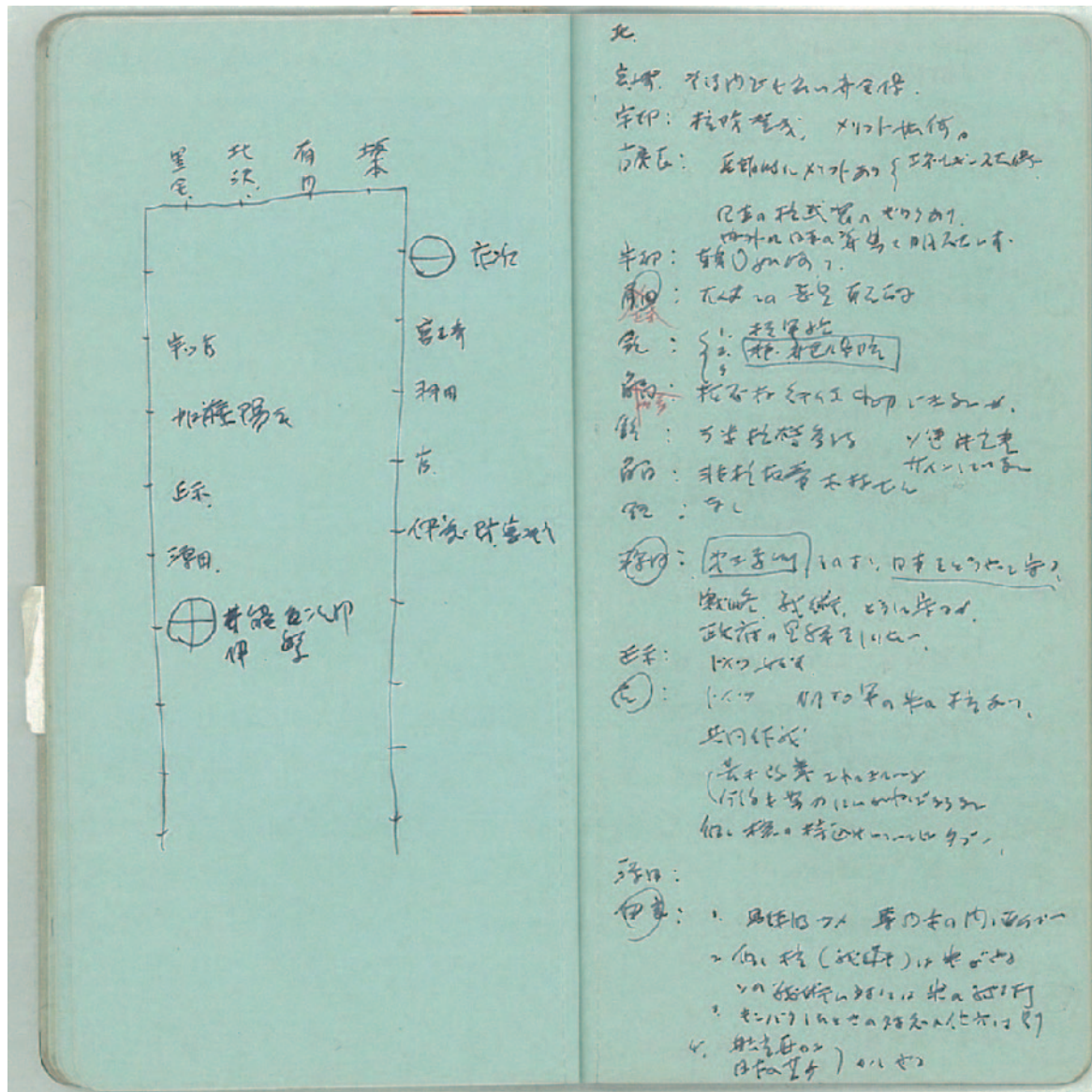
2005年12月

2. 日本に神(カミ)
の) 様(サマ) 様(サマ)

2000-2001

外欠不記

2007年12月12日，李学政在NPT批准
后发言。



【軍縮室長時代のメモ】自民党合同部会の様子（1975年2月）

【軍縮室長時代のメモ】 宮澤喜一外相訪米報告（1975年4月）

<NPT批准の妥当性>
(案の整理)

10/1

1. 核兵器 (核兵器利用) の禁止
核兵器利用の禁止の必要性

2. 国際法

1. 平和利用 (平和利用、核兵器禁止)
2. 核兵器禁止
3. 核兵器禁止

3. 国際法の内

- 核兵器禁止 (米、加、英)
- 核兵器禁止 (米、加、英)
- 核兵器禁止 (米、加、英)

4. 核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化

5.

- 核兵器利用の規制強化
- 核兵器利用の規制強化

(今後会議の準備理由)

1. 核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

2. 核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

3. 核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

(対外発表用)

軍縮外交の促進 (対内等)

核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化

1. 核兵器利用の規制強化
2. 核兵器利用の規制強化
3. 核兵器利用の規制強化
4. 核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化

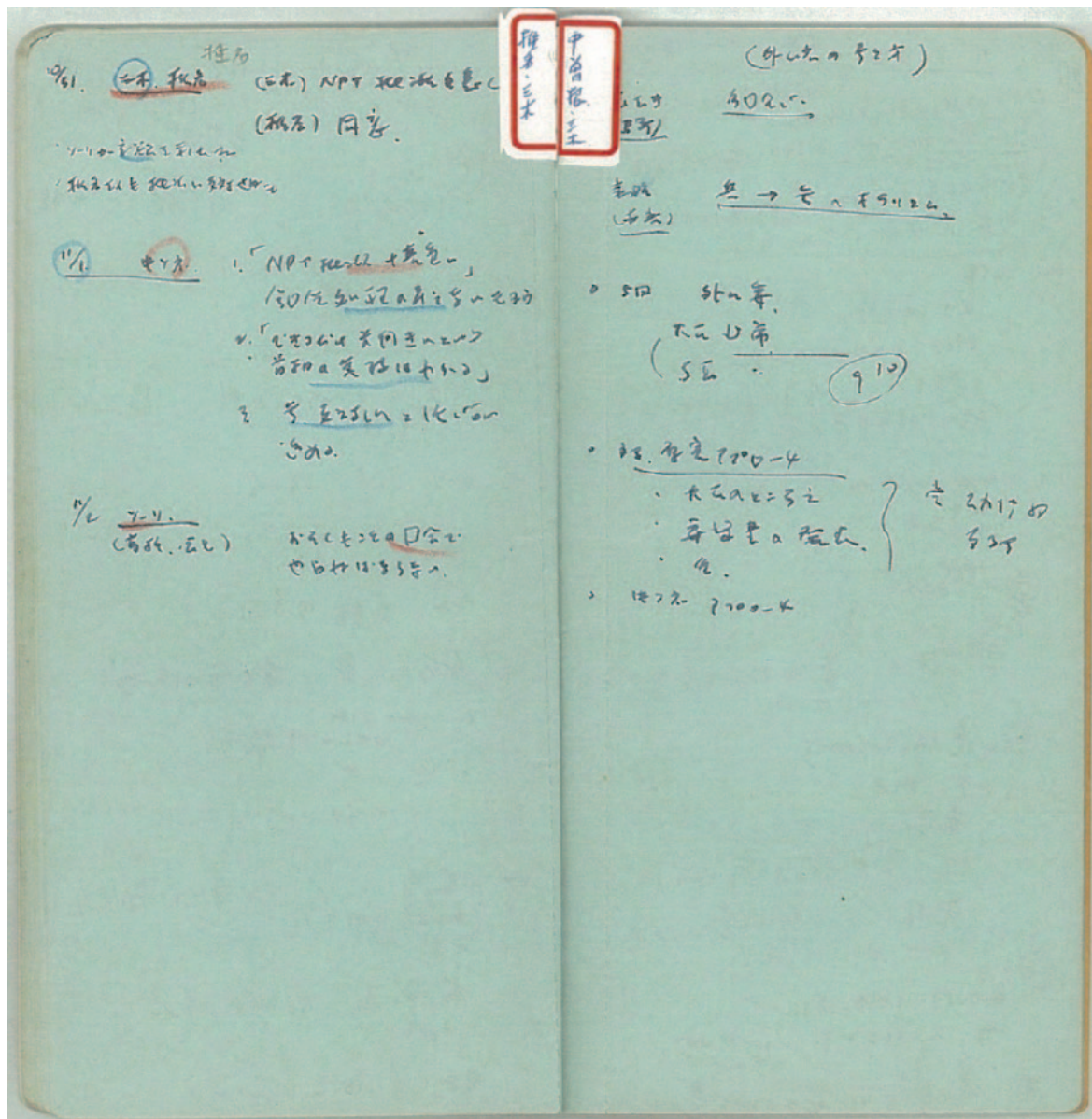
核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

核兵器利用の規制強化
核兵器利用の規制強化

【軍縮室長時代のメモ】NPT 批准の妥当性 (1975 年 10 月)



【軍縮室長時代のメモ】臨時国会中の党執行部（1975年10月～11月）

略 歴

1935（昭和 10）年	2 月	東京都に生まれる
1954（昭和 29）年	4 月	東京大学文科 I 類入学
1959（昭和 34）年	9 月	外務公務員採用上級試験
1960（昭和 35）年	3 月	東京大学法学部卒業
	4 月	外務省入省
	9 月	英国ケンブリッジ大学留学
1962（昭和 37）年	6 月	在ユーゴスラビア大使館
1963（昭和 38）年	7 月	通商産業省通商局通商政策課
	8 月	（兼）通商産業省重工業局電子工業課
1964（昭和 39）年	11 月	外務省国連局政治課
1968（昭和 43）年	4 月	在国际連合代表部二等書記官
1971（昭和 46）年	7 月	大蔵省主計局主計官補佐（主査）
1973（昭和 48）年	7 月	外務省アジア局南東アジア第一課首席事務官
1975（昭和 50）年	1 月	外務省国連局軍縮室長
1976（昭和 51）年	8 月	在インドネシア大使館一等書記官
1977（昭和 52）年	4 月	同 参事官
1978（昭和 53）年	7 月	在スウェーデン大使館参事官
		（兼）在アイスランド大使館参事官
1980（昭和 55）年	6 月	在インド大使館参事官
1983（昭和 58）年	6 月	外務省大臣官房在外公館課長
1985（昭和 60）年	2 月	国際協力事業団青年海外協力隊事務局長
1987（昭和 62）年	8 月	在オーストリア特命全権大使
1989（平成 元）年	11 月	外務省大臣官房付
1990（平成 2）年	1 月	国際協力事業団理事
1992（平成 4）年	5 月	在ナイジェリア特命全権大使
1995（平成 7）年	10 月	在アイルランド特命全権大使
1999（平成 11）年	2 月	依願免本官

「核不拡散体制の成立と安全保障体制の再定義」プロジェクト

数原孝憲 オーラル・ヒストリー

〈目次〉

〔数原孝憲 略歴〕

はしがき	1
質問票	3

《第1回》

生い立ち	17
外交官を志す	19
外務省入省	23
ユーゴスラビア大使館	26
通産省出向	27
国連局政治課／国連代表部	29
大蔵省出向	32
南東アジア第一課	33

《第2回》

軍縮室長就任	37
外務省内におけるNPT批准方針の確認	38
三木内閣の外交方針	41
省外への働きかけと役割分担	42

《第3回》

軍縮室長就任前後の状況	49
国会提出に向けた外務省内の議論	51
自民党への根回し	52
アメリカとの関係	57
宮澤外相訪米（1975年4月）	60

《第4回》

NPT第1回再検討会議	67
通常国会での審議	73
通常国会後の議論	75
臨時国会での審議(1)	79

《第5回》

臨時国会での審議(2)	85
審議再開から批准にかけての経緯	90
自民党以外への根回し	92
核問題の展望	96

はしがき

本オーラル・ヒストリーは、政策研究大学院大学において、科学研究費基盤研究（A）「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト（平成29～33年度）の一環として行われたものである。このプロジェクトの前段階には、「NATOにおける核共有・核協議制度の成立と運用」というプロジェクトがあった。これは、私の本来の研究領域である冷戦期ヨーロッパ、その中でもNATOの安全保障政策の中で、核兵器が果たした役割を理解しようとしたものであった。NATO諸国の核の在り方に関するいくつかの大きな決定が、1960年代末から70年代初頭にかけて下されており、それらの相互関連を解きほぐしていくと、68年の米英ソによるNP（核不拡散条約）署名が、大きな節目であったことが分かってきた。この米ソ間の取り決めと矛盾しない形で、米ソが作った枠組みの中でのみ、NATO、ひいては西ドイツの核兵器や核戦略協議への関与が許されたのであった。その意味で、NPは冷戦の中の時代を画する大きな節目であったと思う。

この節目は、NATO諸国だけではなく、およそこの国際体制の全てのメンバーに影響した。アメリカの新しい同盟国であった日本は、当然大きな影響を受けた。しかし、従来NPは軍備管理・軍縮政策の一環として研究されてはきたが、安全保障との関わりから

は、それほど研究されてきたわけではない。そのため、本プロジェクトでは、日本を含む主要国が、NPに加盟するか否かの選択をするにあたって、自国の安全保障についてどのような考慮をしたのかを解明しようとしている。

当時の外交文書は少しずつ開示されてきているが、やはり実際に政策決定の中核にいた方の証言を頂くことは、何よりも貴重なことである。その意味で、日本がNPを批准した時の、外務省国連局軍縮室長であられた数原孝憲氏の証言をうかがうことが出来たのは、大変幸運であった。しかも数原氏は、当時、克明な記録を手帳にとっておられ、それを大切に保存しておられた。我々は、その手帳の記述を辿りながら、1975年から76年にかけての、批准が実際にどのような過程を経て実現したかを詳細にお聞きすることが出来たのである。政策決定過程の記録を残そうとする文化が希薄な日本において、NPのこの局面に関しては、かなり正確な記録を残すことが出来たと思う。今後の政治外交史研究に資するところがあれば、望外の喜びである。

岩間陽子（政策研究大学院大学教授）

質 問 票

1. 1975（昭和 50）年 1 月に国連局軍縮室長に着任されます。着任の経緯や着任直後の状況を、NPT 批准関係を中心にお話ください。
2. 1975（昭和 50）年 2 月から 4 月にかけて、自民党内で相次いで部会や説明会が開催されます。自民党への説明やその際に行われた議論についてお話ください。
3. 1975（昭和 50）年 2 月から 6 月にかけての手帳によると、日本原子力発電の今井隆吉氏や防衛研修所の桃井真教官、蟬山政道教授にお話を伺っておられたようです。その経緯や印象に残っているエピソードなどがございましたらお話ください。
4. 1975（昭和 50）年 4 月には自民党への説明と並行して、宮澤喜一外相が訪米し、キッシンジャー国務長官らと会談して日米安保の意義を再確認しています。この訪米の意義や影響はどのようなものだったのでしょうか。
5. 1975（昭和 50）年 5 月には NPT の第 1 回再検討会議が行われます。会議への対処方針はどのようなものでしたか。また日本は何を重視していたのでしょうか。
6. 1975（昭和 50）年 4 月 25 日の国会提出後、6 月まで主に衆議院外務委員会で NPT の質疑がなされます。どういった点が取り上げられ、最終的に中曽根幹事長はどのようにして継続審議を決定したのでしょうか。
7. 1975（昭和 50）年 9 月 22 日に来日した SALT の首席代表を務めていたジョンソン大使が説明に訪れます。この訪日の経緯や意義についてお話ください。
8. 1975（昭和 50）年 9 月から 12 月にかけて臨時国会が行われていますが、この間に NPT 批准に関してどのような動きがあったのか、また外務省として NPT 批准に関してどのような点を重視されていたのかについてお話ください。
9. 1976（昭和 51）年 3 月には衆議院外務委員会での審議が再開され、5 月に審議を終えて 6 月に批准に至りました。この間の議論等についてお話ください。
10. 自民党以外にも、大使は野党各党への説明も担当されていたかと思います。どのような点を中心に説明をされたのか等、ご記憶のことについてお話ください。
11. 国会以外にも、産業界やメディアなどにも説明をされていたかと思います。どのような点を中心に説明をされたのか等、ご記憶のことについてお話ください。

1. 1975（昭和 50）年 1 月に国連局軍縮室長に着任されます。着任の経緯や着任直後の状況を、NPT 批准関係を中心にお話ください。
-

■大使作成クロノロジーより転載

1974.11 木村外相：積極的意向

仏（8 回）・英（地下）・中（大気）・印（地下）核実験

1974.12/1 椎名裁定（三木総裁指名）

1974/12/9 内閣発足（宮沢外務・坂田防衛・佐々木科技・井出官房長官・中曽根幹事長・灘尾総務会長・松野政調会長）

宮沢大臣：総理は進めたい意向

注記 1

省内議論（1 月 前任野村室長からのブリーフ）

大臣・幹部間の協議：批准せざるを得ないで一致。

理由①署名から 5 年間国際的に見て放置できない（対日不信感）

②日米安保で安全確保（NPT は Vital な条約ではない）

③核燃料確保・核軍縮推進にプラス

④フリーハンド論は実態のない見せ掛け

次官：もっと歯切れの良い説明理由はないの

有田外審：正直ベースではこの程度

■参考

・当時の外務省関係者

宮澤喜一 外務大臣

東郷文彦 事務次官（→1975.8.15：佐藤正二）

有田圭輔 外務審議官

大川美雄 国連局長

大塚博比古 国連局参事官

小林智彦 政治課長

数原孝憲 軍縮室長

山田順三 軍縮室首席

岩佐、笹島、辻本：軍縮室員

2. 1975（昭和 50）年 2 月から 4 月にかけて、自民党内で相次いで部会や説明会が開催されます。自民党への説明やその際に行われた議論についてお話をください。

■大使作成クロノロジーより転載

1975.1.20 三木・宮沢演説に批准推進挿入／両演説は一方的、党に相談なし／安保調査会は慎重論、党幹部（中曽根幹事長）怒っている

1.31 安保調査会

2.5 中曽根派説明会

2.8 外交・安保・科技合同部会（1）

3.4 合同部会（2）

3.14 合同部会（3）

3.25 青嵐会（中尾栄一・中川一郎）

3.28 合同部会（4）

4.7 合同部会（5）

4.18 合同部会（6）宮沢訪米報告

4.23 政調国会提出決定・要望書採択・総務会保留（3 役協議）

4.25 総務会提出決定 ※大使の手帳（No.4）に議事録あり

注記 2

核不使用問題（自民党内提起）：日本の核放棄に見合った原資（含核軍縮）を核保有国から取れ

① 日本の一方的アピールではダメ（注記 3 参照）

② 中・ソ・仏からバイのネットワークで（日中平和条約に入れるなど）取れないか
バイの提起無理（大臣説明用）理由①対ソ：日米安保解消を言われるだけ②対中：
中は核不使用を表明、NPT 参加期待できず NPT 絡みでの提起は不可③対米：本
文の答通り

得られた結果：①一方的アピール（国会決議・政府声明）②再検討会議（注記 5
参照）

注記 3

中曽根・キッシンジャー論争

①（中曽根提起）核不使用（核不脅迫）を安保理又はバイで米・中・ソから取れない
か（中曽根：自分が「キ」に話し「キ」は返事すると約束した。NATO がある独と
は異なる）

※大使の手帳（No.3）に議事録あり

② 提起に反応無し、黙殺は怪しからんと中曽根（桃井真）

3. 1975（昭和 50）年 2 月から 6 月にかけての手帳によると、日本原子力発電の今井隆吉氏や防衛研修所の桃井真教官、蠟山道雄上智大学教授にお話を伺っておられたようです。その経緯や印象に残っているエピソードなどがございましたらお話をください。
-

■参考

手帳（No.2）の 2 頁目より

2/21 桃井

⋮

points

1. 爆弾ではなくシステムだということ

⋮

2. 日本における核の問題

⋮

3. 日米関係と NPT

(1) 米国からみて

⋮

(2) 日本からみて 対米不信（自民党リーダーの対キッシンジャー
ベトナム、インドシナ、通貨、石油 外交不信）
沖縄以後

4. 1975（昭和 50）年 4 月には自民党への説明と並行して、宮澤喜一外相が訪米し、キッシンジャー国務長官らと会談して日米安保の意義を再確認しています。この訪米の意義や影響はどのようなものだったのでしょうか。

■大使作成クロノロジーより転載

1975.4.9-13 宮沢訪米

4.18 合同部会（6）宮沢訪米報告

注記 4

合同部会（6）宮沢訪米報告

① 日米安保堅持・強化を評価

② 批准尚早 1 年待てないか議論（核持込容認国内議論不十分・批准 3 条件未充足）に
対し

（宮沢大臣：党で 4 ヶ月議論した。1 年待っても同じ、指摘問題点は政府が今後努力
する）

■参考

「朝日新聞」1975 年 4 月 12 日 1 面より抜粋

宮沢外相とキッシンジャー米国務長官による日米外相会談は十一日午後一時（日本時間十二日午前二時）過ぎから米国務省で開かれ、三木首相の訪米、日米安保体制の維持、インドシナ問題などについて協議した。……日米外相会談は、昼食をまじえ午後三時過ぎまで約二時間にわたって行われた。……日米安保体制の問題については、核拡防条約の取り扱いをめぐる、自民党内で日本の安全保障が問題となっている点を説明し、米国側の確約を求めた。この点について、日米双方の間で①安保条約は引き続き堅持するのがお互いの利益になる②米国の核能力は日本に対して考えられる攻撃に対する抑止力である③米国は核兵力、通常兵力による武力攻撃があった場合、日本を防衛する条約上の義務を重視する。また安保条約に伴う日本の義務を引き続き履行する、の三点について意見の一致をみた。

宮沢外相は、この日米合意について「満足できるもの」と述べており、この合意をテコに「核拡防条約批准にあたって、安全保障への配慮が十分でない」とする同条約批准消極派の説得にあたり、今国会での同条約批准を強く進めることになる。

5. 1975（昭和 50）年 5 月には NPT の第 1 回再検討会議が行われます。会議への対処方針はどのようなものでしたか。また日本は何を重視していたのでしょうか。
-

■大使作成クロノロジーより転載

- 1974.3 西独が NPT 批准
1975.2 日 IAEA 保障措置予備交渉妥結
5.5-30 再検討会議・宣言案採択
 （日本案全面挿入）

注記 5

再検討会議外交努力

- ① 開催直前ユーラトム諸国（独・伊・ベルギー・オランダ等）加盟し総数 92 カ国。
日本批准を期待。（国会提出を評価し）オブザーバー参加承認
② 外交努力：非核保有国の安全保障日本案受入れを評価
（自民合同会議：80 点取れた〈有田衆外務委員長〉外務省相当の成果〈北沢外調査会長〉
他）

日本案骨子：イ）安保理決議 255（国連憲章に準拠した対非核批准国核不行使）を
米英ソ再確認 ロ）対非核国武力不行使・非核国の独立安全を保障

■参考

1975 年 6 月 6 日 衆議院外務委員会

河上民雄（社・委員会理事）：（…前略）再検討会議につきまして、外務省は大変満足すべき内容だというように言っておりますけれども、その点については外務省はどのように考えておられますか。

宮澤：再検討会議全体を通じまして、保有国と非保有国との間の義務と責任が均衡したものでなければならないといったような指摘、それから保有国に対して軍縮を呼びかけたような点、それから保有国が非保有国に対して、あるいはいかなる国もでございますが、通常兵器または核兵器による武力または武力の脅威を与えてはならないことを勧告するといったような点、それから保有国の一部に対していわゆるボランティアサブミッションを受けるべきであると申しております点、保有国であって加盟国でないものについて加盟を呼びかけた点、あるいは平和利用について積極的な提言をしておる点等々、まず各要素につきまして満足すべきものというふうに判断しております。

6. 1975 (昭和 50) 年 4 月 25 日の国会提出後、6 月まで主に衆議院外務委員会で NPT の質疑がなされます。こういった点が取り上げられ、最終的に中曽根幹事長はどのようにして継続審議を決定したのでしょうか。

■大使作成クロノロジーより転載

1975.4.25 持回り閣議・国会提出

5.6 衆本会議・趣意説明質疑

5.23 衆外務委・大臣提案理由説明

6.6 衆外務委 (2) 河上・土井 (社)・正森 (共)

6.17 衆外：参考人出席・対総理質疑残審議終了 (衆外委延べ 34 時間)

6.18 衆外対総理質疑残し審議終了

6.19 次国会継続審議確定

中曽根・石橋書記長会談

注記 6

次国会先送りの経緯

①社会党石橋〈中曽根から批准を頼むと言われたのに、党内統制上今国会見送りたい、来国会必ず通すのでよろしくと言ってきた〉

②公明渡部一郎〈国のためにやってきたのに自民党派閥次元の問題で見送りは怪しからん。中曽根幹事長が後ろから銃撃した。〉

社会党は公職選挙法を優先した。中曽根は民社にも謝りに来た

自民党 三木事務所 (総理最後で説得せず)、河野洋平事務所 (日韓大陸棚・日中平和条約等批准案件を出し過ぎた)

■参考

石橋政嗣：社会党書記長

渡部一郎：公明党衆議院国対委員長

衆議院外務委員会 (途中交代含む)

委員長：栗原祐幸

理事：石井一、鯨岡兵輔、小林正巳、水野清、毛利松平、河上民雄、正森成二

委員：宇野宗佑、小坂善太郎、原健三郎、福田篤泰、細田吉蔵、加藤紘一、坂本三十次、正示啓次郎、住栄作、竹内黎一、谷垣専一、戸井田三郎、登坂重次郎、勝間田清一、土井たか子、渡部一郎、永末英一

7. 1975（昭和 50）年 9 月 22 日に来日した SALT の首席代表を務めていたジョンソン大使が説明に訪れます。この訪日の経緯や意義についてお話をください。

■大使作成クロノロジーより転載

1975.9.22 ジョンソン大使来日・SALT ブリーフ

■参考

※ その他の日米の取り組み

1975 年 8 月の三木・フォード会談の際の共同新聞発表

「核兵力であれ通常兵力であれ、日本への武力攻撃があつた場合、米国は日本を防衛するという相互協力及び安全保障条約に基づく誓約を引続き守る」

8. 1975（昭和 50）年 9 月から 12 月にかけて臨時国会が行われていますが、この間に NPT 批准に関してどのような動きがあったのか、また外務省として NPT 批准に関してどのような点を重視されていたのかについてお話しください。

■大使作成クロノロジーより転載

1975.11.1 各紙朝刊：三木・椎名会談 批准急ぐ

12.17 衆外委継続審査決定 三木総理：党内次国会批准の方向

■参考

1975 年 10 月 24 日 衆議院予算委員会

渡部一郎（公）：自由民主党の党幹部は、聞くところによれば、というのは新聞報道によれば、本国会におきましては核防条約を取り扱わない、推進しない、こういう意思を表明されたと伺っておりますが、その点はどうですか。

三木：いま国会の外務委員会にかかっておるわけですから、当然に外務委員会としては、この法案の審議を進めていく責任を持っておると私は考えます。

渡部：外務委員会を指揮しているのは、自民党の国対であり、議運であり、そして自民党の幹事長です。彼らの意思がまとまらなきゃ自民党の理事でどうしようもない（…中略）

三木：核防条約は早期に批准すべきものである。私の考え方は変わりません。

渡部：それは今国会でやるという意味ですか。

三木：今国会において外務委員会の審議を促進してもらいたいという強い希望を私は持っております。

渡部：審議を促進すると言っても、審議を促進して継続審議をまたやるという意味じゃないかとか受け取れませんですよ（…後略）

9. 1976（昭和 51）年 3 月には衆議院外務委員会での審議が再開され、5 月に審議を終えて 6 月に批准に至りました。この間の議論等についてお話しください。

■大使作成クロノロジーより転載

1976.2.16 ロッキード事件（衆予委証人喚問始）

3.5 衆外委審議開始

4.6 衆外委打合わせ：未批准の問題点説明

4.23 衆外委（2）：総理出席質疑終了

4.27 衆外委採択：共産反対・付帯決議全党賛成

4.28 衆院本会議採択・参院送付

5.10 参本会議趣旨説明・質疑／参外委（1）

5.18 参外委（2）

5.21 参外委採択：共産反対・付帯決議全党賛成

5.24 参院本会議承認・国会閉幕

6.1 批准閣議決定・政府声明（大臣コメントで修正）

■参考

衆議院外務委員会（途中交代含む）

委員長：鯨岡兵輔

理事：坂本三十次、中山正暉、羽田野忠文、水野清、毛利松平、河上民雄、正森成二

委員：粕谷茂、木村俊夫、小坂善太郎、竹内黎一、原健三郎、福田篤泰、福永一臣、三池信、山田久就、土井たか子、三宅正一、鈴切康雄、渡部一郎、永末英一、松永光、赤松勇、江田三郎、川崎寛治、松本善明、大久保直彦

参議院外務委員会（途中交代含む）

委員長：高橋雄之助

理事：亀井久興、秦野章、増原恵吉、戸叶武

委員：伊藤五郎、糸山英太郎、大鷹淑子、亘四郎、田中寿美子、竹田四郎、田英夫、羽生三七、塩出啓典、立木洋、黒柳明、田淵哲也、源田実、中村利次、星野力、塚田大願、向井長年、安田隆明

10. 自民党以外にも、大使は野党各党への説明も担当されていたかと思います。どのような点を中心に説明をされたのか等、ご記憶のことについてお話しください。

■大使作成クロノロジーより転載

民社賛成・公明消極的賛成
社会未定・共産米ソの陰謀

1975.3.18 永末（民社政審）・戸叶（社）説明
3.28 社会（外交・防衛委）賛成
6.19 中曽根・石橋書記長会談

■参考

当時の野党関係者

衆議院外務委員会の野党理事

河上民雄（社会党）

堂森芳夫（社会党）

正森成二（共産党）

その他の質問に立った主な野党委員

檜崎弥之助（社会党）

渡部一郎（公明党）

永末英一（民社党）

11. 国会以外にも、産業界やメディアなどにも説明をされていたかと思います。どのような点を中心に説明をされたのか等、ご記憶のことについてお話しください。

■数原大使作成クロノロジーより転載

1975.1 日経：ユーラトム並みを
3 原産会議説明
11.1 各紙朝刊：三木・椎名会談 批准急ぐ
11.15 各紙：社会訪米団批准約束
1976.4.7 各紙：批准の問題点、 対日信頼感に傷

■参考

当時の経済界・原子力産業・メディア関係者

土光敏夫 経団連会長

今里広記 日本精工社長

松根宗一 経団連エネルギー対策委員長

有沢広巳 原産会議会長

今井隆吉 原電技術部次長

川島芳郎 核物質管理センター専務理事

岸田純之助 朝日新聞論説委員

数原孝憲

オーラル・ヒストリー

第1回

開催日： 2017年7月11日
開催場所： 政策研究大学院大学

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

数原	孝憲	(元アイルランド大使、元国連局軍縮室長)
岩間	陽子	(政策研究大学院大学教授)
武田	悠	(神奈川大学人間科学部非常勤講師)
白鳥	潤一郎	(立教大学法学部助教)

■ 生い立ち

岩間 今日は数原大使の生い立ちから入省、さらにその後のキャリア全体についてお聞きします。

白鳥 参考までに資料をいくつか用意しました。人事表、キャリアの方の入省年次別リスト、代表的な通史に載っている年表です。
数原 わかりました。思い出しながらお話しします。

岩間 これが霞関会の履歴ですが、「昭和10年生まれ」としか書いていないので、どこでどういうお育ちをなさったかというあたりを少しお話しいただけますか。

数原 生まれは大阪でして、生まれた日は紀元節です。日本中が紅白で祝ってくれたんですよ。昭和10年2月11日に大阪で生まれました。天王寺のそばの長池小学校というところで国民学校1年生になりました。

岩間 御兄弟は。

数原 全部で7人。

岩間 そんなにいらつしやいましたか。

数原 上も下も。戦争中ですから、産めよ増やせよということで。

その中で男は2人で、私は長男、3番目です。

岩間 3番目で初めての男の子ということ。

数原 上2人が姉、下2人も妹。

岩間 大事に育てられたのですね。

数原 そうなんです。いつも姉などにおまえは一人でいいこと

をしていると言われていました。弱虫でした。近所にいじめっ子がいて、わあんと泣かされて帰ってくるとすぐ上の姉が仕返しにやりに行く。2番目の姉は男みたいで。至って気弱な弱い男性でした。

岩間 御両親はどのような御職業ですか。

数原 父親は三越です。それで、戦争中、中国の海南島というところに三越の支店をつくりまして、そこにずっとおりました。その前の支那事変の時には応召して広東でおりましたけれども、僕は行かなかった。父親だけが行って、戦争の翌年に引き揚げて帰ってきました。

岩間 大阪の三越はどこにありましたか。

数原 高麗橋かな。僕はまだ子供の頃だから、よく知りません。御存じないですか。

岩間 私は神戸なので。神戸は大きくはないですけど三越がありました。JRの神戸駅で、大丸が元町、三宮がそごうでしたね。

数原 それはまた大分後のことですね。私が生まれたのはまだ戦前ですから。

父親が終戦の次の年に海南島から帰ってきて、そのまま愛媛県の松山の支店長になりました。そこで私は愛媛県の師範附属小学校・中学校に通い、中学3年の時に東京に出てきました。区立の新宿二中というところです。

白鳥 それはお父様の仕事の関係ですか。

数原 父親が本店に行ったのです。その後は父親とは関係なしに

私は都立戸山高校に入って、大学に入って、それから外務省に入って、転々と9つほどあちこちと回って、定年退職後はおかげさまで伸び伸びと人生を送っております。

白鳥 幼少期はほとんど戦争時代に重なるのでしょうか。何か戦争中の思い出はございますか。

数原 もちろんそれはいろいろありますけれども、NPT（核不拡散条約）との関係から言えば、私の父親は広島出身なのです。そして父親の唯一の姉だった私の伯母は、8人子供がいたのですけれども、そのうち3人を残して原爆で亡くなりました。

岩間 市内におられたのですか。

数原 市内と言っていました。残ったのが、疎開をしていた男の2人の兄弟と、結婚して市内にはいなかった一番上の叔母。

岩間 当時ちょうど小学校高学年ぐらいだったかと思いますが、原爆のニュースはどのように聞かれましたか。

数原 原爆が落ちた時のことです。まだ小学5年生ですのであまり記憶にはありません。それよりも終戦で、もう機銃掃射をやられたり近くに爆弾が落ちることはない、やっと戦争が終わったなという感じの方が強かったですね。

白鳥 疎開はされていなかったのですか。

数原 大阪の小学校から和歌山県に1年間疎開して、そこから今度は縁故疎開で母親の生まれた愛媛県の宇和島の小学校に入りしました。明倫校というところです。そこで父親が松山の支店長になって、それから後はずっと父親についてあちこち行きました。

武田 そうすると、戦争が始まる前もお父様について海外に行かれたことはなかったのですか。

数原 私自身はありません。父親は支那事変で広東に3年ほどおりましたし、帰ってきた後は海南島に三越の支店を出すというところでそこに行っておりますが。

岩間 単身赴任ですか。

数原 ずっと。それで終戦の次の年に帰ってきました。

岩間 では、初めてお父様にお会いになった時の御記憶はございますか。

数原 小さいながらも父親の記憶はある。

岩間 何かお土産はありましたか。

数原 いろいろありましたけれども、疎開に行く時に巻紙で長い手紙を書いてくれました。これから引率の先生、随分仲よくしてもらいましたけれども、その先生を父と思って良い国民になれというものです。父母ともクリスチャンで、大阪の教会で知り合っておりまして、私の家族はみなキリスト教信者です。

岩間 カソリックですか。

数原 いや、メソヂスト。母は私の家のすぐそばの教会の創立者の1人で、ずっとそこにおります。その後、外務省に入った後にイギリスのケンブリッジ大学に2年留学し、その時に出会ったドイツ人の女性と結婚しました。

岩間 奥様はその時に留学されていたのですか。

数原 ジュネーブ大学でディプロマをとっていたのですけれども、

英語もやらなくてはということでは1年ほど来ていた。その時に偶然知り合ったのです。それが1960年。

岩間 当時のイギリスに日本人が行くのはなかなか御苦労が多かったかと思います。

数原 本当そうですよ。一番困ったのが、言葉が全然通じないことです。日本で英語は随分勉強したのですが、教えている先生が喋ったことがない。土地や人の名前はやはり耳から入るのと字面を読むのでは違います。最初は講義を聞いても全く何もわからなかった。しかしいまでしたら1週間休暇があるからと女性がい物で旅行に行ったりしますが、その頃は1ポンドが1008円ですし、羽田から北回りの飛行機もない。

岩間 ロンドンの地下鉄が幾らだったかご記憶ですか。

数原 大学の費用や食費については記録を残しています。

岩間 このレートですと相当な授業料になりますね。

数原 そうです。だから外国に行くのは安くなった。ちなみに、私が外務省に入った時の初任給が1万円なかつたです。それがイギリスに行くと7〜8倍になる。しかし給料はむしろ日本に送って妹の学費の助けなどにしました。大変な時代で、羽田から出る時には水杯で、もう帰ってこないぐらいのつもりで送り出されました。

岩間 香港経由で行かれたのですか。

数原 まず香港、それからバンコク、カラチ、カイロ、アテネ、ローマと移動です。1週間ぐらいかかる。いま13時間、14時間と

乗っているともう着くのは雲泥の差です。そういう時代でした。

岩間 途中でカイロなどの街中をごろんになる機会はあったのですか。

数原 着いたら大使館の人が来られていますが、1泊か2泊ですから、物見遊山はできない。

ただ私は外国が初めてで、子供の頃から行きたかったのです。そのための唯一の道が外務省。それで一生懸命になりました。

■ 外交官を志す

白鳥 順番がちよつと前後しますが、大学時代に外務省を志すと決められたのですか。

数原 そのあたりのことについては日記があります。外交官試験受験の記というのを2年間書きました。普通は4年ですが、私は東大に6年間（3年駒場、3年本郷）いたのです。文Iに入って、法学部に進んだのですが、受験の後で伸び伸びと好き放題コースをして、それをいまだにしているのですが、勉強はちつともしなかった。

岩間 そうすると御入学が昭和29年になるわけですか。

数原 ええ。ですから私は入学は19歳で、25歳で外務省に入ったわけです。最初の3年間は本当に歌、歌、歌で、指揮者をしたり、合宿に行ったり。ちよつとのんびりしすぎました。

後半の3年間になると、日記に外務省、外交官という文字が出

てきます。1年目は失敗して、2年目に合格しました。なぜそれを志したかという、一つは外交官試験の試験官だった高野雄一先生という国際法の先生の講義に触発されたことです。

岩間 どんな講義だったのですか。

数原 国際機関を特に詳しく講義していて、それがおもしろいと思った。普通のサラリーマンにはなりたくなかったというのもありましたし、父も大正か昭和の初期に、英国の皇太子が来た時の通訳をしているのです。その頃の写真も調べていたら出てきました。昭和の初めですね。そういうことでした。

岩間 では、外に出たいというお気持ちが強かったのですか。

数原 そうです。外に向かって私の人生を開いていきたいなという気持ちが強かった。そこに高野先生の授業があり、一番上の姉もアメリカに留学した。母親もできれば外国に行って勉強したかったが結婚した。

岩間 お姉さまはアメリカのどちらに行かれたのですか。

数原 アメリカのシカゴに行っていました。その頃は勉強しようにも言葉が通じないので。私も英語を母国語としてまともに喋る人がいないのですから、その頃近所にいた米軍紙 *Stars and Stripes* の記者のところに行って英語を学びました。学校の英語の先生は英語を喋ることができず、外国に行ったこともないという時代ですから。外国が遠かったのです。それでも外で自分の道を切り開いていきたいなと思ったのですが、そうなる外交官試験しかなかった。

岩間 大変だったと思いますけれども。

数原 本当に大変です。さきほどの日記を読むと、1回目の失敗の後、親父にもう1回勉強させてくれと頼んでいます。親父ももう三越をやめて母親も苦勞していた頃で、いつまでもすねをかじっているわけにもいかなかったので、必死で就職活動をしました。外交官試験の他に、労働省ぐらいなら外国に行くチャンスがあるかなと思って公務員試験も受けましたし、住友商事など商社も受けました。そこには後から外交官試験に受かりましたから失礼いたしますと謝りに行っています。外交官試験に合格してようやく、ああこれで就職活動しなくていいと思って、谷川岳の東大の寮へ行つてのんびり寝転がっていました。

岩間 私の両親の時代でも、まだ外交官になるには実家がお金持ちじゃなきゃいけないと言われていました。

数原 それはおっしゃるとおり。必ず近所に調べに来るのです。それが来るか来ないかわかる。私の祖母など、そういうのが来るかもしれないからといって毎朝道路を一生懸命になつて掃除をしてくれていました。家族みな、今度こそは受かってくれと思っていた。

岩間 その頃ご自宅はどちらにあったのですか。

数原 新宿です。中学3年で移ってきて、いまに至るまでずっとそこに住んでいます。そこから都立の戸山高校に入つて、大学に入つて、官僚になつてと、何とかして行くところまで行きたいなと考えていた。それは両親の願いでもあったし、サポートとして

もらいました。

岩間 御両親はイギリスにはいらっしやらなかったのですか。

数原 来ました。イギリスだけでなくドイツにも来た。逆に家内の両親も日本に来た。僕は外交官として9カ所、国外を回りましたけれども、家内の両親も私の両親も、スウェーデンからジャカルタからウイーンまで、全て来ました。私の親父がまたそれを一々克明に書いて本として出すんです。

岩間 おもしろいお父様ですね。

数原 そうですよ。親父は半分絵描きで、三越をやめてからも絵を描いていました。

岩間 三越では特に何か御専門はあったのですか。

数原 美術。三越はお茶や絵の先生を育てるところでもありまして、その後名を成した荒川豊藏さんという志野焼の大先生や、小山富士夫さんという陶芸の大家がいます。親父はそういう方の育成に関わっていて、しかも時代は右肩上がりだった。

岩間 一時、日本のものを下に見るような時代にはボストン美術館など海外に日本の美術品が随分流出しましたね。

数原 私がスウェーデンの大使館に行った時も、日本の刀や槍がスウェーデンの美術館にありました。戦後直後、そういったものが二束三文で買えたのです。アメリカ軍の兵士も軍票で買えた。その後、日本の円が強くなった時に日本はニューヨークなどのマンシオンを買い占めた。いまは中国が日本で同じことをしている。そういった形で、経済の力が文化に影響を与えていた。

岩間 お父様が扱っていらした美術品は日本のものに限っていなかったのですか。

数原 日本のものが多いですね。だから私の家にも結構いいものがあります。

岩間 そういうものに親しみながら大きくなっていらしたという面はおありなんですね。

数原 やはり文化というのは、経済が好調で豊かな時代でないと花が開かないということは感じます。

白鳥 そうした環境で成長されて、外交官試験に合格されたのは法学部の4年生の時ということですね。

数原 そうです、4年生の時に。

白鳥 日記を拝見しましたら、1957年8月14日の日付のところに外交官と書かれています。ちょうど夏休みの頃でしょうか。

数原 一次試験と二次試験がありましたからね。しかし受かるかどうかかわからない。大学入学時も自信を持っていたわけではなく、実際に入学した後はのびのびし過ぎて、そこからまた引き締めるのは大変でした。最後の3年間は必死になって勉強しました。

白鳥 法学部で何か印象に残っている授業はございますか。

数原 法学部では宮澤俊義先生の憲法。コンメンタールを見ていたら、人間は全て法の下に平等だ、その考え方の唯一の例外が皇室だとはつきり書いてある。そういうのはやはり頭に残っています。彼は別に皇室に反対していたわけではないのですが。三つ子の魂百までではないけれども、宮澤先生の憲法の話は頭に残って

います。それから我妻榮先生の民法とか、団藤重光先生の刑法などです。

岩間 後光が差ししてくるようですね。

数原 みんな立派な本を書いている。しかし勉強しなかったので惨憺たる成績でした。

岩間 では、外交は高野先生と、他に先生はおられましたか。

数原 それから田岡良一。田岡先生で頭に残っているのは、国際平和を実現しようと思ったら、国際法の立場で言うと法の支配だけだと先生の本に書いてあったことです。それはどういうことかというと、国際司法裁判所の36条の強制管轄権を受けることに尽きるということです。日本は受諾しましたが、安保理常任理事国ではイギリスだけです。いまの南シナ海での中国や北朝鮮の問題もそうですが、法の支配が通じないことも珍しくない。

岩間 政治学の先生はどういう方がいらつしやいましたか。

数原 外交史の岡義武さん。すごかったのはヨーロッパ史です。外交官試験のための勉強では、こういった講義が生きたかもしれせん。

トインビーの会への寄稿にも書きましたけれども、外交官試験の勉強をする時に一生懸命読んだのがモーゲンソーの *Politics Among Nations* です。これは私の外交官生活で一番役に立ちました。まず試験では、2回目に受けた時、英語の自由作文がナシヨナリズムだったので、いわば当たりを引いた。書くことがあり過ぎて困ったぐらいです。

この本では、第一次世界大戦後に国際連盟ができるものの、結局ナチの前に機能不全に陥る経緯を読んで、理想主義も実際にはなかなか役に立たないというのを印象づけられました。当時は武力で何も解決できずに負けた日本の歴史を見て、同じ轍を踏まずに国際連合へ、という理想論に傾いていたのですが、モーゲンソーの著作を読んだ後、そうではないという考えになって外交官生活を過ごしました。

岩間 理想主義抜きでもできませんが。

数原 まあね。現場では現実主義でも、それを学者や政治家が言ったところで国民の支持はなかなか得られない。

岩間 日本の国連加盟は1956年ですね。

数原 そうですね。私が外務省に入ったのが1960年ですから、大学時代のことでした。

白鳥 大学時代にはさまざまな政治的な出来事があったかと思いますが、何か印象に残っていることはありますか。

数原 たとえばフルシチョフ。

岩間 スターリン批判ですか。

数原 スプートニクも打ち上げたし、後にはアメリカのジョン・F・ケネディ大統領との会談があった。

岩間 日米安保改定についてはいかがですか。

数原 外務省に入った年ですね。友人はみんな安保反対で運動をしていましたが、私はもう現実主義になり、外務省に入ったわけです。

岩間 大学の授業も影響を受けたものではありませんか。

数原 安田講堂を占拠した、入学試験が中止されたというのは私が出た後の1960年代末ですから、国内政治に煩わされることはなかった。

岩間 私が京都大学にいた時は、まだそういった学生運動の生き残りがいました。時々授業にヘルメットをかぶった人が入ってきて、全然関係ない話をすることもありました。

数原 そうですか。田岡先生はまだおられましたか。

岩間 いえ、もういらつしやいませんでした。

数原 それでは、あなたにとつての先生は。

岩間 私は高坂正堯さんです。

■ 外務省入省

武田 当時、外交官試験の勉強はどなたか他の方と一緒に勉強されていたのでしょうか。

数原 やりました。私が一緒に勉強しようという人を集めてグループをつくったら、そのうち2人が1年目に受かった。私は経済学が弱くて落ちました。他にはさきほど触れた米軍記者の方のところで英語の勉強もした。6〜7人で勉強会をしたのですが、私の1年上から1年下くらいの間で大体入っています。

白鳥 どういった方々でしょうか。

数原 中村昭一さんが昭和33年度。私は34年度。その一つ上だと

荻田吉夫さん、野々山忠致さん。湯下博之はフィリピン大使。こういう連中と一緒に徒党を組んで一緒に勉強しました。私どもの期では片倉邦雄とか、阿曾村邦昭も仲間です。

岩間 では、入省なさったのが4月で、当時はすぐ留学に行かれたのですね。

数原 25歳で4月に入って、3カ月の国内研修の後に、皆それぞれ各地に散っていくわけです。言語としては、普通はフランス語、英語、ドイツ語が一番多い。その他に特殊語学として、私らの頃からアラビア語が入りました。

白鳥 片倉大使ですね。

数原 片倉、田中民之君の2人。

白鳥 アラビア語の第一号だった。

数原 そうですね。それからスペイン語も。その頃はまだ韓国語はなかった。中国語は谷野作太郎。後は英語がアメリカ組とイギリス組に分かれる。

白鳥 希望を出されるのですか。

数原 出すけれども、行き先は外務省の人事課が決めるのでそのとおりにはならない。

白鳥 いつ頃わかるのですか。

数原 すぐです。4月に入って、3カ月の国内研修に決まります。

白鳥 国内研修はどういう内容だったのでしょうか。

数原 あちこち行きました。日本文化、日本経済の勉強から美術館見学まで様々です。

岩間 研修所はありましたか。

数原 ありました。外務省の中じゃなくて、茗荷谷の研修所です。その頃の写真もとってあります。

その後、3ヵ月後に外国に行くこの仕組みは変わりました。憶測ですが、外国人と結婚する人が多かったからではないかと思えます。私もそうでしたし、私の前後にも2、3人いました。外国語がまだわからないまま、とにかく言葉を身につけて行ってこいといって外国に送り出されると、そのために一番いいのは女友達をつくることなのです。それでは日本の外交官として良くないということかもしれません。その後は3ヵ月間の国内研修の後、本省の各部署に配属されるようになりました。そこで3年ぐらいたつと外国に行く。

武田 当時は、大使以外に同期、前後の期で入省前に外国に行つたことがない方はおられましたか。

数原 みんなそうです。外国に行くのはまず金銭的に大変ですから。1ドル360円の時代です。お父さんが外交官の人は別ですが。

岩間 ケンブリッジにお着きになったのがいつですか。

数原 1960年9月です。

岩間 向こうでカレッジに入られたわけですか。

数原 ペンブロック・カレッジです。いまでも仲が良く、カレッジに寄附をしたり、カレッジのクワイアが日本にやって来た時にはそこに出かけて行きます。東京にも Pembroke College Society of

Japan があり、これに加わりました。このカレッジには日本大学がたくさんの学生を送り込んでいまして、大きなドミトリもつくられています。

岩間 当時、他に日本人はいましたか。

数原 外務省の人を除いてほとんど誰もいない。行ったらマレーシア人と間違えられました。ケンブリッジの連隊の人が、第二次世界大戦中にビルマで日本軍にやられた過去がありますから、随分びくびくしていました。1960年というのはまだ戦争のことを引きずっているのです。戦争は悪い影響を残すのだと実感しました。

デートばかりしていたペンブロック時代ですか、その時のことを文章にしてくれと言われまして、「Piece of My Life in Pembroke」というものを書きました。結婚はそれから4年後のことで、一緒にボートを漕いだりと好きなことをしていた、結局 Bachelor of Arts は取れなくて Bachelor of Hearts を取った、といったことを書きました。

岩間 2年間おられたのですか。

数原 2年間です。それくらいでは、最初は全然英語がわからない状態ですから勉強が大変です。一方私の6年くらい上で、ケンブリッジに行かれた小和田恆さんは、4年くらいおられて大学の方から残ってくれと言われるくらいの勉強をした。私の2年上の斎藤邦彦次官もケンブリッジです。そうそうたるメンバーでしたから、私はびくびくしていました。その後、最初の任地はユーゴ

スラビアでした。

白鳥 留学が終わってすぐにユーゴスラビア大使館に移られたのですね。

武田 何年間留学する、というのはどのように決まるのですか。

数原 外務省で決めます。私たちの代からは、アラビア語、ロシア語、中国語といった特殊語学やフランス語の人たちは3年間、その他は全部2年になりました。もう外国で勉強するのは珍しい時代になったのでしょうか。

白鳥 この時期の数年間の違いは非常に大きいですね。

数原 相当です。

岩間 当時のイギリス国内の雰囲気はどのようなものでしたか。ロンドンの大使館に時々行かれていたのでしょうか。

数原 もちろん行きました。当時は大野勝巳大使です。私は借金ばかりしていたので、会計に頭を下げて給料を借りに行っていました。それから僕はケンブリッジで日本語を勉強しているイギリス人たちと一緒にジャパンソサエティをつくりまして、そののサケパーティーが有名になったのです。そのために大使館で一升瓶を2〜3本もらい、それをケンブリッジに持って帰って、バケツに入れて熱燗にして学生たちに振る舞う。そういうことができた時代でした。

岩間 でも、日本食はないですよ。

数原 ないです。

岩間 どうしていたのですか。何をあてにお酒を飲むのでしょうか。

数原 マーケットで買ったクレソンを塩でもんだりしていました。ケンブリッジには先輩もいますし、私の1年後の後輩も来ますので、みんなですき焼きパーティーもしました。

他におられた日本人としては、上野学園の理事長をしていた石橋裕先生という方がいます。詩人でもあって、当時はケンブリッジ大学の日本語の先生でした。その縁で私はいまも上野学園の英語コンテストの審査員をしています。

岩間 ケンブリッジに来るような学生は裕福という時代ですか。

数原 そう。しかし飯は不味かった。当時、私はもう26、7歳なのですが、向こうの大学生はまだティーンエージャーです。彼らは本当にお腹を空かせていて、ポートを漕いだりした後、皿に山盛りになったマッシュポテトをうまいうまいと言って食べるのです。ポテトを潰したただけのものをよくあんなに食べるなんて思っていました。

岩間 服装はきちんとしていると思うのですが。

数原 晩飯は毎日そうでした。

岩間 しかし食事はおいしくないと。

数原 おいしくないとどころじゃない。本当にあんなのをよく食うわいと思っていました。フィッシュ・アンド・チップスもそうですし、イギリスの食べ物是不味いという印象が強いです。しかも当初は1ポンド1008円というレートですからそうそう円を替えられない。それでも十分な手当はもらいましたから、他の学生と比べるとよい生活でした。

岩間 大学での勉強についてはどんなことを覚えていらつしやいますか。

数原 私は国際法を勉強しようと思いました。それで最初の1年目は必死になってまず国内法を勉強しました。しかしこれは結局物にならなかった。最初は講義を聞いても英語がわからないのです。法律といってもイギリスは経験主義というか、判例が重要になる。判例を覚えるだけでも大変です。そこにぼんと放り込まれた。

でも日本を出る時には、そこまで必死になってディプロマをとらなくてもいい、しっかり言葉を見に付けて友達をつくれればいいと言う人が多かった。もちろん一生懸命勉強した人もいたけれども、私はそれどころではなかった。

■ ユーゴスラビア大使館

岩間 その後、ユーゴスラビアですね。これはまだチトーがいた頃でしょうか。

数原 チトーの全盛期ですね。しかも旧ソ連から距離をとって独自路線に行く、労働者階級を中心にした中立外交をすると言っていた時代です。私にとって、とてもおもしろい経験でした。当時はブルガリアもベオグラードの大使館で見えていました。

それで朝10時頃出勤すると、地元のシュリヴォヴィツァ、ラキヤというウォッカのような強いお酒をくいと飲まないと仕事が始まらないのが向こうの習慣です。僕は真面目でそれまでウイスキーも飲んだことがなかった。それがイギリスでのシェリーパーティーで、アルコールの洗礼を受けた。

それから友人を呼ばなくてはいけませんから、ティーカップとソーサー、ティーポットを買いました。乗り捨てた自転車も警察のオークションで買って、夜遅くなって門限の11時を過ぎた時には門を乗り越えたりと、随分と好き勝手なことをしておりました。

岩間 ベオグラードの大使館はどれくらいの大きさでしたか。

数原 人数は6、7人でしたかね。高橋通敏さんという条約局長をした人が大使だった。その下に古沢一彦さんという参事官がいて、それからもう私でした。最初の仕事というのは翻訳ばかりです。2年間でそれができるくらいにはなっていた。

岩間 最初はどのような役職ですか。

数原 最初はまず官補からです。その前に研修官補というのがあって、2年やって初めて大使館に配属になって官補になって、それから2、3年でやっと三等書記官。その後は二等書記官、一等書記官と進みますが、私が一等書記官になったのはインドネシア大使館の時です。参事官が國廣道彦さんでした。

岩間 なるほど。ちよっと休憩を入れましょう。

数原 いいですよ。

(休憩)

白鳥 ざっと略歴を確認しますと、ケンブリッジに行って、その後ユーゴスラビア大使館、その後が通産省の通商局と重工業局ですね。その次が国連局政治課、ニューヨークの国連代表部、大蔵省主計局、外務省に戻って南東アジア一課、そして軍縮室長と続くわけですね。

数原 それで間違いありません。

岩間 ユーゴ大使館は2年間おられたのですか。

数原 いえ、1年ちよつとくらいでした。あの頃はそういうサイクルでした。

岩間 何か大きな事件等はございましたか。

数原 通訳を務める程度でしたが、高橋通敏大使の薫陶を受けました。あなたも御存じだろうと思いますけれども、日米安保改定の時の名答弁で鳴らした条約局長です。その方がユーゴスラビア大使として赴任しておられた。

というのも、その時に大使の秘書のような仕事もしていたのです。大使は勉強家で週に1回くらい本を読まれていて、そのテーマの一つが冷戦の起源でした。その頃、冷戦がどう始まったのかを大使は追っておられたのですね。それで関係する実証的な本を彼が集め、調べるのです。私が封を解いて大使の机の上に置くのですが、本棚にはびっしりと本が並んでいました。それは私にとってもおもしろかったですし、冷戦と言えば後にウィーンにいた時にベルリンの壁が落ちましたので、それもまたおもしろかったです。

■ 通産省出向

岩間 ユーゴスラビアには1年少しおられたのですね。その後は日本に戻ってこられたのですか。

数原 はい。帰国後、通産省の重工業局に出向しました。その頃、たとえば日米関係では繊維交渉が一番大きな問題でした。ワンダラーブラウスが問題になった頃で、繊維産業課に外務省から私の2、3年上の方が行っていました。

重工業局の担当では、自動車、コンピュータ、カラーフィルム、アンペックスという会社のテープレコーダーなどでアメリカの特許が多かった。それで通産省は、いかにアメリカに頼らない国産品をつくるか、競争力のあるものをつくるかを必死になって追求していた。そのためには特許をもらう必要がある。たとえば私が担当したIBMの特許では、交渉して特許をとって、それを元に富士通やNEC、東芝が自前のものをつくりはじめて、私が通産省の電子工業課にいる時に、国産の第1号コンピュータをフィリピンに輸出するまでになりました。

この時、電子工業課では財投資金を集めてJEECというリース会社を設立し、国産のコンピュータを買ってそれを貸すシステムをつくった。東電などはアメリカの優秀なコンピュータや車を欲しがるので、その中で国産品を普及させるために、そういう仕組みをつくったのです。アメリカに追いつき追い越せという時代でした。

こうしてモノの自由化から始まって、その後はカネ、通貨の自由化が問題になる。その次はヒト、労働力の自由化、最後は文化の自由化と続くことになります。これを一步步ずつやっていった。一つに数年から10年はかかりました。ヨーロッパもそういう過程を経てEUにつながったわけです。

ちょうど私が外務省に入った時の外交官試験でも、ヨーロッパに共同市場ができた頃でしたから、集団討論のテーマがアジアにヨーロッパのようなものはできるかというものでした。集団討論というのは、5、6人ずつ受験生を集めて議論をさせ、それを試験官がずっと見ているというものです。あまり出しやばり過ぎてもいけないし、ロジカルに議論ができるかどうかを見られます。

その時、私は、そんなものは当分アジアではできない、宗教も文化も全然違う上に、経済的発展の度合いも違うと主張しました。

それでも通産省に私が出向する頃になると、自由化は進みつつありました。それを見ながら仕事できたのは貴重な経験でした。

白鳥 外務本省で勤務する前にまず通産省に行かれています。このことです。組織の雰囲気や人の違いは感じられましたか。

数原 ありました。通産省では新しい分野でやることがいっぱいあるので、若手が活気づいていたのが印象的でした。若手が集まって勉強会をしたり、集まって飲んだりしていて、下の力が大きい。その点、外務省だと上からのコントロールがある。通産省はいままで言うベンチャー企業のようなところがあったのだと思います。その後は大蔵省が通貨の自由化を担当するようになって、

その次は労働省などがヒトの自由化を担当するようになるわけです。

白鳥 同僚や上司で印象に残っていたり、その後おつき合いのある方などはおられますか。

数原 通産省時代では、私のすぐ上が総括班長でした。それから課長がNEC出身の技官で、さきほど触れた特許の話などを担当されていました。

それから少し後の話になりますが、大蔵省で私が仕えたのが相澤英之主計局長。女優の司葉子さんと結婚された方です。彼はその後政治家になって、私がアイルランド大使になった時に来てくれました。

岩間 通産省には1963年から約1年間ですから、東京オリンピックの頃ですか。

数原 そうです。私が結婚したのは1965年ですけども、東京オリンピックの時には家内が東京に来たのです。西ドイツでチケットを買ってきてくれたので、私も開会式に行きました。当時日本国内では買えなかった。

その時、家内の父親は日本を見てこいと言って送り出したそうです。その頃の日本と言えば、水洗便所もない、コーヒーと言ってもネスカフェのコーヒーしかない、チーズと言ってもプロセスチーズしかない、ワインと言っても赤玉ポートワインしかない、家族は10人くらいで一つの五右衛門風呂を使うといった具合です。父親は繊維関係の会社を営んでいて日本に一度だけ来たこ

とがありますので、諦めて帰ってくるだろうと思って行かせたのではないかと思います。家内は違うと言っていました。

その後、1965年になって国連局政治課にいた私が国連総会で3ヵ月間、東京から出張に行った後の帰りに、ドイツに飛んで結婚した。その後2人で生活を始めて、3年後にはニューヨークの国連代表部に行ったわけです。

岩間 オリンピックで景気が良くなったという感じはありましたか。

数原 それはすごかった。新幹線ができて、駅の名前にも全部アルファベットがついた。もう日本中で土を掘り返して工事をしていましたよ。

白鳥 街の様子もすごく変わったでしょうね。

数原 変わった。通訳をはじめ、人がいっぱい日本を訪れました。オリンピックで日本が外に開かれて、若い人たちが英語を喋るようになり、経済も開かれた。外国で言えばルネッサンスです。そうやって自分に目覚めて、外国のものが怖くなくなって受け入れられるようになる。その契機の一つがオリンピックだった。

うちの家族もそうで、オリンピックの直後にドイツ人の嫁さんが飛び込んできた。最初の頃の生活はひどくて、四畳半一部屋が私どもの生活の場です。寝台一つ入れたら、ベッドメイキングするのに布団から何から荷物を全部庭に運び出さないといけない生活です。

■ 国連局政治課／国連代表部

岩間 国連局に移られるのはその直前の1964年11月なのですね。

数原 11月です。国連局の政治課で課長は吉田長雄さんという人でした。世話になりました。彼にお願いして、国連総会の後にドイツに回る許可をもらって、結婚して連れて帰ったわけです。

白鳥 その時に担当されていたお仕事というのはどういったことでしたか。

数原 国連局政治課で一番大きい仕事は中国代表権問題です。台湾が中国を代表していて、日本はアメリカと一緒にあって毎年の国連総会でそれを擁護していた。中国課は将来の日中関係のためにそこまですけないので、外務省の中では国連局が一番台湾を守ろうとしていて、そのために随分無理もしました。しかしその後、1968年4月から1971年まで私は国連代表部にいるのですが、その間にひっくり返って大陸の中華人民共和国の方が中国を代表することになった。

岩間 少し戻りますが、1964年の東京オリンピックの最中に中国が行った核実験について、どのように記憶しておられますか。

数原 ちょうど国連局政治課に移った直後ですね。地震波などで核実験をしたことはわかるわけですが、あまり記憶にはない。それよりも1974年のインド核実験の方が大変でした。

当時中国課は、経済が発展して、日本が核兵器に関する技術もどれだけ抑えたところで伝播するだろうと言っていました。核は特に、平和利用と軍事利用の区別がつかないですから。たとえばIAEAで保障措置をしても、5年か10年で必ず伝わりますよと言っていましたね。

話し合いで止めることができないことが国際政治にはあると思います。後の話になりますが、1980年代のイラン・イラク戦争でイラクはフランスから調達した化学兵器を使うわけです。それで1991年の湾岸戦争の後、ハンス・ブリクスの国際連合監視検証査察委員会が1999年からイラクによる大量破壊兵器の廃棄を検証しようとしたが査察が妨害されてうまくいかない。結局アメリカも強硬で、私も委員会の一員だったのですが、イラク戦争になって引き上げました。

岩間 1960年代はずっと国連関係の仕事をしていたということでしょうか。

数原 そうです。ずっと国連関係だったですね。

岩間 それは、キャリアとしては割合によくあるパターンで。

数原 どうでしょうか。私としては国連局政治課や国連代表部に勤務して、ウィーンでもIAEAや国際熱核融合実験炉に関する協定に携わって、1990年代にはさきほど触れた査察委員会に加わってと、確かに国際機関関係の仕事が多いですね。

それと私が政治課にいた時のことですが、1964年の第19回国連総会は、これまでで唯一、実質的な流会になっています。問

題は国連の分担金で、収めない場合には投票権がないという規定が国連憲章第19条にあった。私の記憶が正しければ、国連代表権問題で不満を持ったアメリカが分担金を納めないと言いはじめて、そうなるアメリカに投票権がないということになるので揉めに揉めた。それで結局、実質的には総会を開けなかったのです。

当時はまだ軍縮室もありませんでしたので、軍縮問題の他にイスラエル問題など、政治問題は全て政治課が扱っていました。

白鳥 第三次中東戦争の時、ちょうど日本は非常任理事国を務めていました。ちょうど三木武夫外務大臣の時代です。

数原 僕の辞令も三木さんのものです。

白鳥 はい。おそらく大使が政治課におられた頃ではないかと思いますが、第三次中東戦争の際に国連でどう行動するか等をめぐっていろいろと動きがあり、ほとんどの文書に大臣レベルで確認した形跡が残されています。それで三木さん自身の関心が高かったのではないかと思ったのですが、何か政治課での仕事で三木大臣のことは印象に残っておられますか。

数原 むしろ椎名（悦三郎）大臣のことが印象に残っています。彼の通訳をやったのですが、彼の話は通訳泣かせなのです。ロジカルじゃないうえに、質問しても「ああ」「ううん」「はあ」だし、そもそも喋らない。通訳は論理的に喋ってくれないと頭に入らない。政治家はそういうものかもしれませんが、外国人と話をする時もそうなので、通訳泣かせで有名でした。

もっとも、国連関係では総会や安保理で首脳や外務大臣が出席

しますので、偉い人と話す機会がありました。佐藤栄作総理もそうです。そういう時は割に日が当たります。

白鳥 政治課時代には、課内ではどのように担当が割り振られていたのですか。

数原 私は最初、植民地問題を担当しました。当時はアフリカなどで次々に植民地から国が独立して、国連に入ってきていましたので、植民地24カ国委員会というのがあったのです。そこで私も話をしました。

それからPKOも担当していました。その後、日本の女性の方が国連事務局でPKOを担当されたり、日本が人を出す、出さないという話も出てきますが、当時はまだそういう状況ではありません。委員会での議論をフォローして本省に報告していました。

白鳥 植民地問題とPKOの2つを順番に担当されたのですか。

数原 順番というか、その2つを担当しつつ、国連総会が始まったら各国の代表演説を聞いて東京に報告するということです。特に中国代表権問題のことについては、各国が必ず触れますので、報告していました。それからイスラエル問題に関する討論があれば安保理にも駆り出されました。

白鳥 では、この時期はかなり出張が多かったですか。

数原 多かった。その時、私が初めてお仕えたのが緒方貞子さんです。緒方貞子さんが最初に外務省にデビューしたのは、そして国連にデビューしたのは、私が国連代表部に行った1969年だったと思います。緒方貞子さんが政府代表顧問で、私は二等書

記官でした。「廊下トンビ」といって、会場の外でぐるぐる動き回って情報をとる仕事です。緒方さんは第3委員会という文化関係のところの担当で、いやあ、すごい人が来たなと思いました。外務省の人は別にして、民間から来られた人であれだけ英語ができる人はいませんでした。外務大臣でさえ、英語が話せるのは宮澤（喜一）さんが初めてだったのです。

とにかく貞子さんという人はすばらしくて、もう最初から外交官でした。しかも素晴らしいお母さんであり、緒方竹虎さんの息子である緒方四十郎さんのお嫁さんでもあった。代表で3カ月間、国連に住んでおられますので、うちに呼んで食事をしたり飲んだりすることもありました。彼女は東京にせつせと手紙を書いていましたね。お母さんとして、奥さんとして、女性として、素晴らしい方だと思いました。

その後、緒方さんは国連で培ったものを元に国連代表部の公使になられて、国連難民高等弁務官事務所の代表になれるわけです。だいたい後のことですが、外務大臣になってくれという依頼さえあったのですが、彼女はあっさり断られました。ああいった出処進退は見事なものです。

その後も仲良くさせていただいて、私がウィーンに行った時には、緒方ご夫妻が会いに来てくださいました。私もJICAの理事もしましたし、随分緒方先生とはつき合いをいたしました。

■ 大蔵省出向

岩間 代表部におられたのは1971年までですから、アメリカではニクソン・キッシンジャーの時代に入っていますね。

数原 ニクソン・ショックはすごかったです。日本はあれほどアメリカとツーカーだと思っていたのに、何も知らされずに中国に行かれた。もつとも、その方が日本もかえって楽だったかもしれない。行くぞ、行くぞと言われたらまた大変だったでしょう。

その後も金ドル兌換停止で、変動相場制になって、1ドル360円だったのがすぐに220円、210円と下がっていった。私はその頃になると、大蔵省の主計局に出向していましたので、同じ主計官補佐だった柿澤弘治さんとひどいな、すごいなと言いながら仕事をしていました。

白鳥 この時期には大きなショックが二つ続きました。米中接近とドルショックですが、仕事として関わられたのはドルショックでしょうか。

数原 そうですね。僕は「大蔵省主計局ですから、為替は全然関係ありませんけれども、それが経済に与えた影響は大きかった」。

大蔵省で私が一番学んだことは、日本の国内政治というのは予算編成で決まるということです。9月1日から一斉に各省庁の予算要求を受け取り、私は主査で郵政省と電電公社の担当でした。郵政省は一般会計もありますし、郵政特会もあります。こういう

たものに関する要求を各省庁の主計担当から聞いて、1カ月くらいで要らないものを削り、半分くらいにする。そういった査定の作業を年末までやって、翌年1月に国会に提出する。国会で3月の終わりまでにそれを通すと予算ができる。それまでの半年間は、政治の世界が予算で回る。いまでもそうです。もちろん他の省庁と同じく外務省も国内政治とは無関係じゃないわけですから、その国内政治に関わります。

半年間の予算編成の間、いわゆる族議員などからもプレッシャーがかかるわけです。郵政はあまりなかったですが。今度の文部科学省の森友・加計問題もその一種ですよね。後ろで見ている政治家や官邸の意向というのはすごい効果を持ちます。それでみなさん、御百度を踏んで政治家のところへ頼みにいくわけです。それを受けとめるのが主計局の主査や主計官。そういう政治と予算の世界は、外から見たら何もわからない。

予算というのはおもしろくて、いまだから言えることですが、当時はもう何をもらってもよかったのです。電電公社や郵政省の人たちと一緒にスキーに行ったり、IBMから電気毛布の差し入れがあったりしました。いまならとんでもないことです。主計局だけでなく役所が、何をもらっても怖くない。実際、あの頃の右肩上がりの役所というのはすごく権限があつて、たとえば通産省であれば、IBMの特許を日本のメーカーに提供するし、東電などがIBMを入れたいと言っても、僕らが「うん」と言わなきゃだめなのです。外務省にはそういうおもしろいことは全然なくて、

中国代表権問題も揉めはしますが、中国からお金をもらうわけでも何でもない。

■ 南東アジア第一課

武田 その後、外務省に戻られて南東アジア一課に着任されたわけですね。

数原 南東アジア一課の時は首席事務官が英正道さん、それから課長が三宅和助さんという、北ベトナムへ飛んだことで有名な人です。その後三宅さんが出て、英さんが課長、私が首席事務官になった。

その時にももしろかったのは、ベトナム戦争が続いているのに、北ベトナムへの無償援助の予算をつけたことでした。三宅さんという大物が課長だったからできたことでした。

当時は、北ベトナムのホーチミン軍がずっと森の中を通過して南へ降りてきますので、アメリカが上空からトラックに木の枝をつけてどんどん移動している様子を撮影しています。その写真を外務省にも持ってくる。

白鳥 1973年1月にベトナム和平協定が調印されて、7月に大使が南東アジア一課に着任されていますから、アメリカが撤退し始める頃でしょうか。

数原 そうですね。ベトナム情勢が動いていた頃でした。

岩間 当時、ベトナムには邦人はそんなにいなかったのですか。

数原 いや、南ベトナムにはいたと思いますよ。

岩間 その後、ボートピープルの問題が出てくるわけですね。

数原 そうです。

白鳥 当時の東南アジア関係で言うと、やはり三宅課長による北ベトナムへの接近が印象に残っています。その話は課内ではどれくらい共有されていたのですか。外務省の一課長としてはかなり大胆な動きですよ。

数原 ものすごく大胆です。内部では通すべきところだけ通していました。三宅さんは先を見越して、もう南ベトナムは陥落すると考えていたのです。上の方で決まったことで、僕はそのあたりのことは承知していませんが、アメリカ等への根回しだけでも大変だったと思います。

岩間 ベトナム戦争で国内の反米感情が強かったのではないかと思うのですが。

数原 そうですが、アメリカに対しては盾突けない。中国代表権問題がそうだったように、最後までアメリカについていかざるを得ない。日米安保条約で守ってもらっているということ、それはいまも変わってはいませんが、当時はもっと赤裸々にアメリカにつかざるを得なかった。

岩間 そうすると、南東アジア一課の頃は国連関係の仕事からは離れていたけれども、軍縮室長に着任されて再び関わるようになるわけですね。

数原 そうですね。椎名裁定で、「青天の霹靂」で総理になった三

木さんが、1975年1月に核不拡散条約、日韓大陸棚協定、日中平和友好条約の3つの批准を推進するとぶち上げた。その直後に私は軍縮室長に命じられて、その後の1年半は蜂の巣をつついたようでした。間違ったことを言いたくないので、クロノロジーや日記、手帳などを基にお話していきたいと思います。

白鳥 手帳を拝見しますと、非常に細かく、なかなか見ない貴重な史料だと思います。特に政官関係というのは、外からはなかなか見えません。そのあたりが詳細に書かれておりますので、次回以降、それに従ってご説明ください。

岩間 それでは、今日はこの辺で。

数 原 孝 憲

オーラル・ヒストリー

第2回

開催日： 2017年9月14日
開催場所： 政策研究大学院大学

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

数原	孝憲	(元アイルランド大使、元国連局軍縮室長)
岩間	陽子	(政策研究大学院大学教授)
武田	悠	(神奈川大学人間科学部非常勤講師)
白鳥	潤一郎	(立教大学法学部助教)

■ 軍縮室長就任

白鳥 細かなところに入る前に私から質問して、その後細かなところなどを補っていただきたいと思います。まず、軍縮室長になる経緯です。1975年1月でしょうか。

数原 そうです。この時は私にとつても青天の霹靂でした。椎名裁定で三木武夫さんが首相となって、しかも自分からNP T（核不拡散条約）をやるという明確な意思表示をされた。

私は、その前、南東アジア第一課ということでベトナム関係の問題を担当していたんですけれども、その時に突如三木内閣が発足した。そして三木さんがNP Tを批准すると言った途端に、軍縮室長をやれと言われた。その頃は軍縮室が事実上、国連局の政治課の中にあった。NP Tを批准した後に予算がついて、軍縮室というのが正式にできて、それから2、3年で軍縮課になった。

白鳥 省内では普通に軍縮室長という言い方ですか。

数原 軍縮室長ではありますが、それが正式に機構上、軍縮課という形で認められたのはその後です。当時はまだ国連局の政治課の中だった。

岩間 1975年1月に着任された時点では、省内的には軍縮室長だったわけですね。

数原 はい。NP T批准が俄然動き始めましたから、ずっとそれだけで引っぱり回されました。

岩間 ほぼこの批准問題だけですか。

数原 もう批准問題だけですよ。

岩間 お仕事の何パーセントが。

数原 ほとんどです。もちろん軍縮問題で会議がジュネーブであったら行きますし、それ以外にも軍縮関係のことは全部取り仕切りましたけれども。それから国連総会が始まったら第一委員会にも出席しました。

しかし一番の役目はNP T関係で、批准のための根回し、説得を政治家、メディア、産業界とやって回ることでした。国連局長は大川美雄さん、政治課長は吉田長雄さんです。私はその下にいました。

白鳥 このNP T批准関係では課長にも指示を仰いでいたのですか。

数原 いや、この批准アイテムは三木さんがやろうと言って始めたので、東郷文彦事務次官、有田圭輔外務審議官、大川国連局長の3人が直接全部取り仕切った。だから私はいつもこの3人、特に有田外務審議官にくっついて国内の政治家たちの間を走り回りました。それから原子力産業界、メディアにもNP T批准が大事だということを言い歩いていたので、そうした国内での説明にほとんどかかりつきりでした。私が1月20日に軍縮室長になった途端にそうした仕事が始まったわけですね。

20日に発令になって、前任の野村忠清さんから引き継ぎをして、いまどういう状況でどのようにここまで来たのかという説明を私がまず受けた。

椎名裁定があつて発足した三木内閣では、宮澤喜一外務大臣、坂田道太防衛庁長官、佐々木義武科学技術庁長官、井出一太郎官房長官、それから党の方は中曽根康弘幹事長、灘尾弘吉総務会長、松野頼三政調会長という陣容でNPPT批准を全党的に進めていきました。

日本はNPPTには1970年に署名して、その時にNPPTも批准国が規定の43カ国を超えて発効しています。しかし日本はまだ署名しただけで批准はせず、省内でもいろいろと議論がありました。

白鳥 手帳には「野村室長」と書かれています。野村さんも省内的には軍縮室長という位置づけだったということですか。

数原 そうですね。しかし機構上はまだ認められていない。

白鳥 ただ実態としては室長だったと。

数原 はい、野村室長ですね。

武田 省外に対しても室長として御説明にいかれたと。

数原 もちろんそうです。

白鳥 ただ、『職員録』みたいなものには載らない。

数原 そうですね。

■ 外務省内におけるNPPT批准方針の確認

数原 それでブリーフの中に、この問題についての大臣と幹部の間の協議の記録がありました。幹部というのは東郷次官、有田外

務審議官、大川国連局長、それから国連局の野田英二郎参事官や吉田課長です。他には大臣官房の本野盛幸参事官という、沖縄返還の時に核持ち込みに関する話で大分活躍された方がいて、国会関係の担当をしておられたので、一緒になってあっちこっちへ行

った。その幹部間の協議では、NPPT批准をせざるを得ないという結論になりました。もう署名から5年経っていて、放ったらかしておくわけにはいかない。しかも日本は核を持つとうとしているのではないか、という不信感もだんだん出てくるという懸念もありました。

日本の安全についても、日米安全保障条約があった。1960年の安保改定も経て、日本にとっては日米安保がしっかりしてさえいれば、NPPTを批准して核を持たないことを決めても安全は保たれるということです。

また産業界は、核燃料の確保という観点からNPPT批准に賛成しました。日本は自国にウラン資源がありませんから、NPPTを批准することによって日本にウランを輸出しても問題ないという状態にしたかった。NPPTの下でIAEAの保障措置を受けるのだから問題ないということですね。

それから、日本が核兵器を持つぞと言うことが脅しになるという議論もありましたが、それはならないという話もしました。自前の核を持たないと言うのですから、核を持てるというフリーハンドを維持できず抑止力のようなものが効かなくなるという主張

が当時あったのですが、私どもは日本が持っているのはサーベルじゃなくて竹光だという話をしたのです。寄らば切ると竹の刀を振り回しても何の効果もない。

この議論にもいろいろありまして、日本は核を持つようと思えば技術的にはすぐできるということは、私共も思っていました。今井隆吉さんはいつもそう言っていました。日本の産業技術、それから核の技術を考えれば、核を持つこと自体はそれほど難しいことではないということです。

しかし本当に意味のある核戦力を持つようと思ったら、運搬手段をどうするのかという問題が出てくる。潜水艦もつくる必要がある。それも自前でやるとなれば相当の予算が必要だし、国内的にもいろいろ難しい問題が出てくるだろうとは思いました。しかも実験する場所もないし、その他にいろんなデメリットもある。何よりアメリカに不信を抱かせる恐れがあった。NPT批准をめぐる日米間のやりとりの中で、これは一番大事なテーマでした。アメリカが日本は核を持つようとしていると思った時、同盟関係にひびが入るといったマイナス面も出てくるだろうと。

こういった理由から批准せざるを得ない、というのが外務省の中で一般的な見方でした。必死になって、積極的にやろうというよりも、やらざるを得ないということです。

岩間 当時はアメリカからもNPTを批准せよと言われている、という雰囲気はありましたか。

数原 NPTの国会審議が始まってからは、在京アメリカ大使館

からいまどうなっているのかということを頻繁に聞かれました。ですから私の名前が在京アメリカ大使館発国務省宛の電報の中に出てきます。朝日新聞が核と日本に関する取材をした時、記者さんがアメリカに行つて公開になった文書を見て、コピーをとっていた。そこに私の名前が随分出てきます。

ただ我々も、もちろんアメリカも、直接アメリカから日本にデマルシュしてプレッシャーをかけるということはしなかった。アメリカも一生懸命になって日本の動きを見ていましたけれども、向こうもアメリカに言われたから日本がやるという形にはしなかった。NPT批准の見返りに日米安保で日本を守る、あるいは原子力の平和利用の面で日本に何か便宜を図るようなことはしなくなかったでしょう。日本がNPTを批准したいから批准するという立場で、私自身はアメリカのプレッシャーを感じたことはなかったですね。

ただし、アメリカにとって、NPTはドイツと日本が一番の対象だったのは御承知の通りです。

白鳥 大臣・幹部間の協議というのは、三木内閣、宮澤外務大臣になったので改めて協議をしたということですか。

数原 宮澤外務大臣がやはりNPTを批准しようという気持ちになった。それは三木さんがNPTを批准しようという決定に踏み切ったからです。

当時は外務省の中にも反対論がいろいろありました。核を持たないと言えればお手上げだ、周りの国に対する外交上の重要なレバ

レッジ、武器がなくなるという議論です。それには日本が持っているのは竹光だという説得をした。さきほど触れた理由から本当に意味のある核戦力を持つのは難しいですし、1967年には佐藤栄作内閣で非核三原則が発表されて、これも一つの縛りになっていました。

ただし、その三原則のうち、核の持ち込みはNPTの下でも可能です。核を持つと思った時に持ち込むことはできる。自国の核兵器として保有することはできないけれども、持ち込みについてはNPTを批准しても決してハンディにはなりませんという説明をしました。はつきり言ってしまうえば西ドイツがそうでした。

岩間 そうですよね。だからこそNPT署名時に大変な議論になりましたね。

数原 そうですね。

岩間 それは、核の持ち込みを公には認めないけれども、黙っているということですか。

数原 そこは全然別の次元の話です。沖縄返還の時、核持ち込みの議論があれだけ内政上の大きな問題になった。ですから寝た子をひっくり返したくない。国内の政局と外交というのが本当に密接に絡んでいます。

岩間 持ち込みは可能という説明は、外務省内にあったフリーハンド論に対してということですか。

数原 いや、政治家に対して。それから日本の安全保障は日米安保がある以上、NPTを批准してもどうということはないと説明

しました。

またNPTを批准しても、脱退の権利は認められています。日本の国益が著しくダメージを受けるような状況になった時には日本も脱退をすればいい、という言い方で説明しました。真剣に脱退を考えたことはありませんが。

岩間 核の持ち込みができるというのは、いわゆる有事の米軍の核の持ち込みという話でしょうか。

数原 そうです。

岩間 それを日本が使うとか使わないとか、そういうレベルの話ではない。

数原 そうではない。決定的にドイツの場合と違うのは、ドイツにはNATO（北大西洋条約機構）という安全保障上のシステムがあるということです。そこにイギリスやフランスといった核兵器国が入っており、ドイツ自身も核の引き金には関与している。

岩間 半分だけです。

数原 半分ですけれどもね。日本は何もない。アメリカに一方的に頼っているだけです。

この省内での議論では、東郷次官がもつと歯切れの良い説明理由はないのか、ということもおっしゃっていた。正直ベースで言うところこれまでに挙げたような4つの理由になりますので、それに対して非常に歯切れが悪いじゃないかということです。しかし正直ベースではこのぐらいしかない。有田外務審議官が、後で揚げ足を取られないようにするにはこれぐらいが精一杯だと言われた

ということですね。

白鳥 積極的に批准する理由というのは見出せなかったということですか。

数原 原爆を投下されたから、あるいは非核三原則があるからといった積極的にすばりと国民に納得してもらえような説明ぶりができればよかったのですが、事務的に正直ベースだとこのぐらい。

たとえば自民党内のタカ派に説明に行く時には、さっき言ったような脱退条項もある、核兵器国には核軍縮の努力義務もある、日本には日米安保もあるといったことを言います。そうしないと源田実議員や青嵐会の人たちを説得できない。特に源田さんは、俺がアメリカ兵なら、戦車を横須賀に運ぼうとした時に街頭に出てきてそれを阻止するような国民のために命を落として守ったりはしないと saying していた。他にも青嵐会には、中川一郎をはじめ元気のいい人がいっぱいいる。そういうところに随分根回ししました。

自宅の周りにも右翼の宣伝カーが来てNPT批准反対を叫んでいたのも、警察の警備がきました。単なるエピソードですが。

岩間 外務省にも常に抗議が来ている状態ですか。

数原 そうですよ、来ていました。

■ 三木内閣の外交方針

武田 そうすると、NPT批准は三木首相の政治的な決断で始まったということでしょうか。

数原 はい。それと、宮澤さんが三木さんを支えて批准しました。

武田 宮澤大臣としても批准したい。

数原 宮澤大臣も三木総理は本気だと外務省の中でも言っていました。

宮澤さんは本当にハト派ですから根回しをしてくれました。大臣もその気になったら、これは次官も外務審議官もやらざるを得ない。

ただ、NPT批准を必死になってやるのは国連局しかなかった。軍縮室、それから科学課も産業界との関係で重要でした。しかし地域局はそっぽを向いて、本気になって旗振りはしてくれませんでした。それでも外務省がNPT批准に本気で取り組んだのは、総理と宮澤大臣が批准をするという方針を明示して、その下にいる外務省のトップがその意を受けてやろうという気持ちになって、それが下に降りてきたからです。

つまりこの問題はそれほど政治的に微妙だった。NPT批准を進めれば政権が吹っ飛ぶかもしれないというくらいでした。私が外務省に入った年に安保改定があつて、樺美智子さんが亡くなり、岸信介政権が倒れています。時の首相としては、そういうことに

なつてせっかく得たトップの座を渡すようなことはしたくないですから、こうした問題には慎重になる。

しかも三木さんは、NPT批准だけではなくて、日韓大陸棚条約と日中平和友好条約も国会で取り上げようとなりました。ですから三つも一遍にやるのかという批判は省内にもありました。外務省の中では、NPTなんかより日韓大陸棚条約や日中平和友好条約の方がよっぽど大事だという見方もあったわけです。そうした空気の中でNPTの批准を進めたわけですね。

一番ネックになったのは自民党の中が一本にならなかったということです。三木さん自身がハト派ということで、快く思っていないタカ派からは格好いいことばかり言つて、そんなやつに点稼ぎをさせる必要はないという反発が出た。最終的に1年目に批准できないとなったのは、中曽根幹事長がその断を下したからです。党内が一本にならない中で批准を進めて自民党が分裂すると困るということでした。しかも国会審議を始めたときには、社会党や公明党も態度を決めていない状態でした。

白鳥 一つ確認したいのですが、三木首相の演説、それから宮澤外相の演説が国会の冒頭にあります。そこにNPTの批准推進が挿入されていますね。これはどういったプロセスで入ったのでしょうか。

数原 三木さんが自分で鉛筆をなめて入れたのだと思います。彼の政治的な意思が強かったのでしょう。

武田 誰か三木総理に入れ知恵したというか、NPTを批准すべ

きだと助言した人はいたのでしょうか。

数原 私はそこまでは知りません。ただ私の頭の中では、NPT批准が急に出てきて、施政方針演説にも入った。それが鶴の一声になつて、宮澤さんも三木さんがそう言うなら、ということになった。やはりトップの意思決定が外務省内でも自民党内でも重要だったのでしょうか。

岩間 個人的にこの早い時点で総理もしくは外務大臣とお話された御記憶はありますか。

数原 既に前任の野村室長の時に、政権内部でも外務省内でもNPTに批准せざるを得ないという空気はできていたのだろうと思います。

■ 省外への働きかけと役割分担

数原 ですからあとは外に向かってどう働きかけるかです。つまり自民党や野党各党に根回しをして、メディアに働きかけて世論をつくり上げて、それから産業界にも根回しをするという作業が始まった。

ここで重要になったのがユーラトム並みの扱いを受けるということです。日本は原子力平和利用の面で遅れをとっていたので、自分たちである程度査察ができる、IAEAに全て何でも見せずに自分たちである程度査察ができる、という待遇を求めた。施設を全てIAEAに見せると、様々な国の査察官を通じて産業秘密

が漏れるかもしれないという懸念がありました。しかし自分たちである程度査察ができるのであれば、日本は天然ウランが乏しいですし、それを濃縮する技術も遅れていましたから、批准した方が得だ、という論理で産業界にも根回しをして説明してまいりました。

武田 説明をして回る時には軍縮室が中心になると思いますが、一方で国連局には科学課がありますね。

数原 原子力平和利用の方は科学課。

武田 NPT批准は軍縮室なわけですか。

数原 そう、軍縮室です。

武田 NPTに関する平和利用はどうなるのでしょうか。保障措置などが問題になったかと思いますが。

数原 保障措置協定は科学課の方ですね。ですから、ユーラトム並みの扱いを受けられるかどうかという問題では、科学課がIAEAに出かけていって交渉した。しかしその上に国連局担当の官房審議官がいるのは同じです。科学課長は私の同期の太田博でした。

岩間 そうするとNPT批准を担当する軍縮室では、条約自体は条文が全部決まっているわけですから国際的な交渉をすることはほぼなくて、国会を通すための国内対策が中心ですか。

数原 そうです。ただその前の署名の段階、私が室長になる前に、NPTへの日本の関与はあった。アメリカが日本に条文案を提示して、それに対して日本側が出した要望は大体入っている。それ

は、日本に批准してもらいたい、NPT体制に入ってもらいたいという強い意思があったのだと思います。そうした要望の最たるものが、条約について5年ごとに再検討会議を行い、見直しの機会を設けるということでした。

それともう一つ、このNPTを永遠の条約にするのか、それとも有効期限を切るのかが問題になった。それが結局25年になり、その後も期限を延長するかどうかが再検討会議のたびに出てくることになります。

岩間 これは矢田部課長時代にやったということですね。

数原 そうですね。ただ、矢田部さんは科学課長ですね。

NHKが「核を求めた日本」という番組を放映してから、外務省の中でもNPTを批准した前後のことについて調べるようになって聞き取りをして、私もインタビューを受けました。他には太田科学課長、署名をした時に条約の締結書面を確認する国際協定課の山田中正課長などに話を聞いています。彼は国際協定課長の1969年から1972年まで務めていた。それから、野村さんの前の沢井昭之軍縮室長にも話を聞いている。

白鳥 今後時系列順にお話をお聞きする前に、最後に室の中ではどういう役割分担をしていたのか、どういう方がいらっしまったのかといったことを教えていただけますか。

数原 私の右腕になってやってくれた事務官がいました。

それで細かいことについては、私が軍縮室長になった1975年の1月からずっとメモ帳をつけていまして、それを全部とって

あります。

それを見てみると、たとえば核防条約の批准に対して、自民党では中曽根さんがこれは不平等条約じゃないかと言う。それは私だってもちろん、いまでもそう思っています。5カ国だけは核兵器を持っていいとされ、その核兵器国の一つであるアメリカがイランや北朝鮮に対して核兵器を持つてはいけないと言った時、公平という観点からすれば、そのどこにもモラルオーソリティーがあるのか。だからこそ、日本のようにモラルオーソリティーを持っている、自分では核兵器を持たない国が声を大きくして核兵器を持つべきでないとわざわざを得ない。それでも日本はアメリカに守られているのではないか、アメリカの核兵器があるから核兵器を持つなと言えるのではないか、と言われたらそれはそのとおりです。この点については以前書きました。

またメモの他のところを見てみますと、たとえば第一次戦略兵器制限交渉（SALT）でアメリカの首席代表を務めていたU・アレクシス・ジョンソン大使がブリーフをしに来てくれたことがあるのですが、それは国内でNPTの不平等性を指摘して核軍縮を推進すべきだという意見が強かったからです。特にタカ派のためには、米ソ間で核軍縮について随分協議をしている、SALT IIを目指して交渉しているということをわかってもらう必要があった。当時彼らは、NPT第6条が定める核軍縮義務が本当に守られているのか、というような主張をするのです。それに応えるために、駐日大使から核軍縮交渉担当の大使に転じられていたジ

ョンソン大使に来てもらいました。

武田 先ほどの話に戻ってしまいましたが、軍縮室はどのくらいの規模だったのでしょうか。

数原 電話番号の人やコピーをとったりする女の子はいましたけど、実質的に仕事を担当するのは三、四人です。

NPTに関する資料をつくって、それを自民党、野党含めてあちこちにばらまいたわけですから、その根回しだけでも大変でした。私は随分、有田審議官にくっついて回りました。有田外審は気難しい人で、叱られた人が大勢います。でも私から見た有田外審はおとなしかった。その彼と二人三脚で、自民党の三役をはじめいろんな方への説明に行きました。

ですのうで後に、私が軍縮室長を辞めて在インドネシア大使館へ行くことになった時、外務省で行った私のフェアウェル・パーティーに政界の人たちが大勢来てくれたことがありました。自民党だけでなく、社会党からや民社党からも来てくださいました。それほど有田さんと一緒にあちこち根回しをしたということですか。

白鳥 軍縮室でキャリアの方は大使だけですか。

数原 室長の下に1人、立派な部下がいました。辻本甫君ですね。

武田 当時の科学課では専門的な問題も扱っていたので、たとえば電力会社や動燃から出向の方が来られていたみたいですけども、軍縮室の方はそうでもありませんでしたか。

数原 軍縮室はありませんね。もちろん今井隆吉さんはおられましたし、三木さんの下で自民党内の根回しをする時にアドバイス

をしてくれた大学の先生もおられました。ただそれは、外部から助言などをくださったということです。特に今井隆吉さんからは、随分と技術面でのアドバイスをしてもらいました。

武田 今井さんは当時日本原子力発電におられて、保障措置協定に関する交渉の時には参与として臨時で外務省にいられていましたね。恒常的に外務省にいられていたということでしょうか。

数原 そうですね。アドバイザーじゃないけれども、特に産業界への根回しはよくやってくれました。他に私は産業界や新聞、放送関係の方々によくお願いをしました。読売新聞の石井一さんや、朝日新聞の岸田純之助論説委員などです。国内世論を考えたとき、そうした方を味方につけることは重要でした。

武田 大使が軍縮室長だった時のお仕事というのは、省内というよりは省外のいろんな方との折衝が多かったということですか。

数原 そうですね。ただ、アメリカとの間でまだ協議が必要な点が残っていました。

たとえば核軍縮ですが、特に中曽根さんが、やはり不平等条約である以上は、せめて対米交渉はやらなくてはいけないと言われた。それでヘンリー・キッシンジャー国務長官との間でやり合ったのです。日本は核を持たないと自分から言うわけですから、その見返りをとらないといけないとおっしゃる。特に自民党のタカ派は、日本が原爆を投下された国だからNP Tを批准するというのではなくて、もっとリアリズムの立場に立って、日本の主権をそこまで制限する以上、それに見合ったものを日米安保の他に

得るべきだと言う。そこで一番問題になったのが、非核兵器国の安全保障でした。

この問題については、安保理決議255が既に採択されています。非核保有国が核兵器で攻撃された、あるいは威嚇された時には、他の核保有国がこれに対抗して支援するという決議です。

しかしその決議には抜け道があって、「国連憲章に従って」と書いてある。たとえば核兵器で日本が脅かされた場合、アメリカがそれに対抗するために支援はできるけれども、そこには「国連憲章に従って」という文字がちゃんと入っている。これは抜け穴とも言えますが、しかしこの文言がなければ日本も賛成できなかったでしょう。

それは御承知のように、冷戦期のアメリカの核戦力は、通常戦力で圧倒的優位に立つ共産圏に対抗するという意味があったからです。いまの中国もそうですが、当時は特にソ連の通常戦力が問題だった。アメリカが対抗するには量的に劣っていますし、地理的にも遠いことから、核を使わざるを得ない。それでバランスがとれている。通常戦力では西側が劣勢でも、核を使うことができるからこそ、抑止力が効いている。

そういう状況で核兵器は使えませんということになるのは、日本にとっても困るわけです。日米安保によって安全を確保している、核兵器を使用してはならないということでは意味がない。だからこそ、日本も昨今問題になった核兵器禁止条約に署名しなかったのです。国内的には評判が悪かったのですが、それは現実

とあるべき姿の間のジレンマです。

白鳥 ありがとうございます。ちょうど時間ですので、ここで一回切らせていただければと思います。

数 原 孝 憲

オーラル・ヒストリー

第3回

開 催 日： 2017 年 12 月 14 日

開催場所： 政策研究大学院大学

〔出席者〕 (肩書きはインタビューの時点)

数原 孝憲 (元アイルランド大使、元国連局軍縮室長)

岩間 陽子 (政策研究大学院大学教授)

武田 悠 (成蹊大学アジア太平洋研究センターポストドクター)

白鳥 潤一郎 (立教大学法学部助教)

■ 軍縮室長就任前後の状況

白鳥 質問項目はおおむね時系列順にまとめてあります。お話ししやすい順番でお話しただくのがいいかと思うのですが、どうされますか。

数原 結構です。1975年まではこれまでに私が書いたものを中心に、覚えている範囲でできるだけお話しさせていただきたいと思います。

岩間 着任された当時のことを前回伺ったのですが。

武田 前回は着任されるまでを伺いました。質問1のところですが、今日は2からですが、まずは前回までのことに関して何か追加はございますか。

数原 その時期のことを俯瞰して考えますと、横軸は内政で自民党、野党を含めて左右両派がいる。縦軸は外政で対米関係や国際政治、国際平和、人類益のようなものがある。様々なプレイヤーが出てくるわけですが、みなそれぞれこうした要素に関して異なる思惑を持っていたということです。

私も80歳を超えて昔のことは覚えておりませんが、幸い当時のメモがありますし、以前作成したクロノロジーもあります。それから公開された当時の在日アメリカ大使館の電報なども結構おもしろい。私の喋ったことが克明に記録されています。当時のアメリカは日本に早く批准してもらいたいわけですが、同時にプレッシャーをかけたくはなかったのです。それ以外にも豪州やカナダ、

ヨーロッパも関心を持っている。だからこそIAEAとの保障措置協定でユークラム並みが確保でき、NPTの再検討会議でも日本の主張が反映されたのだと思います。

岩間 アメリカだけではなく、ヨーロッパや豪州も関心を持っていたのですか。

数原 そうですね。NPTは日本とドイツを入れることが一番の狙いでしたから。

私としては、NPTは不平等条約だけれども、日本は第二次世界大戦に負けたことをいまだに引きずっているのだと思っています。NPTや、それから国連も、前の大戦の結果から生まれているわけですから。

ポイントはいかに平和利用や核軍縮を進め、不平等性をなくしていくかです。また日本にとっては安全保障をいかに確保するかも重要で、この点では日米関係については我々も苦労しました。

岩間 自民党の中でも右派が特に強く反対したということですが、その主張はどのようなものだったのですか。

数原 彼らも国益を考えていることには変わりないのですが、三木政権という特異な政権に対する権力闘争という面が非常に強かったですね。もちろん青嵐会などを中心に右派の立場からの反対はありました。

白鳥 その権力闘争というのは、軍縮室長になられた直後の1975年1月から4月頃のことなのでしょうが、それとももって後になってからなのでしょうか。

数原 自民党の総務会を通すことができれば、その段階でかなり目処はたっています。

問題はその前の自民党の中を通す時です。もちろん野党や産業界、メディアへのアプローチもありましたが、一番大変なのは総務会で、源田実さんや、中川一郎さんから青嵐会の人たちがいた。核を持たなくて日本の安全保障は大丈夫か、核を持たないというのは三等国ではないか、日本はプライドを捨てていいのか、アメリカの言いなりになるのは受け入れがたいとおっしゃっていた。さらにNP Tに入っていない国も数多くあった。イスラエル、インド、パキスタン、南アフリカ、それから中国やフランスです。それなのになぜ日本は入るのか、という議論です。戦争に負けた日本が、戦後アメリカに頼らざるをえなかったのが右の人たちにとっては歯がゆいですね。この主張には一番苦労しました。

結局、最後は継続審議になりました。このまま強行すると自民党が割れる恐れがあったからです。三木政権自体が椎名裁定によって生まれた青天の霹靂の政権で、絶対安定政権ではない、しかも1976年にはロッキード事件が出てくる。しかも三木政権が国民を相手にポピュリズム的な政策をとり、この国会ではNP Tの他に日韓大陸棚条約と日朝平和友好条約も提出していた。そこで三木政権にそこまで点稼ぎさせることはないという、相当低い次元での政権に対する不満をぶつける場になったのがNP T批准問題だった。

白鳥 合同部会がいまおっしゃったような不満が出る場になった

のでしうか。

数原 もう全てです。外交調査会もそうですし、うるさ方が多い総務会もそう。右の人たちもいますし、ユーラトム並みをとってヨーロッパに不利にならないようにしろという科学技術関係の意見もあった。そういった内政上の左右の間のせめぎあいの只中にNP T批准があったのです。NP T批准には日本の安全保障や原子力平和利用といった国益がかかっているのですが、国際的には、外政的には日本はそこまで大きなプレイヤーではないし、むしろ問題はサイゴン陥落だった。しかし内政的には問題になり、その矢面に立たされたのが事務方だったというのが我々の実感です。

武田 当時、政府の側だと三木首相と宮澤外相がこの問題の主な担当者ですね。党の側からサポートしてくれるような方というのはおられたのですか。

数原 一番は三木派です。政府の側では宮澤外相、党では外交部長の坂本三十次さん。

白鳥 質問票にリストアップしてみました。他の方々について何かご記憶のことはございますか。

数原 一人一人会って説得するわけですが、たとえば宮澤さんが訪米して日米安保体制はもう絶対揺るがないという言質をとってくると、それが評価されて、次第にみなさんの態度が変わっていった。

■ 国会提出に向けた外務省内の議論

白鳥 1月末くらいまでは前回詳細な話があり、いまは安保調査会の前くらいまでお話しいただいたのですね。メモや手帳を見返した上でご説明いただけると、記録としてもいいかなと思うのですが。

数原 私もメモを頼りながらですね。すこし戻りますが、前年の12月頃までに、反対もあった外務省内の意思統一を図ったわけです。大臣の前での「御前会議」をやり、提出を決めました。手帳によりますと三木政権発足後で、宮澤さんが最後にこの案件を前に進めましようとしたと裁定している。

武田 このあたりのことについては、大使は前任の野村室長からブリーフを受けたということですね。

数原 ブリーフを受けました。私は翌年1月20日に軍縮室長になりましたから。

宮澤大臣の「御前会議」は1975年1月ですね。3回大臣の前で会議をした。松永（信雄）条約局長、国連局、それから西堀正弘軍縮大使らが出席して、署名をしてもう5年も経ち、これ以上放置しておくことはできない、日本の信用や日本が核を持つとしていてのではないかという疑念にも関わる、ということ、皆さんそれぞれニュアンスはありましたけれども、批准すべきだという結論になったわけです。

白鳥 これは課長クラスだと大使の他にどの部局の方が出てきた

のでしょうか。

数原 ユーラトムや原子力平和利用の関係で太田科学課長、それから地域局はいませんが、日本が自ら三流国になるのを認めるのではないか、という意見がありましたので、省内で根回しは必要だった。

白鳥 こうした会議の場ではなく、非公式に話をされたのですか。

数原 非公式というか、これ以外の次官会議や局長級の会議です。ただし批准を推進するのは国連局しかいません。軍縮室の所管事項ですから。他の部局はそっぽを向いているわけではないですけども、お手並み拝見というぐらいの感じだったように思います。大臣の会議、いろいろな会議があるわけだし、局長同士が集まる会議もありますけれども、そういったところでの根回しは必要ですけれども、批准を推進していくのは国連局しかないのですよね、平和利用も含めて。ですから、一緒に「御前会議」なんかに出てきていません。完全にこれは、そういうものとしていろいろ。

岩間 時期的には少し前ですが、岡崎久彦さん、村田良平さんは国際資料部におられたのですね。

数原 そうです。しかし報道（NHKスペシャル）「核を求めた日本」があった時にも話題になりましたが、彼らはNPTを所管していないのです。自由に研究して議論をする立場にあった。

岩間 特に相談を受けたり注文をつけられたりということはありましたか。

数原 中国との関係をどのように分析したらいいのかというのは

聞いたりはしますけれども、それ以上ではない。基本的には三木総理がやろうと言い、宮澤大臣がやろうと言ったので役人としてもNPTの批准を進めた。

岩間 NPTが1967年に署名開放された後、日本は非核三原則ができ、沖縄も「核抜き本土並み」ということで返還されています。それでもNPTへの印象はあまりポジティブではなかったのですか。

数原 地域局から見ると、たとえばアメリカとの関係では、沖縄返還の後も繊維摩擦や石油危機があつて右往左往しているわけです。そうした中でずっとどうということもないNPTの批准を進めるのは何事か、というのはあつたと思います。またアジアとの関係でも、NPTより日韓大陸棚条約や日中平和友好条約の方が早く進めてほしい。国会運営で足かせになるようなことをいまやらなくてもよいではないか、ということになる。日米関係も万全ではなかったわけです。

白鳥 最近の研究では、前年の1974年11月にフォード大統領が現職の大統領として初めて来日し、日米関係は比較的安定していたと言われています。

数原 これは1975年2月になってからのことですが、日米間にはいろいろと摩擦の火種がありました。アメリカは日本に対して、防衛努力が足りない、通貨や石油の問題でも非協力的である、他にもベトナム問題などに対応しなくてはならない、といった形で不満があつた。そうした中で、NPTとは直接関係がない日本

の安全保障、アメリカの関与の問題を右派の人たちが出してくる。それで無理にNPTを批准しなくてもよいのではないか、という議論になるわけです。

武田 そうすると、NPTの批准は国内政治上のコストが結構高かつたということでしょうか。

数原 ただ、現実的には平和利用や日米関係、国際的な信用を考えると批准した方がいいと我々は判断し、「御前会議」での決定につながつたわけです。

白鳥 「御前会議」は前任の野村室長の時代にされたのでしょうか。

数原 手帳には1月とありますね。会議に出たら覚えているはずですけども。

岩間 20日以降に3回というのはなかなかペースですね。

数原 そうですね。いずれにせよ、三木総理の演説が本格化する直接の契機ですね。

■ 自民党への根回し

岩間 所信表明演説も外交演説も1月20日ですね。その前には普通、党内議論をするのではないのですか。

数原 僕もよく記憶しておりませんが、自民党に説明がなかったのは確かです。それで「聞いていない」ということになつて荒れに荒れたわけです。三木さんも宮澤さんもNPTに批准を

進めると言ったのですが、党内での根回しが足りないということ
で総務会などが大荒れになりました。

武田 中曽根幹事長はどういう態度をとられていたのですか。

数原 もちろん党をまとめるのが仕事ですから、最後は結局継続
審議にするわけですが、一方でこの段階では、総理と外務大臣が
そう言うのであれば反対とは言えないでしょう。ただ党としては
慎重に進めていかなければならない。(副総裁の)椎名さんも同じ
です。署名から5年間、ほったらかしにしていたものを始動させ
るためにエンジンをかけ始める段階です。

岩間 安保調査会が1月の末という順番がおもしろいですね。1
月20日の両演説の後、いろいろとあったのでしょうか、メモ帳に
記載されているのは31日の安保調査会です。

数原 それは形の問題で、やはり党を通さないと条約は通せない。

もっと大変だったのはIAEAとの保障措置協定をめぐる交渉
です。これも一種の条約案件ですから、事前に党の了承を得るべ
きだと、中曽根さんはじめ自民党の方々が主張した。しかしやぶ
蛇になるということでそれはしなかった。その交渉が1975年
2月に妥結したところにNPT批准問題が出てきたわけです。

いずれにせよ、我々は5月の再検討会議までには何とかNPT
を批准し、締約国として会議に参加したい、それを一つのプレッ
シャーにしたいと考えていたわけです。

白鳥 少し戻ってしまうのですが、そうすると党への根回しなど
は1月20日の両演説以降だったのでしょうか。

数原 そうです、私が動いたのはその後です。

白鳥 前任の野村室長も、大使のように自民党とはやりとりされ
ていなかったということですか。

数原 そうですね。

武田 1970年に署名した後、1975年に本格的に動き始め
るまでというのは、基本的には静観していたということですか。

数原 そうですね。その間は私もわかりませんが、無理して進め
る必要はないということだったのではないかと思います。

白鳥 手帳を拝見しておりますと、1月20日の両演説以降、31日
に安保調査会、その後に中曽根派説明会などがあつて、2月8日
になると外交・安保・科学技術の合同部会が開催されます。青嵐
会への言及もありますが、4月半ばまでにこの合同部会が6回開
催されています。合同部会の開催などについては、党と外務省の
間でも協議されていたのでしょうか。

数原 1月初めの段階では、批准よりも保障措置協定が問題でし
た。原子力平和利用に関してユーラトム並みが得られるか、西ド
イツと同じ待遇になるかということです。ポイントは主に二つあ
りまして、一つは査察の間隔で、何カ月にも一回やるのかというこ
と。もう一つは査察のやり方で、西ドイツの場合にはユーラトム
による査察をIAEAが確認する。他国出身の査察官に施設を見
せると産業秘密を盗まれるおそれがあるというのは、通産省や科
技庁も懸念していました。それを回避するために、ヨーロッパと
いう地域の機関であるユーラトムが査察をする。日本にはそれが

なく、それまでは日米原子力協定の下で、輸入する技術や物質に関してアメリカの規制を受けていた。そこで新しく、ユーラトムのように、国内の機関が査察を行ってIAEAがそれを確認するという構図を基本にした。

それが一段落してすぐ、批准の問題が出てくる。そこで日米安保や核の持ち込みといった問題が出てくるのですが、我々はそれがNP Tとは直接関係ないと説明につとめた。

白鳥 説明は大使が合同部会等に出席してされたのですか。

数原 そうですね、党の部会や省内の会議などでそういう説明をしました。ただし右派からは、西ドイツのようにNATOがない日本はどうするのか、アメリカとの関係が悪くなったらどうするか、というようなためにする議論がなされました。

白鳥 論点はこの合同部会の時点ですでに出ていたということですか。

数原 そうですね、合同部会や青嵐会への説明で出ている。しゃべる人も大体決まっています。日本の批准は国際政治全体から考えたらそれほど大きな問題ではないのですが。

岩間 ただ、産業界にとつては心配な問題ではなかったのですか。

数原 いや、反対の大きな要因は三木政権そのものへの態度です。それとたとえば源田さんに言わせれば、自分がアメリカ兵だったら安保に反対する国民を守るために命をかけるか、汗をかくかという考え方があつた。

白鳥 議論の順番などは自民党で決定されているのですか。

数原 合同部会は党が全部決めて、我々は呼び出されるだけです。ただ、議論する内容はその時々状況や新聞の報道などによって変わる。ですから議論そのものも筋道だった知的なものではなくて、NP Tを提出するかどうか、中曽根幹事長の態度や三木さんがどこまで真剣か、宮澤さんがどのような判断をするかにかかっていた。

白鳥 大使のクロノロジーでは、中曽根Ⅱキッシンジャー論争が出てきます。これは中曽根さんから提議をしたのですか。

数原 そうですね。キッシンジャーが国務長官だった時、いろいろと中曽根さんと接点があつた。中曽根Ⅱキッシンジャーのことについては手帳にも書いています。

白鳥 いつ頃、どういう文脈で中曽根Ⅱキッシンジャー論争があつたのかは非常に重要なことだと思います。

数原 1975年の4月ですね。幹事長として会つたのだと思います。その時のポイントは、日本は核を持たないと決めたことと三流国家になるという意識が彼にはある。そういう重要な決断をするのだということです。

岩間 NP Tの交渉段階から、非核兵器国の安全保障は問題になり、安保理決議も出されていますね。そのことでしょうか。

数原 日本が核を持たない、不平等な条約を受け入れることへの見返りをアメリカから取りたいということだと思います。たとえば非核保有国に対して核保有国は威嚇や核の使用をしないと明確にするべきであるといった措置です。右派はそれを、中国やソ連

と二国間で約束させることができないかと言うのです。日本が国会決議等で一方的にアピールするのではなく、中ソ仏との二国間の合意などで言質を取れということです。中国であれば、その後締結する日中平和友好条約で日本に対しては核で脅しはしません、核兵器は使いませんということを一言約束させよといったことも議論されていた。

しかしそうは言っても、たとえば中国はNPTに入っていないし、おそらくそれなら日本は日米安保条約を廃棄せよと言われるでしょう。日本の安全保障はアメリカによって確保されているのだからそれで十分だと思うのですが。

岩間 日ソ、日中などで二国間の合意をせよということですか。

数原 米ソでもかまいません。ためにする議論です。少しでも国際関係がわかっていればそれが実現するわけがないことは理解できます。

岩間 中曽根さんとしては、党内のそういう主張をする人々に対してアピールするためにキッシンジャーと論争したのでしょうか。
数原 僕はむしろ、中曽根さん御自身のプライドだったと思います。日本は批准をするためにこういう努力をしている、IAEAともユーラトム並みを目指して交渉している、側面からその促進のために動いてくれないかという話。しかしキッシンジャーがわかった、後で返事すると言った後に返事をしないものだから、彼はへそを曲げちゃって怒った。ここにまともに受け取っていないのではないか、と書いてあるでしょう。

白鳥 クロノロジードと提起に反応なし、黙殺はけしからぬと書いてありますね。これは桃井真さんから聞いたお話ということですか。

数原 桃井さんが中曽根さんのブレーンのような存在でしたから、桃井さんからいろいろと話を聞いていました。

武田 これはいわゆる消極的安全保障ですね。積極的な安全保障は1968年の安保理決議255で、消極的安全保障は1970年代末に国連で米ソなど5カ国がそれぞれ一方的に宣言する形で実現しています。

数原 消極的安全保障に関しては、非核兵器地帯の取り組みもありました。冷戦下では日本のようにアメリカに依存できない、非同盟諸国が中心になって推進しました。

武田 中曽根Ⅱキッシンジャー論争というのは、その後の展開に何らかの影響を与えたというよりは、そのまま立ち消えたという感じなのですね。

数原 ただ、中曽根さんの中では、いくら日米安保条約があるから十分だと言っても、日本が三流国家にあえてなろうとしているのにキッシンジャーさんはそれを理解してくれないという不満があった。

武田 中曽根さんの場合にはそういうプライドの問題があったと。
数原 そう僕は捉えています。

白鳥 いま中曽根幹事長と源田国防部長についてお話があったのですけれども、質問票に当時の自民党関係者を何人か挙げてい

ます。灘尾（弘吉）総務会長、松野（頼三）政調会長、宇野（宗佑）国対委員長、栗原（祐幸）外務委員長、それから坂本外交部会長などですが、何か印象に残っていることはございますか。メモには源田さん、鯨岡（兵輔）さんのお名前がよく出てきます。数原 鯨岡さんは三木派ですから、NP T支持の立場から議論をした。

白鳥 この時は外務委員会の理事ですね。

数原 理事でしたかね。ですから、何人か推進派の方がいるのです。事務方は質問されれば答える、あるいは説明をしに行きますが、同じ立場で議論はできない。

岩間 手帳に書いてあるメンバーの辺りは読めますか。

数原 田中龍夫、水野清、源田、鯨岡、岩動（道行）、床次（徳二）さん。この頃は平和利用に関して、ユーラトム並みを取れるかを話していた。

岩間 源田さんもそういう話をしているみたいですね。これは1月31日ですね。合同部会には何人ぐらい出席されていたのですか。

数原 だんだん新聞などに出るようになって、出席者も増えた。

武田 何十人も並んでいるという感じですか。

数原 話題になるというのは反対派の狙いであり、我々の狙いでもあるのです。原産会議やメディアにも働きかけると、政治家がそういう周辺からの圧力を受ける。そういう形にするのは我々の狙いの一つでした。

岩間 当初のメディアの反応はどのようなものでしたか。

数原 朝日新聞では岸田純之助さん、読売新聞では石井一さんが熱心でした。比較的好意的でしたね。

武田 合同部会をやる時というのはどなたが主催されるのですか。部会というと国防部会は源田さんで外交部会は坂本三十次さんですね。

数原 それは多分、国対で調整したのではないかと思います。党の中の話については僕は知りません。

白鳥 松野政調会長はこの件に何か関わっておられたのでしょうか。

数原 いや、私はよく記憶していません。

武田 そんなところで次の質問3ですが、外部の方との関係についてです。

数原 桃井さんは中曽根さんのブレーンでしたから、私も頻繁に彼の話聞きしました。手帳によると、2月21日に桃井さんと会って、いくつかのポイントについて話をしています

白鳥 当時、桃井さんは防衛研修所におられるわけですが、桃井さんと会う時にはどこで会われているのですか。

数原 こちらから出向いて行きます。こちらがお願いに行くのですから。たとえばここには、午前にはアポイントメントと書いてあります。

武田 これは桃井先生がこの問題の専門家だからなのか、それとも中曽根さんのブレーンだからなのか。

数原 中曽根さんのブレーンだからです。桃井さんくらいですと

私が直接会いに行きます。灘尾さんなどもっと上の人ですと外務審議官、中曽根さんですと次官が行きます。

この時には手帳に連絡を取りたい、後にでも電話しますと書いてあるので、こちらから連絡を取ったのでしょう。10時にアポイントメントを取って、核兵器のシステム、核弾頭や誘導装置、運搬手段などについて話を聞いています。それから戦術核は重要でなくなってきた、いまの技術では目標に正確に誘導できるようになったため強大な破壊力は不要になった、いまはシステムが抑止力になる、広島や長崎の頃から技術が進んだ、日本もつくろうと思ったら1年もかからずにいつでもつくることができる、といったことです。

岩間 核弾頭をつくることはできると。

数原 つくることはできるがつからない。それが日本の抑止力になる、ということです。

岩間 桃井先生はNPTには反対はしていないわけですね。

数原 桃井さんはね。

岩間 手帳のまず決断があったというのはどういうことでしょうか。

数原 三木さんが決め、宮澤さんも同意したということだろうと思いますよ。

岩間 そのことを言っているのですか。

数原 彼の頭の中は知りませんが、そうだと思います。

■ アメリカとの関係

数原 それとアメリカとの接触も数多くありました。1975年に台湾の蔣介石が亡くなった時も、アメリカの代表団が日本の国会議員に対してNPTを批准してほしいという話をしている。これは自民党に、アメリカが何も言っていないという話はNPTの批准問題を気にしていないのではないかと議論があったのです。しかしアメリカは、公開された在日アメリカ大使館の電報を私も読みましたが、プレッシャーをかけてはいけませんが情報は集めている。私の名前も出てきます。アメリカからのプレッシャーは私も感じませんでしたが、NPTが西ドイツと日本を念頭に置いていたこともあって、水面下で必死に情報収集はしていたのです。

白鳥 アメリカ側は軍縮室長にも会いに来ましたか。

数原 何回も来ました。

白鳥 アメリカ大使館の館員が大使のもとに訪れてくるのですか。

数原 そうですね。それから駐日大使が次官に会いに来ることもあります。後からお話しますが、駐日大使も務めたSALT交渉の担当者、U・アレクシス・ジョンソン大使に説明に来てもらったこともあります。

武田 シンクタンクのようなアメリカの民間レベルはいかがでしたか。

数原 それは通産省や原産会議、今井隆吉さんたちが担当してい

た。彼らとしても早くユーラトム並みを確保して平和利用を進めたいし、輸出国にもなりたかったですから。

白鳥 今井さんについて何か印象に残っているようなことはございますか。

数原 今井隆吉さんは原子力についての権威であると共に、それ以外にも広く、政治家に対しても顔がききました。

武田 政治家の方ともよく話をされていたのですか。

数原 それはもう、中曽根さんのブレーンということで。ただ、国内で話題となりますと政治家の方に根回しする際には直接言うて話に行かなくては駄目なのです。俺のところはどうして来ないのだという話になりますので。三木さんのブレーンだった方に、私は宇和島出身であなたの選挙区で、という話をしながら説明した覚えもあります。

武田 それは要請を受けて行くのですか。それともこちらから説明しに伺うのですか。

数原 こちらから行きます。

岩間 ではしらみ潰しに行くわけですか。

数原 次官や外務審議官とも相談しながらどういう順番に行くか、誰が行くかを決めます。偉い人になると僕が勝手に行くわけにもいかぬから、では外務審議官と一緒にこうという話になる。おかげで私もメディア、原産会議、政治家と色々な人に会いまして、随分と顔が広くなりました。出馬しないかと言われたことがあるくらいです。

岩間 さきほどの桃井さんについての手帳の記述なのですが、中曽根さんに比べると随分リーズナブルな意見を述べておられますね。

数原 中曽根さん自身もリーズナブルでないとは言わないけれども。

岩間 戦術上そう動いていただけで、こういうことも中曽根さんはわかっておられたということですか。

数原 政権をどうするかという次元の話ですからね。

岩間 なるほど。

数原 ただ一方で、桃井さんは知的に政策判断もするわけです。

岩間 桃井さんは核戦力がシステムであって、爆弾だけ持つても意味がないとおっしゃっているわけですね。そして日本はNP Tを批准した上で交渉をした方がいいということですか。

数原 その段階ではまだ保障措置協定締結交渉でユーラトム並みを確保できてはいない。NP T批准と一緒に、一遍に進めてしまった方がいいということです。核を持つかもしれないと言ってもそれは竹光で、実際にはアメリカに守ってもらっているのです、何の脅しにもならないと言っている。

岩間 桃井先生自身は早く批准した方がいいと思っておられる。

数原 だんだんと変わってきているというか、中曽根さんも次第にそのように腹をくくったということでしょうね。

岩間 また日米関係もこじれていたとありますね。

数原 そうですね、さっき話しましたとおり、防衛問題で何もし

ない、経済問題でも非協力ですから、NPTにも入らないとなるとますます日米関係が危うい。日本は身勝手にもほどがあると思われるということです。

岩間 しかし自民党にはアメリカ外交、特にキッシンジャーに対して全般的な不信感があるということですか。

数原 通貨、石油、インドシナ、ベトナムと問題が山積みで、どこまで頼りになるのかということです。

岩間 ここでもキッシンジャー＝中曽根の議論が出てきています。これは相当関係者の中では有名なエピソードだったのですね。

数原 いや、そうではないと思います。

岩間 違いますか。中曽根さん自身が桃井さんに対して何か言っておられたのでしょうか。最後に非核三原則の話も出ています。

数原 国会では三原則のうち「持ち込ませず」が問題にならないかと議論になったのですが、それはNPTとは無関係だと僕らは整理していました。

岩間 なるほど。ここではstorage、passage、deploymentは違うという話も出ているようで、その辺の曖昧さが関係者の間にもあったのでしょうか。

数原 国際的には笑われる議論です。

武田 質問の3はこんなところで。

数原 1時間半ぐらい経ちましたので、少し休憩入れますか。

(休憩)

武田 では、再開ということで。

数原 アメリカとの関係では、記録が残っているエピソードが二つあります。一つはさっき言いかけた、蒋介石が亡くなった時に葬儀に参加した日米関係者同士の会見で、外交史料館に係る史料が残っている(国科「わが国のNPT批准に関する米側の動き」1976年2月21日、『日・IAEA国際原子力機関との核兵器不拡散条約(NPT条約)第三条1及び4の実施協定(保障措置協定)／国会審議、批准』(2014・2754)所収)。その時、アメリカ側からいつ日本は批准するのだという質問があった。在日アメリカ大使館のブルーム参事官からの話です。

白鳥 1975年4月5日ですね。

数原 4月、台湾で蒋介石総統の葬儀の際、ロックフェラー副大統領は自民党議員と懇談し、我が国のNPT批准について意見交換したと。その際、ロックフェラー副大統領は自民党議員に対して、日本は独立国家であるので米国としては日本のNPT批准を強要するつもりはないが、しかし日本がNPTに加盟することは極めて歓迎することである旨語ったという情報です。

その後自民党のタカ派から、米国は日本がNPTを批准することをそれほど望んでいないのではないかとという噂が流布され、NPT批准促進に水をかける結果となっており、米側としても困っている。自民党議員がロックフェラー副大統領の話を言語的な障害のために誤解したのか、あるいは故意に米側の意図を曲げて噂を流したのか真意はわからないが、日本のNPT批准を望む気持

ちはアメリカとしては変わりないので、自民党右派に対し米側の真意を伝えるべく一席設けるつもりである、その際米側としては日本のNPT批准を望む気持ちは変わらず、日本の早期批准を極めて歓迎する、もし日本がNPTを批准しなければ、米国としては原子力平和利用面でいつまでも日本をNPTの加盟国として扱うのは無理だという話があった、ということです。

もう一つのエピソードは、在日アメリカ大使館から本国への電報です。2月17日で、时期的には一つ目と同じころです。河野（謙三）議長、佐藤元首相、福田（赳夫）さんらが一生懸命になつて賛成するように動き回っていると。Nakasone apparently least positive but even he agreed to consider matter very seriously ともあります。自民党内の反対については、"Following successful negotiations with IAEA, argumentation by "hawks" has shifted from equal treatment by IAEA to usually emotional argument that Japan's national security would be jeopardized by early ratification of NPTとある。そして nuclear option をなくすことについて議論され、次第に future threat to national security の問題に関心が移る。Kazuhara said following that meeting, Miki instructed Miyazawa to prepare new thesis to campaign for ratification とあって、さらに私が問題は安全保障だという認識を示したと。

それからさきほど触れた、IAEAとの保障措置協定締結交渉については党の了解をとるのはやぶ蛇だという話が続きます。そして Stressing personal nature of question, Kazuhara then asked if

USG intended to take any action regarding Japan's ratification of NPT ということ、私がアメリカ側の意向を聞いた。Recalling past indications of high-level USG interest in early Japanese ratification, he said that LDP opponents are, nevertheless, effectively using argument that USG has shown no recent concern whether Japan ratifies or not ということで、当初はタカ派がアメリカの関心は薄れつつあると触れ回っていたのです。そして pressure は would be significant contribution to GOJ と私が言ったとも報告しています。その後は大使が次官に会いに来た時の模様です。こうして日米両政府が、批准に向けて水面下で協力していた。

白鳥 大使の御記憶とも一致しますね。

数原 そうですね。結局、国際政治上の知的な議論ではないのです。こちらは筋を通して話さないといけません、政治家は全然次元の違う判断基準で行動されている。

■ 宮澤外相訪米（1975年4月）

武田 そうすると、宮澤訪米はそういう意味でかなり重要だったのでしょうか。

数原 訪米の結果を部会で報告したのは意味がありました。外務省は国会に対して批准しろと言うだけで汗をかいていないという低次元の話がありましたから、北沢（直吉）さんなどはよくやったと評価される。いわば我々は不満のはけ口になっていて、何か

対応をする必要があったのです。そこで宮澤さんが訪米して、4月のフォード大統領による「日米安保条約はアジア太平洋地域の安全の要」という演説に続いて、キッシンジャーとの間で日米安保はアジアの安全保障の要だと再確認した。それでよくやったとなり、前へ進み始めたというだけの話なのです。

白鳥 少し戻るのですが、宮澤訪米の報告があった合同部会が第6回で、その前の4月7日に第5回が開催されています。

数原 手帳を見ますと記述があります。党本部に行っていました、率直に話してほしいと。北沢会長がNPTに入ると日本の安全保障へ影響があるか、日本には安保条約がある、しかし日米間の長期維持の保障が欲しい、それがあると党内を説得しやすい、充分話してきてほしい、と話していますね。

白鳥 党からの要望ですか。

数原 党側。訪米してそのような話をしてきてもらいたいということでしょう。その次に2番と書いてある。核持ち込みの問題です。外から見ると日本とアメリカで解釈に食い違いがある、アメリカは持ち込みとNPTは関係ないと言うが、日本国民はそうは思わない、それから日本側は領海の通過もできないと解釈している、岸内閣以来十分話し合っただけ食い違いがないようにしているけれども、タカ派は問題にしている。NPTとは直接関係ないのですが、非核三原則のうち持ち込ませないが有事に問題とならないか、という議論がされている。津軽海峡という書き込みも海については持ち込み禁止とは関係ないのではないか、という有田審議

官の発言。総理はそう説明されたと大臣が言ったということですね。総理は三原則でいい、米と密約するのも問題と。NPTを批准しても全然問題はないのだという意味なのでしょうね。

岩間 その下の有田審議官の話は何についてでしょう。

数原 海洋法会議、津軽海峡の問題、海の上まで持ち込みになるから通過してはいけないのだという、持ち込みの話をどこまで広く解釈するかということでしょう。領海まで延長、非常識か、米はそんなことはないというのは理不尽だ、ソは仕方がない。これはよくわからないな。

武田 ソ連の核搭載艦船が通るのは仕方ないが、アメリカの核搭載艦船は入るべからずというのは理不尽だろうという意味ですか。止めようがないと。

数原 そうね、なるほど。しかし内水は残るといふのはなんでしょう。ごめんね、私もよくわからない。

武田 この頃問題になっていた国連海洋法条約で領海を12海里に延ばしていますので、それに関係した議論でしょうか。そうしますと政策的な議論もこの合同部会ではしている印象があるのですが。

数原 その次のページは社会党ですね。

岩間 北沢さんが結構発言されていますね。

数原 抑止力で守ると言ったことなし、あらゆる武器を使ってこの点をはっきりさせると。特にヨーロッパ正面での通常兵力の劣勢を補う意味があるので、核兵器が必要だということですね。そ

の基本線を守らず核兵器は使われないとなると片手落ちて、通常兵力で席捲されてしまう。

北沢さんは守る意思が大事、条約上の義務でなく信頼関係が大切だとおっしゃっている。中ソ条約で両国が核の傘について取極めをしたように。坂本さんもそこは一步足りない。有田さんは非核三原則を二原則に落とせと言っている。日本の態度を変えないとアメリカとの信頼関係はありえない、いまは事前協議が建前で持ち込むことがあり得る状態だと。

白鳥 ちょうどこの時期の新聞報道でも、国会で核持ち込みに関する議論が行われて、宮澤外相がこういった形の答弁をしているというのが出てきました。

数原 大臣は常にノーと言うのでは困るということですね。

白鳥 三木さんはノーもあり得る、宮澤さんは理論的にはそうだけれどもという話をされていますね。

数原 なるほどね。それで合同部会で腹を割って米と話してくれると有田さんが言い、大臣が党内で議論と言っている。

白鳥 その新聞報道は宮澤訪米後です。訪米前の合同部会での議論が日米間の協議につながっているということでしょうか。

数原 条約上の解釈はそうかもしれないが、議論が必要だということでしょうね。

それから、インド核爆発についても記述がありますね。やり者勝ち、制裁も何もないと。確かにいまアメリカがインドと原子力協定を結んで、現実的にアメリカはどんどんやるのだから現状で

は日本が損をするだけだという話は私も外務次官に問題提起しました。

武田 一番下の記述ですね。

数原 ただ日本が核を持つことについては、NPT批准時に我々事務方でもそれは無理だという話になった。一番いいのはみんなに核を持たせて互いに牽制し合うことだという議論もありました。北朝鮮は自分が核を持つて相手を牽制するという態度でよし、アメリカが北朝鮮やイランに核を持つたというのは不平等なわけです。そういう思いは当時もありました。しかし現実的には、日本が核を持つてと言ってもそれは竹の刀ではない。

それで宮澤大臣がアメリカから改めて約束をとってきて、評価されてNPTが国会に提出されるわけです。

白鳥 宮澤訪米の場合、NPT批准が議題の一つですが、軍縮室長にはどのように情報が回ってくるのですか。

数原 普通に電報が共有されました。

武田 宮澤訪米自体は以前から計画されていたものなのですか。

数原 外務省としては外務省が何もやってないではないか、核の不使用について何か言質を取ってくるべきだ、といった不満は承知していました。

武田 これが一つの決め手になって、党内が何とかおさまって条約が提出できたということですか。

数原 そうですね。もちろんアメリカの約束したことは我々としてもわかっていたことなのですが、アメリカに行って一言とって

きた、汗をかいたというのが役に立ったのです。

武田 これは前から予定されていた訪米をうまく使えたということなのでですか。

数原 そうそう、そのために行った。

武田 日程的にすぐありがたい時期に訪米が予定されていたのですね。新しい政権が来るとワシントンには行っていますか。

数原 だけど、これはやはりNP T批准のために行っただけですよ。もちろんアメリカも日本の批准を期待しているので、当然議題になる。

武田 アメリカとしても、こういう形で日本に保障を与えてNP T批准を後押しするのは問題ないわけですか。

数原 だけでも、すでに言ったとおり、アメリカが批准をやれとプレッシャーをかけるのは恩を買うことになる。ただいまある批准という問題に取り組むという図式です。それが外交というもの、NP T批准は新しい取り組みや成果ではない。アメリカが何か新しい責任を追うことにはならない。それが外交ですよ。

武田 訪米ではこれまでのことを確認したけれども、それが国内政治上は大きかったということですね。

数原 日米関係のあうんの呼吸というのは一番おもしろいですね。ただ、日本は守ってもらっているが、国内世論はそう認識していないので、僕らはいつもそこで内外の板挟みになります。内外の違いを説明しなければいけないから二枚舌だと言われる。

白鳥 2月に入ってから、最初の合同部会が2月8日、最後の合

同部会が4月18日で宮澤訪米報告、政調で決定するのが4月23日ですが総務会は保留、4月25日に総務会提出決定という流れですね。約3カ月弱の間は、基本的には自民党とのやりとりが一番中心になっていたということですか。

数原 いや、野党、産業界、メディアなどにも説明に行っていました。

白鳥 この時期から。

数原 この時期から。自民党内の議論もオープンになって報道されますし、産業界などもそれを見守っていますから。それに自民党で総務会まで通したのに野党をほったらかしにしていたのでは、今度は野党がむくれます。政治家というのは俺のところの説明に来た、来ないというのを一番気にする人でしょう。だからこちらは走り回らなければいけなかった。それが重要なのです。

白鳥 実際の批准までにはさらに1年以上かかるわけですが、いま振り返られて国会提出までの時期をどう評価されていますか。

数原 最終的には継続審議に持ち込まれたわけで、権力闘争の中での仕事だったと思います。三木政権への反発もあって、自民党が分裂するのではないかと懸念されるという、権力闘争の次元の問題になりましたから。

白鳥 これほどの密度で、自民党内で議論するということは、この後はなかったのでしょうか。

数原 あまりなかったですね。根回しをやり続けて、国会提出までこぎつけました。継続審議といっても山を一つ超えていますか

ら、後はそれをどう最後まで持つていくかという話になるわけです。

武田 この段階では今国会はもう通らないと見ておられましたか。

数原 最終的には中曽根幹事長が判断するのですね。

武田 中曽根さんがそういう判断に至る前はいかがでしたか。

数原 その段階ではまだ一生懸命やっていて、外にもそう説明していました。特にまたお話しする再検討会議では、日本の主張が数多く取り込まれましたからね。

武田 では、今日はこれぐらいで。次回は再検討会議のお話から再開することです。

数原 そうですね、そうしてください。

数原孝憲

オーラル・ヒストリー

第4回

開催日： 2017年12月21日

開催場所： 政策研究大学院大学

〔出席者〕 （肩書きはインタビューの時点）

数原 孝憲 （元アイルランド大使、元国連局軍縮室長）

岩間 陽子 （政策研究大学院大学教授）

武田 悠 （成蹊大学アジア太平洋研究センターポストドクター）

白鳥 潤一郎 （立教大学法学部助教）

■ NPT第1回再検討会議

武田 大使、今日も先週に引き続いてありがとうございます。先週は、お渡しした質問事項の4、1975年4月に宮澤外相が訪米してキッシンジャーをはじめとするアメリカ側と会談したところまでお聞きしました。

今日はその次の5、前回の一番最後に少しだけさわりをお話いただいたNPTの第1回再検討会議からです。初めての再検討会議ということで、その後5年ごとにやる会議よりもかなり重要だったのではないかと思います。その会議にどのような対処方針で臨まれたのか、またNPTを国会に提出した日本政府がこの会議に何を求めているのかといったことからお話いただけますでしょうか。

数原 日本は第1回再検討会議から締約国として出たいということと、NPTの批准審議を促進し、もう一步のところまで来ていたのですが、残念ながら国内政治上の理由からそれができなかった。それでも再検討会議の前には、NPTは国会に提出されていたわけです。

武田 その直後に会議が行われたということですね。

数原 それで、その再検討会議の開幕直前に急に加盟国が増えて全部で92カ国になったのです。その中にドイツも入りましたし、同じヨーロッパからはベルギー、オランダ、ルクセンブルクなどが入りました。

武田 いま大使がご覧になられているのは手帳のどこでしょう。

数原 再検討会議ということで、手帳4の真ん中よりすこし前です。会議開幕時には92カ国となったと書いてあって、主な国は大体入っているのですが、核保有国では中国、フランス、イスラエル、インドが入っていない。その他にパキスタン、南米のアルゼンチンやブラジルなどです。

条約の加盟国が増え、その意義がだんだんと国際社会で確認されつつある中で、日本もそうした国際的な動きに参加するべきではないかという議論が、国内でも少しずつ高まってきた。この条約を強化し、核を持つ国をこれ以上増やさないよう訴えていくのがいい、核軍縮の推進や原子力平和利用の促進といった批准の条件も整った、我が国の安全保障についても日米同盟がある、という議論です。そういう中で開催されたのが第1回の再検討会議でした。

日本にとってこの会議に臨むポイントはいくつかあります。基本的には、前から言っていますように、NPT批准に対する基本的なポイント、特に日本にとってのポイントは大体もう出尽くしている。日本の安全保障、不平等条約という性格、それから平和利用の3点セットです。ですから再検討会議にもこの3点で臨むという戦略だったわけですね。いま言いましたように加盟国が増え、国際的なモーメンタムが増しつつある中で、日本の主張がどこまで反映されるかを、国内で自民党が見ているという状況でした。

日本として何より求めたのは条約の見直しや有効期限に関する事項です。日本としてはNPTに対して、たとえば軍縮や平和利用の促進といった自分たちの主張が本当に実現していくのかを注視していた。そのためには定期的にレビューをする機会を設ける、あるいはこれを永久の条約として固定化しないことが必要でした。

そういった日本の主張が、この会議の最終宣言には全て入った。それはなぜかと言うと、アメリカには日本に入ってもらいたいという気持ちが強くあったからです。国際社会でも、西ドイツに続いて日本にも早く入ってほしいという要求があった。それによってNPT自身の重みが違ってくるからです。

武田 再検討会議そのものは、日本の提案もあつて条約の形成段階で入ったわけですね。これについては、たとえば参加する国の範囲や資格は規定されていたのでしょうか。

数原 再検討会議は基本的に締約国の会議です。

武田 しかし日本は、署名はしたけれども批准はしていない。他にもそういう国が多数いますね。

数原 しかし特に日本には入ってもらいたいということで、オブザーバーという形での出席になりました。

武田 これは何か規定はあったのですか。

数原 いや、オブザーバー出席などについて特に規定は何もなかったと思います。しかしNPTに入ってもらいたいし、日本の主張もできるだけ聞くということで参加できた。

もともと条約の形成段階でも、東京で日本はアメリカと協議し

たのです。その頃、我々は軍縮問題に関する体制が整っていないかったために人数も少なくて、ジュネーブに出かけていって協議できるほどスタッフがいない状態ですから、アメリカ側が東京に来て米ソが作成した条約の原案について協議し、日本側の考えも聞いた。

また我々も、再検討会議で成果を出して国内の批准を進めたいと考えていました。特に再検討会議の最後の段階になると、採択文書に日本の提案や主張がどのぐらい入っているかとかいうことを、会議が行われたジュネーブとも連絡し合つて確認する。一方でジュネーブからは、日本の批准の見通しを聞かれるのでそれを説明する。最後は電話で文言を確認し、批准の状況を説明するという状態でした。私の手帳を見たらわかりますけれども、5月末の採択直前は連日電話して、土日にも出勤して、結果がわかればすぐ国内の関係方面に情報を流しています。

白鳥 この時、再検討会議に実際に出席していたのはジュネーブの軍縮代表部ですか。

数原 そうですね。他に東京から何人か出席したかもしれませんが私は行っていませんけれども。

白鳥 数原軍縮室長の役割というのは、この会議に関してはどういったところにあったのでしょうか。

数原 私の役割はいま申し上げたとおりで、東京で方針を作成するということです。平和利用の確保、不平等性の解消、それから日本の安全保障などについて日本の主張がどこまで反映されるか、

再検討会議でどこまで受け入れられるかがポイントでした。

武田 ということは、現場では別の方が指揮をとっておられて、大使は軍縮室長として東京で全体の調整、出先との連絡、政策の形成といった全体を見る役割を担っていたということですか。

数原 全体を見ていたということです。私の関心はどちらかと言うと、国内の反対派をいかに説得するかでした。

白鳥 会議の前に、日本の案がどれくらい最終宣言に挿入されるか、という見通しがありましたか。

数原 いや、それはやってみなきやわからなかった。ただ当時国内では、外務省は国内で国会に向かって早く批准しろと言うだけでなく外に向かって汗をかけ、というのが基本的な空気だった。そのためには日本が重視するいくつかの問題点が解決した、という形をつくる必要がある。そこで再検討会議では、そこでの議論なり最終宣言なりの行方を常に見て、それを国会や自民党に逐一報告をする。つまり国内と国際の間の接点に立って仕事をしていたということです。

武田 日本は会議開催直前にNPTを国会に提出できましたけれども、もしできなかったら再検討会議では日本は苦しい立場に立たされましたか。

数原 日本は少なくとも5年前に署名しているわけですから、それならばオプザーバーという形で参加はできます。ただしそれだけじゃなくて、いま言ったように日本に入ってもらいたいというアメリカやソ連の意図があった。

岩間 署名したが批准していない国は7カ国参加しています。エジプト、日本、パナマ、スイス、トリニダード・トバゴ、トルコ、ベネズエラです。全く署名していなくて参加した国もあるのですね。

数原 そうですね。その点日本は堂々と入れたということでしょうね。

岩間 会議の直前、日本とIAEAの保障措置予備交渉が妥結していますが、これには大使は直接立ち会ったわけではありませんか。

数原 直接は関係していません。これは科学課の担当で、IAEA事務局と交渉しています。ただし、私どもも交渉は注視していました。日本がユーラトム並みの保障措置を受けることができるか、保障措置を実施する主体がアメリカからIAEAに変わることで日本の技術が漏れかねないような形で査察が行われなにか、という懸念がありましたから。つまり新たな保障措置でユーラトム並みの待遇を得る、西ドイツと同じ待遇になるということが原子力産業にとっても、批准のためにも重要でした。そのために外務省からは科学課が、他に通産省や科技厅からも関係者が出て交渉をし、満足のいく成果が出て、批准を後押ししたという図式です。

武田 それ以外の要素として、先ほど次第に批准国が増えたということをおっしゃっていました。批准する国の数以外に、たとえば大使の作成されたクロノロジーでは、1974年3月に西ドイ

ツがNPTを批准したことが記されています。こうした西ドイツをはじめとする個々の国の動向というのは影響したのでしょうか。そろそろ日本も批准しないと、という空気にはなりましたか。

数原 それはそうです。国際社会がその方向に向かって進んでいることですから。それでも日本では、中国やフランス、イスラエル、インド、パキスタンなどはなぜ入らないのか、それなのになぜ不平等条約に日本が入らなくてはならないのか、といった議論がありました。しかし、国際社会のモーメントがもうこれ以上核兵器を持つ国が増えないようにしようという方向に向かいつつありましたから、日本もそれに乗り遅れないほうが国益のためになるという判断だった。

岩間 中国が初めて核実験してから約10年経った頃ですね。日中関係も核実験当時とはずいぶん空気が変わってきていたと思いますが、日本国内で中国、特にその核兵器が脅威だという意識はありましたか。

数原 不平等条約だという意識はありましたが、今日、中国に対して抱かれているほどの懸念はなかったと僕は思います。当時はむしろデータが進みつつあった。主たる脅威は米ソの戦争だったわけです、30年前の中国はいまほど大きな脅威ではなかったし、核保有国としてもこれからどうなるかわからぬという状態だった。北朝鮮も同じです。全然そういうものがなかったわけですね。問題は圧倒的な核戦力を持つ米ソがどうするかでした。

岩間 別の方の研究によると、IAEAとユーラトムの間の保障

措置協定締結交渉は難航して1973年までかかり、それを受けてようやくユーラトム諸国がNPTの批准を始めています。

数原 そうですか。私も西ドイツにいろいろな機会で行きましたが、ユーラトムで守られている西ドイツと日本では、安全保障の面でも平和利用の面でも違うということを口を酸っぱくして言いました。日本は裸だと言うことです。

岩間 ただ西ドイツにもそれなりに、アメリカに見捨てられる不安というのがありましたね。結局NATOという枠組みがあっても、最終的にアメリカが本当にコミットしてくれるかという問題がある。

数原 それはおっしゃるとおりです。それでも、単独でアメリカだけに全部頼っている日本と、ユーラトムで平和利用を、NATOで安全保障を確保しようとする西ドイツでは違います。

もちろん当時は、まだ発展途上の日本の原子力産業を育てる必要はあった。しかし中曽根さんではないですが、他の国はまだ入っていないのになぜ日本だけがその不平等条約に喜々として入らなくてはならないのか、というプライドの問題があった。

岩間 ドイツでも同様に、保守の右派は不平等条約だ、ベルサイユ条約並みだと主張する政治家がいました。

数原 日本と同根ですね。

岩間 それが次第に少数派になっていき、やがて社民党主導の政権に交代して空気が変わっています。ところが日本はずっと自民党ですね。

数原 その後も。しかし党内では三木派とタカ派がせめぎ合っていた。日本では党の間ではなくて自民党内の軋轢になった。

岩間 三木さんは国民には人気がありましたか。

数原 それはもう。ただ、三木政権が誕生したのは椎名裁定をはじめとして内政上の理由です。NP T批准も内政問題になった。西ドイツもある程度そうかもしれませんけれども。

武田 大使が作成されたクロノロジーの中で、再検討会議の後、説明に行った自民党の合同会議や外交委員会ですごく評価されているという記述があります。これはどういった方が評価をしてくださったのですか。

数原 全体的にそう評価されたということです。日本の主張が数多く取り込まれたということで評価されて国会に提出される。ただその後も、まだまだ党内では議論がありました。

岩間 質問5の参考に入れた国会会議録では社会党の河上民雄さんが質問に立られていますね。

数原 今井さんも衆議院外務参考委員として参加されていますね。批准に賛成の立場から、NP Tは完全ではないけれども国益から見て批准がプラスになる、デタントによって核が事実上使えなくなっていくといった広い観点からの考慮に基づけば安全保障上も批准に問題はない、アメリカが守ってくれている、原子力平和利用も国際的に拡大しつつあるという議論です。

これは要するに、NP Tに署名してからだんだんと国際情勢が変わってきているということです。NP Tは本来、日本の安全保

障や軍縮の見地からさほど論争的なものではないのです。不平等条約だと言っても、それを前提の上で米ソはこの条約をつくっている。ところが日本国内での議論は、その原点に帰って日本の安全保障を洗い直そうということになってしまった。その点では日本と国際社会の議論がずれている。

いずれにせよ、再検討会議では日本の主張がよく取り入れられたという認識もあって、そろそろ批准してもいいのではないかとこの認識が自民党、民社党、社会党などに広まった。やはり広島・長崎の経験がある中で、核を持つとうという立場から国内を説得することはできないわけです。

岩間 90カ国ぐらいが出席している再検討会議というのは、どの国が仕切るのですか。やはり米英ソですか。

数原 国連総会の一般討論と同じで、最初に参加国全てがそれぞれの主張を表明し、その中で方向性が決まってくる。その時にはまだ最終宣言の文言をめぐる交渉ではないですから、各国が何を重視しているかをぶつけ合う。その後、宣言のドラフティング委員会もでき、議長国を中心に交渉が進められます。

岩間 スウェーデンがいろいろな委員会の議長をしていますね。特に日本に配慮をした国というのはあるのでしょうか。

数原 そうですね、豪州やスウェーデン。日本に関心を持っていたのは熱心なNP Tの推進国であるアメリカやカナダ、豪州です。そういう国々に日本国内ではここまで進んでいるということを詳しく説明しつつ、再検討会議でのこちらの主張をぶつけましたか

ら、先方も聞く耳を持っていました。

岩間 かなり広範なロビーイングをしたということですか。スウェーデンは主要ポストのほとんどをとっていますね。

数原 スウェーデンと、それからカナダが熱心に活動しました。そもそもNPTの原点はアイルランドです。国連総会でアイルランドが毎年、アイルランド決議案というのを出してくる。それが日の目を見て、NPTの原点になります。

武田 欧州の中小国が主導したという特徴があると。

数原 そうですね。そういう国はドイツ等と違って小回りがききます。たとえばスウェーデンはヨーロッパでも先んじて原子力発電を始め、先んじて原子力発電をやめた国です。さらに政治的にも、大国が動く国際政治上の影響が大変大きいですが、中小国なら次々と新しいアイデアを出すことができる。核問題に限らず、ベンチャー企業のように思いついたら何でも出してくる。

武田 カナダとかオーストラリアは資源国ですね。できればウランを輸出したいという経済的な思惑はあったのでしょうか。つまり核不拡散上はNPTに入っている国でないはずですが、同時に経済上は日本も大事な客だという事情です。

数原 そうかもしれない。ただ現実的な利益というよりも、いわば小国の生きがいとして、大国を相手に国際政治の場で丁々発止のやりとりをし、存在価値を高めるという図式じゃないかと思えます。

武田 再検討会議で受け入れられた日本の提案の中で、一番国内

で受けがよかったのは何でしょうか。大使作成のクロノロジーだと非核保有国の安全保障が強調されていますね。

数原 安保理決議255もそうですが、国際的に重要だったのがこの問題です。日本はまだアメリカに依存することができずし、西ドイツのような多くのヨーロッパ諸国はNATOがあり、ユーラトムがある。しかしたとえばスイスやオーストリアといった中立国はそれがないですし、他の多くの国もそうです。

白鳥 自民党内では、有田圭輔外務委員長から80点とれたという評価をされていますが、大使のクロノロジーによれば日本の主張は全面的に最終宣言に挿入されたわけですから、外務省事務局としてはむしろ100点ということなのではないでしょうか。

数原 そうですよ。自画自賛があったかもしれないけど、100点と言って説明した。本当にそうだったと思います。それだけアメリカなど関係国にも日本に入ってもらいたいという意思が強かった。

白鳥 これは外務省としては期待どおり、もしくは期待以上の成果がとれたということですか。

数原 期待どおりでした。それで日本国内のコンセンサスづくりを進めることができた。ただ、何が何でも阻止したい人たちがいるわけで、何でも反対の口実にはなりますが。

白鳥 とはいえ4月の宮澤外相訪米、5月のNPT第1回再検討会議と、2つ外務省の大きな努力があった。

数原 それが評価された。

■ 通常国会での審議

数原 それでも内政上は、自民党が分裂するという懸念があった。それで野党が文句を言うわけです。たとえば公明党では、あれほど自民党が、中曽根幹事長が批准してくれと頼んできて、党内をまとめたと思ったら延期が決まって後ろから銃撃された格好になった。私の手帳にも残っています。それで中曽根さんも、来国会では必ず通すと一生懸命言い訳をしている。社会党には公職選挙法を優先させたとか、いろいろな不満が残った。

結局のところ、三木さんが最後に説得を諦めたのです。そして中曽根さんにもうちよつと待てと言われて、それに素直に従った。とはいえ自民党内の情勢を一番見ているのは中曽根幹事長で、無理押しして党を分裂させたら政権が危うかった。

武田 今国会では駄目だという感じになったのはいつごろですか。最初に国会に提出した時は、今国会で通すという見通しは一応あったということですか。

数原 一応見通しはありました。総理と外務大臣がやろうという決定をしましたしね。しかし出してみたら喧々諤々の議論になった。

岩間 4月の外相訪米、5月の再検討会議で80点と言っていたのだいたとは言え、6月の外務委員会で延べ34時間の審議というのは相当なものです。

数原 そうです。国会での条約の審議にはパターンがあつて、何

時間も審議をした上で、最後の締めくくり総括質問に総理が出て、発言してそれでしゃんしゃんと手を打って条約を採択するというものです。NPTもそこまで来ていました。十分審議時間をとつて、衆議院の外務委員会でも党でも議論をした。後は総理が来て最後の総括質問をやらばいいというところまで。共産党を除く各党の間でもコンセンサスができて上がっていた。しかし自民党の中が最後までまとまらなかったということです。

岩間 そうすると、野党対策もやられていたわけですね。

数原 もちろんそうですよ。

岩間 それでいろいろなところへ説明に行ったが、帰ってくると自民党の中がけんかしていたと。

数原 というより、中曽根幹事長がいまはNPT批准をやらないと言われたら、これはもう神の一言です。

岩間 それはどの段階ですか。

数原 もう最後の段階です。最後までみんなやると思っていました。我々も、それから他の野党や。ここまで根回しをして、議論をして、野党まで引き込んで批准しよう、お願いしますと言っていた自民党が、党内事情から継続審議にしろと言いだした。当然野党は反発しました。これについては手帳にも書いてあります。

武田 手帳5の最初の方でしょうか。継続審議確定というタブを張っていらっしゃいます。

数原 衆議院、継続審議確定というのが6月18日ですね。ここにも書いてあるけれども、日中平和友好条約と日韓大陸棚条約もこ

の時、審議されていた。

岩間 非核三原則とあるのは何でしょうか。

数原 非核三原則の実効性というのは、社会党の檜崎弥之助さんが、持ち込ませずに関して具体的な努力をすべきだ、実際には持ち込んでいのではないかという議論をしていたのです。アメリカはNCND政策をとっていて、核兵器の配備について否定も肯定もしていません。それがわかればそこを狙われますから。

その次のページからが継続審議になった時のメモです。社会党の石橋さんにとっては、中曽根さんが一度は批准への賛成を依頼し、それに応じて一生懸命党内をまとめたのに、今度は党内事情から今国会ではやめてくれ、来国会は必ず通そうと言われて怒ったわけだね。それから、河野洋平さんも条約案をたくさん出し過ぎたと言っている。

白鳥 これは各議員の事務所に行かれたのですか。

数原 行って話を聞いているわけです。ですからNP T云々というより、国会運営の方法に反発している。それから外務省の各担当課としては、条約の採択ないし批准が積み残されたら次に回されるわけで、当然自分の担当のものを優先してくれと言う。

武田 その次、河野洋平さんの下は外交部会長の坂本三十次さんですか。

数原 そうですね。石橋・中曽根会談で、中曽根さんが来国会では批准すると説明したということです。それから三木事務所では、三木首相が最後はもうやる気がなかったという。

武田 力尽きたのでしょうか。

数原 というより、中曽根さんがそう言って、かつ党を割ったら三木政権が倒れる恐れがあった。内政の問題です。

白鳥 来国会というのは次の年の通常国会ということですね。

数原 そういう意味です。

武田 臨時国会ではない。

数原 その時にはそれはわかりません。その次は公明党の渡部一郎。行きづまった理由を公明党が説明している。社会党は公職選挙法をぜひ通したかったと。

白鳥 公明党の渡部さんは先ほどお話しいただいたように、中曽根幹事長が後ろから銃撃したと言われたということですね。

数原 公明党はたとえば社会党ほど左の立場に立つ、ということはないです。ただ派閥次元の問題でNP T批准を見送るのはけしからんということです。

岩間 民社党はどうだったのでしょうか。

数原 もうこの段階では賛成に踏み切っていた、でも政治的な思惑もあって、政府のお願いになかなかうんとは言いません、しかしどこかでもう「うん」と言わなきゃならない。ところがそう言っていた後で、自民党の派閥争いで見送りになった。だから野党が怒ったんです。

それとここにも書いてありますが、予算や条約も含め、外務省は国会対策が下手です。外務省は国際交渉ばかり。私も大蔵省主計局で予算をやりましたけれども、他省庁は予算を通すために大

変な根回しをしていて、予算をどうつけるかで争って、それぞれに族もいる。しかし外務省は外交や安全保障といった国益があるという事情からか、そういう交渉が下手です。

岩間 日韓、日中については外務省の中でそれぞれ担当者がいるわけですね。

数原 地域局です。

岩間 それ以外に全体、国会の状況を見る人たちもいるわけですか。

数原 それはもう次官であり、条約局です。

白鳥 官房長はどうでしょうか。

数原 両方です。ただそれも外務省がどうこうできる話ではない。各党の国会対策委員長や幹事長が内政の見地から判断しますので、外務省はあまり動かない。

白鳥 その時は大河原良雄さんが官房長で、翌年1月に松永信雄さんに代わっています。また条約局長は松永さん、翌1976年に中島敏次郎さんですね。

数原 条約の批准というのは条約局長が取り仕切ります。国会答弁も全部条約局長です。

武田 松永さんが条約局長、官房長という形で幹部の中では重要なポストにいらしたということでしょうか。一方で自民党では、国対委員長が宇野宗佑さんです。宇野さんについての印象はいかがですか。

数原 いまと同じように、各党との調整は国対が取り仕切るわけ

です。

白鳥 この時の審議の中身について当時印象に残ったことはありますか。

数原 宮澤さんの答弁は完璧でした。普通、外務大臣は後ろからささやかないと答弁でなかなか思うとおりに言ってくれない。外務大臣が何と言うかは一言であつても決定的です。その点、宮澤さんは頭脳明晰ですし英語をあれだけしゃべられる人はいない。彼が答弁してくれるから、事務方は安心していました。出勤してくる時に車の中で読んでもらうということもなかったです。そのかわり秘書官とは常に連絡していましたが。

一番やったのは三木さんにこんなにやく版を毎朝届けるということです。こんなにやく版というのは、国会の前の日に質問とりをするのです。社会党のこの議員がこういう質問をするということがわかると、こんなにやく版という、ガリ版を切ったようなものを夜に僕らが作成して、朝には官邸に届ける。そのときの秘書官が北村汎さんです。総理はそれを見て答弁するということでした。

武田 1時間ほど経ちましたので、少し休憩いたしましょうか。

(休憩)

■ 通常国会後の議論

数原 その後の国会も同じく、モーメンタムがなくならないよう

に一生懸命に根回しを続けました。政治家はすぐ忘れるので、また一から説明しなければいけませんし、情報をしょっちゅうインプットしていないと駄目なのです。

岩間 これは三木さんが直接関係した問題だったわけですね。

数原 そうです。しかし最後は、青嵐会を含めて、反対派も次第にたためにする議論は言わなくなりました。この辺が矛の収め時だと思いうまでやったわけです。そのためには世論づくりも重要でした。

岩間 ただ、いざとなったらNPTから脱退できるというような説明はかなりなさったのですね。

数原 もちろんそうです。しかしそれはあくまでたためにする議論ですし、脱退するぐらいだったら入らなければいいではないか、と切り返されましたよ。

いまから考えると、これは日本の安全保障、外交上の一つの節目であったと言えると思います。日本は核を持つというコンセンサスを形成することはありえないとはつきりと認識したということとです。

岩間 しかし国際的には日本はすぐ持てるだろうといつも言われます。

数原 今井さんも言っているように、持てる技術はある。問題はこの前言ったように弾頭ではなくて誘導技術や運搬体であり、核戦力をどう築くかということです。

岩間 国際的にもNPT発効の後にはデタントが本格化する時期です。いろいろな意味で転機だったのでしょうか。

数原 そうですね。その時期に、日本がNPTに加わらないという選択はなかったと僕は思います。もちろんこれが不平等条約であり、日本の安全保障をどう確保するか、平和利用でいかにハンディを持たないようにするかといった課題が残っていますが。

岩間 この時の議論は、歴史研究でもNPTに署名したところで大体記述が終わってしまっていて、その後の批准の過程が描かれていません。そこでこうして検証しようということです。

数原 そういう意味があるなら、僕も来る価値があるのだと思います。

白鳥 日本がNPTに調印する時、批准する時の議論というのは、いまもまた核に関しては繰り返されていますね。

数原 おっしゃるとおり、北朝鮮や中国の問題がありますし、NPTの不平等条約的な性格もそのままですね。その点を認識することも大事です。

武田 1975年から1976年にかけての短い間にも同じような議論が出てくるわけですか。

数原 1976年の国会での議論は既になされたものを蒸し返しています。

武田 基本的に1975年までに出したもの以外の論点はないわけですね。

数原 ほとんどない。例外としては、たとえばその後の核軍縮に関して、MIRV弾頭をどうするかといった問題がありました。またNPTへの署名から批准の間には、平和的核爆発(PNE…

Peaceful nuclear explosions)の問題も出ていました。

白鳥 インドが1974年に平和的核爆発だと主張して核実験をしたわけですね。

数原 しかし不平等性や平和利用、安全保障といった基本的な性格や問題は変わっていない。内容的に新しいわけではなく、忘れられないように定期的にフォローアップをする、あるいは核軍縮について駐日大使だったU・アレクシス・ジョンソンに来てもらうといったことくらいです。ジョンソンは1973年からSALT交渉のアメリカ側首席代表を務めていましたので、僕がジュネーブに行った時にお願ひして日本に来てもらって、直接の担当者から米ソ核軍縮交渉についての説明をしてもらいました。

白鳥 時系列的には三木＝フォード会談の方が少し前になるのでですね。1975年の8月です。

数原 アメリカの関与について、宮澤さんはキッシンジャーさんとの間で外相同士の口約束をした。三木＝フォード会談では共同声明に挿入された。

白鳥 この時は三木さんがごねて、共同声明は日米が個別に作成し、共同新聞発表が実質的な共同声明になったようです。そこに「核兵力であれ通常兵力であれ、日本への武力攻撃があった場合、米国は日本を防衛するという相互協力及び安全保障条約に基づく誓約を引き続き守る旨確言した」とあります。

数原 「核兵力であれ通常兵力であれ」というところが重要です。アメリカはソ連に対して通常兵力では劣勢でしたので、バランス

を保つために核が必要でした。そこで「核兵力であれ通常兵力であれ」という文言が入る。逆に言えばこの点に抵触するためにいま話題になっている核兵器禁止条約に日本もアメリカも反対した。端的に核兵器は使わないと言ったのでは、通常兵力による侵攻にどう対応するのかという問題が残る。

白鳥 この時の日米首脳会談には軍縮室長として何か関わっておられましたか。

数原 あまり記憶にない。

岩間 手帳を見ていると、1975年8月になって「SALT」という言葉が突然怒涛のごとく出てきます。次の質問7でお聞きするジョンソン大使の訪日に関することでしょうか。

数原 そうですね。ジョンソン大使が来たのは9月ですが、私は8月12日にジュネーブに軍縮委員会で行った時にアメリカ代表部に行って会っているのですよ。それでジョンソン大使の訪日の時期を調整しました。米ソ間の軍縮がSALT交渉でどのようにいま進められているか、たとえばMIRVの問題やオンサイトの検証、さらには中国の核開発能力への評価、アメリカのソ連核戦力に対する評価などを説明してくれるよう依頼しました。NPTは不平等条約だという国内の批判に対応して、軍縮への取り組みがいかに進んでいるかを示してもらおうという狙いでした。

武田 大使がジョンソン大使に依頼に行かれたということですか。
数原 8月12日に行っています。

武田 アメリカ側に別ルートで依頼したというよりも、まさにこ

のNPTの批准のためにジョンソン大使に依頼をされたと。

数原 そういうことです。もちろんそれ以外に米ソ間では、データの只中でブレジネフ訪米など他にも大事な国際政治上の問題がありました。フォード＝ブレジネフ会談が7月末にヘルシンキで行われています。

白鳥 外交儀礼上はジョンソン大使の方がかなり格上になるように感じるのですが。

数原 それはそうです。

武田 どういう形でジョンソン大使に会いに行かれたのですか。

数原 ジョンソンは政治家ではないし、元駐日大使でしたから話しやすいということです。

白鳥 この時はどういうメンバーでジョンソン大使に会われたのでしょうか。

数原 私が誰と行ったということはメモ帳に書いてないかな。内容的には大使の訪日の時期で、いま何か東郷さんに伝えておくメッセージはありますかと聞いている。他にブレジネフ訪米、ソ連の核開発能力への評価、米ソの核戦力バランスなどです。

武田 訪日の時期ということは、訪日自体はその前から調整をされていたのでしょうか。

数原 それはわからない。

岩間 運搬手段やミサイルの数、バックファイア爆撃機の制限、それから査察の問題などがあって、まだ米ソ間で交渉を続けていましたので、その説明にいらしたのでしょうかね。

数原 そうでしょう。自民党の中で随分説明しました。不平等性をどうやって解消するのだという批判を受けて、核軍縮がこまに進んでいます、SALT交渉が随分進んでいるのです、という説明をした。

白鳥 新聞記事のデータベースでは関連するものを見つけられなかったので、おそらく政治レベルでの接触はなかったのではないかと思います。ただ大使の手帳を拝見していると、防衛庁、外務省には行かれていますね。

数原 久保（卓也）防衛事務次官にも会っています。

武田 事務方への説明が中心だったのでしょうか。

数原 そうですね。それを基に自民党はじめ各所でこのような話を聞いたと、軍縮が進んでいるという話の裏づけがとれているという説明をしました。

白鳥 ジョンソン大使を招くという案はいつ頃浮上してきたのですか。

数原 覚えていないです。私の手帳では8月になってジョンソン大使、SALTといった単語がいっぱい出てきます。

岩間 ジュネーブには8月3日から随分長い間いらつしやいますね。ジョンソン大使の訪日の時期については、8月12日、米代表部、Botanicの向う、1 Rue de La Paixと記された左のページに書いてあります。そして any messages to Mr. Togo とある。

数原 つまりいつ来られるか、SALTができたら来るか、SALT交渉はいつ頃妥結するか、といったことですね。

岩間 この時の話が9月に実現したのですね。SALTに関しては、日本政府ではどこが担当していたのですか。

数原 軍縮室です。

岩間 かなり詳しいブリーフを受けていますよね。

数原 そうですね。手帳にはジョンソン大使来日9月22日ブリーフと書いてある。次のページには、防衛庁の久保卓也次官、丸山昂防衛局長、三好防衛課長。さらにその次のページには、9月22日3時50分〜5時10分、東郷、大河原、山崎、大塚、数原、ジョンソン大使、ホジソン、ピートリー参事官、マッケルロイ、アンダーソン。ジェシー・アンダーソンとはいつもNP Tの国会での審議状況や党内の状況を話していました。

白鳥 アメリカ大使館における大使のカウンターパートということでしょうか。

数原 そうです。こういう手帳類が残っていると、ビビッドにその時の記憶が蘇ってきますね。

白鳥 雑談めいたことになってしまいうのですが、文書はもちろん重要ですが、それだけだと読み取れない空気や行間をこうしてオーラル・ヒストリーで補えることがよくあります。常識ほど残らないので、非常に困るのです。

岩間 NP TとSALTに接点があったということは思い至りませんでした。SALTはSALTで勉強しますし、NP TはNP Tで勉強しますから。

数原 両方とも核兵器に関する問題ですから。

武田 ジョンソン大使は手帳から外務省と防衛庁に行かれたことはわかるのですが、それ以外にはあまり行かれていないのでしょうか。

数原 ないです。メディアとか政治家とかには行っていない。

武田 では、やはり実務レベルで。

数原 それはそうです。やはり先方の当局者から話を聞くのは失礼ですから。

■ 臨時国会での審議（1）

武田 その後、9月から12月にかけての臨時国会でも、NP T関係で動きがあったわけではなくて、大使がおつしやるとおり、忘れられないように働きかけることになるわけですか。

数原 その間に軍縮関係でということがあったかを説明し、NP T批准の必要性を再度訴えるといったところです。

白鳥 その間、大使のクロノロジーにも載っていますが、1975年11月1日の新聞各紙朝刊で、三木・椎名会談が行われてNP T批准を急ぐと確認された、と報道されています。また質問票に参考として付けたとおり、予算委員会では公明党の渡部一郎さんと三木首相のやりとりもありました。またその1ヵ月ほど前、9月23日の朝日新聞夕刊1面には中曽根幹事長が臨時国会でのNP T批准は見送りへ、という記事も載っています。この時期に関して御記憶のことなどございますか。

数原 三木さんは党内のことを頭に置いていて、政府としてはやるつもりですという一点張りですね。

白鳥 公明党の渡部さんは10月24日の予算委員会でも、NPT批准を推進しないという報道をふまえて質問をしております、三木さんは外務委員会としてはきちんと進めていく責任を持つていると述べています。それに対して渡部さんは、外務委員会や議院運営委員会を指揮しているのは自民党であり、自民党の幹事長だと指摘し、三木さんがNPTは早期に批准すべきものである、私の考え方は変わりませんとおっしゃる。それに渡部さんは今国会でやるという意味ですかと聞き、三木さんが今国会において外務委員会の審議を促進してもらいたいという強い希望を私は持つておりますと答える。最後に渡部さんは、審議を促進するといって、審議を促進して継続審議をまたやるという意味じゃないだろうかとか受け取れませんとおっしゃっています。

数原 まさにそのとおりで、政府が何を言っても党が問題。それに対して三木さんは言葉を与えていないのですね。

白鳥 この渡部さんの質問については、何か政府として働きかけたりしたのでしょうか。

数原 そんなものはない。国会の先生方に、僕らが何言ったってそんなに聞いてくれるような人はいないです。

武田 結果として野党の側からNPTを進めたい外務省への援護射撃のようになってるのが興味深いです。公明党はかなりいら立っていたのですね。

数原 この問題に関してそれぞれの党内をまとめた人は、中でいろいろな説明をしたわけです。ところが継続審議になったので責任を追及される。

武田 公明党には大使が説明に行かれましたか。

数原 よく行きました。一番説明しやすかったです。話に行きやすい人がある程度発言力を持って、党内をまとめることができた。河野洋平さんもそう。

白鳥 この後の出来事としてクロノロジーに載っているのは12月15日の新聞報道で、社会党の訪米団についてです。これはおそらく、1950年代末以来の訪米団だと思うのですが。

数原 そこで批准すると約束したのでしょうか。

白鳥 はい、訪米団がアメリカで批准の約束をしています。以前、河上民雄さんにインタビューをしたことがあるのですが、河上さんは社会党内でも結構反対があったが、自分はNPT批准の方向でまとめるように努力した、とおっしゃっていました。

数原 彼は推進派ですね。

白鳥 はい。公明党の他に社会党に関しては何か印象に残っていることはございますか。

数原 社会党の中でも左派は、アメリカの核は認められないというところでNPT反対です。あるいはアメリカの核で守られるという日米安保条約にも反対。共産党の反対も論拠はそこです。NPTは米ソの馴れ合いでそれぞれに相手の核兵器を認めたものであり、それに日本が巻き込まれることには反対する。あの頃、日本

の左右両派が一つになる問題は安全保障では無かったでしょう。

武田 最終的には賛成するわけですが、社会党の中の反対意見は何を理由としていたのでしょうか。

数原 日本がアメリカに依存し、アメリカの核兵器を認めることへの反対だったのだと思います。しかしNPT反対を言い続けるのとタカ派と同じ立場になってしまおう。

白鳥 その後、12月17日に外務委員会で継続審議が決定しています。結局、臨時国会での採択にはそれほど期待はかかっていなかったのでしょうか。

数原 臨時国会で採択まで持っていこうという意図はなかったですね。

岩間 この時期は、椎名・三木会談、中曽根・三木会談というタグが手帳にあるのですが、何か御記憶はありますか。

数原 三木さんがNPT批准を急ぐ、椎名が同意。これはつまり、総理が意欲を示し、椎名さんも批准に反対しないと述べたということです。11月1日、中曽根とあるところにはNPT批准は慎重に、今国会処理を考えない模様、参議院の反対派と話し合い進めると書いてありますね。次は総理、おそらく次の国会でやらねばならないと。一方で右のページには外務省の考え方が書いてあって、できれば今国会で批准したいというのが基本的な考え方でした。

岩間 10月31日から11月2日の間に、最終的な方針が自民党で決まったということですね。

数原 そうですね。11月のその次のページでは、外務委員理事会に宮澤大臣が出席して、前向きに説明、今国会ではお願いできぬだろうか、前回の委員会では審議は尽くした、当委員会の方針を決めてほしい、と言っている。行政府としては批准しないのは困る、エネルギー上の国益を考えると今国会での批准は考えられないか、ここまで進めてきて外国にもそういう説明をしている、ということですね。

岩間 ここでもう一度、いつやるかという山があったのですね。

数原 そうですね。NPT批准というのは、本来新聞が追いかけるほど大きな山ではないと思うのですが。

武田 しかし対立は大きかった。

数原 内政上の対立という観点からするとおもしろい。

白鳥 日本への核持ち込みに関するラロック証言が前年の1974年ですね。そういった事情もあって、核に関する話題は新聞記事になりやすかったのでしょうか。

数原 持ち込みというのは、もうずっとその前、75年の審議で一番大きな問題になっていたのです。

岩間 6月に一旦中曽根さんが継続審議を決めた後も、三木総理には11月ごろまでずっと、何とかNPTを批准したいという気持ちがあったということでしょうか。

数原 そうですね。臨時国会で駄目ならば次の通常国会と、寝た子を一生懸命になって起こそうとした。手帳の右下にあります、民社党の永末（英一）さんも自民党内を整理する必要あり

とおっしゃっている。

岩間 11月上旬に随分協議をしているのですね。予算委員会で総理が突き上げられた後に三木・椎名会談。野党はもうそれほど問題ではなくて、むしろ自民党内が争点になっていたわけですか。

数原 自民党がまとまってやると言ったらもう通るところまで来ていました。

白鳥 政府が提出している条約の批准に関することなのに、与党は割れていて野党がほぼまとまって支持しているというのは、55年体制の中では珍しいですね。

数原 ただ、反対しているのが自民党のタカ派ですから。

武田 手帳のその後ろに「風鈴」という言葉が出てきますが、これは何でしょうか。

数原 対局長とありますね。風鈴とは何か、風鈴が出てきた経緯。風鈴はおそらく、何かにくつついているものという意味でしょう。NP Tには直接関係のない、日米安保強化や核持ち込みについての問題、特に事前協議の問題といった、本質からは離れた風鈴がついている。

白鳥 この時の局長というのは大川国連局長でしょうか。

数原 そうですね。大臣は打ち消し。核持ち込みが風鈴ですね。堅持、大臣訪米、日米安保強化と書いてあるので、そういう意味にしかとれない。

岩間 風鈴の下の方、野党の受け取り方というのは何でしょうか。
数原 野党の受け取り方、国会での議論、大臣は打ち消し、総理

に。これも核持ち込みについての話でしょう。さらに社会党川崎局長談話、4月25日と書いてありますね。何でしょうか。沖縄返還後ですが、核の持ち込みの話は残っているのでしょうか。

岩間 そろそろ時間でしょうか。次回は最後の批准に至る過程の補足をお願いします。

数原 それと過去の経緯の検証に加えて、私なりの、不平等性や平和利用、核軍縮といった問題にどう対応するかについての考えもあります。国際社会はいまもお、核をはじめとする力によるごり押しという側面があるわけですが、それに日本がどう対応するか、たとえば安保理改革をどうするか、日本は核非保有国のまま拒否権なしの安保理常任理事国になるべきではないか、といったようなことです。

武田 次回まとめて、お話しいただければと思います。

数原孝憲

オーラル・ヒストリー

第5回

開催日： 2018年1月24日
開催場所： 政策研究大学院大学

〔出席者〕 （肩書きはインタビューの時点）

数原 孝憲 （元アイルランド大使、元国連局軍縮室長）
岩間 陽子 （政策研究大学院大学教授）
武田 悠 （成蹊大学アジア太平洋研究センターポストドクター）
白鳥 潤一郎 （立教大学法学部助教）

■ 臨時国会での審議（2）

武田 前は質問票の7、ジョンソン大使が日本に来られた1975年の9月までやらせていただいたと思います。

です。今日は7からです。1975年9月から12月にかけて、一度NPTを国会に提出するのですが、中曽根幹事長が延期を決定し、9月からは臨時国会が開かれています。この間にどういう動きがあったのかは、なかなか公開資料からは読み取れません。

数原 基本的には、公の場というか、国会での議論はその前の段階でもう全部出尽くしています。署名後の5年間で十分議論はしていた。しかも通常国会での総理の総括質問も終わって、あとは批准するかしないかを決定するだけという段階まで議論は進んでいたわけです。その後にはもう新しい論点は出てこないと言っていると思います。

では何をやっていたのかと言いますと、もっぱら根回しです。裏の舞台の話が中心になります。

武田 誰に対する根回しでしょうか。

数原 まず賛否が割れた自民党内の各勢力です。特に玉置和郎さんをはじめとするタカ派の人たちは、有事への準備ができていないではないか、その点について進展がないと批准に向けて党内が納得しないと書いていた。また批准についていろいろと注文をつけた人たちもいた。さらに自民党内の対立がこのまま進めば自民党が分裂しかねないと懸念する人たちもいました。当時の三木政

権を支える勢力は少数でしたから。それからもちろん野党各党、それからメディア、産業界にも説明をしました。

当時私たちは、次の国会で批准できないなら、NPTは永久に批准できないのではないかと心配していました。そこで継続審議になった臨時国会の間は、ここまで持ってきた火を消さず、モメンタムを保つていこうということを一番大きな目標にしました。

これは三木政権が非常に不安定で、仮に解散総選挙となると、継続審議どころか廃案になってしまうわけです。そうなればもう一回、一から同じ手続きをやり直さなければいけない。そこで重要になったのが、NPTの中身というよりも議論にかける時間でした。その時間をかけている間、外務省はどうやって今までつくり上げてきたモメンタムを維持し、批准につなげていくかという観点から根回しをしました。

当時外務省が懸念していたのは、もしこれが廃案になれば、日本の国際信用がなくなってしまうということです。その前の通常国会の頃から、在京アメリカ大使館を中心にどこまで進んでいるのかということをしつばし聞かれました。再検討会議でも、日本にはNPTを批准してもらいたいという強い意向があったからこそ、最終宣言に日本の提案が全部と言っているほど入ったのです。IAEAとの保障措置協定でも、平和利用に関してユーラトム並みの待遇を確保できていました。それにもかかわらず廃案となれば、様々な場で日本が批准することへの期待を表明し、そのために協力してくれていた国際社会からの信用を失ってしまうという

危機感から、外務省は全省一丸となって努力したわけです。

ただしそのための説明で出てくる議論に新しいものは出てこない。

武田 これまでと同じことを説明されていたのですね。

数原 そうですね。ただ内政的には、批准した場合に日本の安全保障はどうなるのかというタカ派的な議論の他、より広く、原子力産業はどうなるのかという議論も幅広くなされていました。

武田 原子力産業界は基本的には批准賛成なわけですね。

数原 もちろんそうです。経団連なども含め、基本的には賛成。特に日本の原子力産業はまだ技術面でアメリカの援助を受けていましたし、ウランを輸入する必要もあった。日本がNPTを批准できない場合、技術移転やウランの輸出を止められれば大変なことになるという懸念がありました。

それともう一つ、平和利用に関しては平和的核爆発（PNE）の問題も懸念されていました。これは、PNEと言っても軍事目的の核実験と区別がつかないという問題があり、実際その後、インドがPNEと称して核実験を行うわけですよ。これがNPTでどこまで規制されるかという懸念が残っていた。

武田 反対したのは基本的には自民党内のタカ派ですか。

数原 自民党内のタカ派と、野党の中でも共産党は最後まで反対しましたし、社会党にも議論があった。次の政権や選挙、権力闘争と関連する内政上の問題の一つとしてNPTが捉えられたと私は理解しています。核の問題ですから、どうしても論争的になっ

てしまうのです。特に臨時国会の間は、政策や理念よりもそうした内政の側面が強く出ていたように思います。

岩間 臨時国会が始まる時点では、自民党内でもNPTの批准を進めるという申し合わせがあったわけですね。

数原 一応ありました。ただ、最後の総務会では中曽根さんが、批准するという方向で合意は大体できていたけれども、今言ったような党内の事情から、もう少し様子を見ないと自民党の中が割れてしまうと判断した。党が分裂して廃案になってしまったら、また一から出直さなければならぬ。それまでアメリカなど諸外国に対して批准の手続きが進んでいるといい、いわばそれを餌にして外交上の成果を得ていましたから、それが蓋をあけてみたら駄目だったということになると、これも外交上大変な失点になるという判断です。

白鳥 少し時期を戻ってしまうのですが、臨時国会では最終的に、1975年12月に継続審議が決まっています。これは当初から、臨時国会で通すのは厳しいだろうという見通しだったのですか。

数原 そうです。

白鳥 そうなると、継続審議を織り込んだ上で、次の通常国会で通すというイメージで根回しをされていたのですか。

数原 織り込み済みと言っても、それはできれば臨時国会で通したいなという気持ちは持っていました。国会で必要な審議はもう全部終わっていますので、あとは内政上の様々な思惑の中で合意をどう形成していくかということでした。

岩間 どちらかと言うと、説得する対象は野党というより自民党ですか。

数原 全部です。ただ野党には自民党に対する反発があった。NPTの批准については、自民党が頼むぞと言っておきながら最後は継続審議にしたという構図がありました。最後の段階で、三木さんは自民党の中を説得して批准を進める方途を出せなかったのです。中曽根さんもストップをかけた。

岩間 では出せるなら出したいという方向で、12月までの臨時国会を過ぎたわけですね。

数原 もちろんそのつもりでいました。アメリカにも批准すると説明し、再検討会議でも非核兵器国に対する安全保障から平和利用まで、様々な問題で日本の主張を取り入れてもらった。その後もジョンソン大使から、日本の反対派はNPTが不平等条約だと言ってくれる、核軍縮はこれだけ進んでいますよという説明をしてもらった。米ソが進めるSALT交渉の責任者に説明をしてもらった。これだけの努力をしていたわけです。

武田 野党の反発に関しては、もちろん共産党は反対ですが、たとえば公明党の渡部さんも質問8の参考に記載しましたとおり、自民党が一度出したNPTを党内の対立から継続審議にしたと言っている総理を非難されています。

数原 そうです。NPT批准は内政の問題だったということです。理念の問題ではなくて政治の現場の問題だった。

白鳥 臨時国会で通せなかったということに関して、諸外国から

何か反応はあったのでしょうか。

数原 僕はよく覚えていません。今は必死になってこういう根回しをしています、次の通常国会が始まったらいろいろ進めていくつもりですという説明はしていました。アメリカもその点はよくわかっていたと思います。

武田 大使が作成されたクロノロジーでは、11月1日に各紙の朝刊で三木・椎名会談の話が出ているとお書きになられています。また手帳8にもちょうどそのあたりの話が載っています。大使が「椎名・三木」「中曽根・三木」というタグをつけておられて、この頃の手帳の記載を見ますと連続して会談があるわけですね。

数原 まず三木・椎名会談ですが、これは三木さんに本当にやる気あるのかということについて、はっきりと言質をとろうというものでした。

武田 これは転換点になったのでしょうか。

数原 三木総理は批准を急ぐ、椎名さんもそれに同意しているということですね。総理が意欲を示したという、ここが大事な点です。結局最後は為政者がどうするか、それから党幹事長が内政の状況をどう判断するかですから。だから椎名さんも俺はやるぞと言っている。

岩間 次の日に中曽根さんとお会いになったのですか。

数原 これは、三木さんに学者さんの側近がいるわけです。それから中曽根さんにも桃井さんというブレンがいる。たとえば桃井さんからは、今幹事長がどのような気持ちでいるのかというこ

とが間接的に伝わってくる。

岩間 手帳のNPT批准の後、何と書いてありますか。

数原 NPT批准を慎重に。その上は、三木さんはNPT批准を急ぐということ、椎名さんもそれでいいよと同意をしたということ。

岩間 三木さん、椎名さんはそう言ったけれども、中曽根さんは慎重にと言う。

数原 それは党内の事情があるから慎重に進めていかなければいけないということです。ここで仲間割れして党が割れるということとを恐れていたわけですよ。こうなるともう内政の話ですから、僕らは何も関与できません。

白鳥 時期的にはこの年末で前の解散から3年後というところですよ。

数原 それとロッキード事件の直前ですね。政治家は次の選挙に自分が当選するかどうか、政党は次の選挙で政権を取れるかどうか、あるいは政権を維持できるかどうかを考えます。そういう内政の問題に加えて、国際的にもこの年にはベトナムでサイゴンが陥落しています。政治家はNPTのことだけを考えているわけではないので、内外の様々な動きに目配りしながら、その中でどのようにかじ取りしていくかを決めている。ですから僕ら事務方の手はもう離れていて、我々としてはその決定をどう受けとめ、批准に向けて何をしたらいいかを決めるということですよ。

武田 手帳の右にある外務省の考え方というのはどういう性格の

ものでしょうか。

数原 これは中曽根・三木会談をふまえて、今国会でできればやりましようという話になった。今国会というのは臨時国会です。

武田 まだ1カ月あるということですか。

数原 ただ実際には外務委員会や大臣出席の問題などいろいろとあった。

岩間 その左のページの流れは、三木・椎名会談でなるべく急ぐと合意したけれども、11月1日に中曽根さんがちよつと待てと言った。結果として11月2日の総理の決定は……。

数原 遅くとも次の国会でやらねばならない、というさきほど説明した方針が書いてある。

岩間 その頃に大体次の国会でという感じになったのです。

数原 次官をはじめ省内で今後の戦略を検討しました。内政の問題と国外の状況、たとえば内政上いつまでに何が進展するか、国際信用という観点から見てどのぐらい批准を先延ばしにできるか、というようなことです。そして次の国会では必ず批准すると言えるのかどうかも重要です。その上でやるべきことを外務省の中でも議論して、根回しをして、周りから固めていく他なかった。

岩間 サイゴン陥落については何か特別に御記憶はありますか。

数原 特にNPT批准との関連ではありません。

岩間 ショックでしたか。

数原 私自身は以前南東アジア一課にいましたからね。しかもキッシンジャーさんが中心になってベトナムからの米軍撤退を進め

ていたから、それが挫折した、アメリカが敗北したというのは印象的でした。

それと宮澤外相がアメリカへ行つて、それで安全保障は大丈夫だと言つてタカ派を説得しようとしたから、アメリカが今後どう動くのか、日本の安全保障について何を考えているのだろうか、と懸念はしました。それが内政にどういうインパクトを与えるのか不透明なので、できるだけ早く批准を進めた方がいいなと感じました。

岩間 国内では反米の世論が強かったという印象ですか。

数原 ベトナムに関しては感じましたが、NPTについてはそれほど感じませんでした。むしろ日本の安全保障は大丈夫か、もう核を持たなくなってもアメリカは本当に守ってくれるのかという不安はあった。

白鳥 案件によっては世論の動向を見極める必要があるかと思いますが、NPT批准に関してはいかがだったのでしょうか。

数原 朝日新聞をはじめメディアは賛成でした。産業界も特に平和利用の観点から賛成してくれた。日本の国民的な感情からいっても、たとえば選挙でNPT反対といって選挙民がその人を支持してくれるかというと、それもなかったでしょう。

岩間 中曽根さんはいかがでしたが、一般的にはタカ派のイメージが定着していて、原子力平和利用にも最初から深く関わつてこられた人ですけれども、NPTに関してはいかがでしたか。

数原 幹事長ですから、党内をまとめるというのが彼の役割でし

た。

岩間 政治家としてNPTに対してどう思っていたか、印象はお待ちですか。

数原 中曽根さんは三木政権を支えていくと立場にあつて、NPT批准推進は三木総理が決定し、椎名さん、三木さんあたりが中心になつて進めた。それを中曽根さんは幹事長として認めたわけです。もちろん政治家というのはみんな政権をとるための争いごとが一番おもしろいし、それぞれの思惑や利益があるわけで、批准に関してはするかしないかをそれぞれの立場から考えている。僕らはそれを忖度しながら、この人に向かつてはどう話を進めていったらいいかを考える。

岩間 中曽根さんはNPT批准にブレーキをかけるに当たつて、この時点で決定的な役割を果たしたわけですね。

数原 それは幹事長として党内が割れたら困る、三木政権が倒れたら自民党としても損だという判断ですね。

岩間 次の国会では批准するというのは、中曽根さん自身もおつしゃつておられたのですか。

数原 僕はそう思いますが、それはなかなか表立つて言えないわけですよ。言えればタカ派がまたどういう対応をするか、党内の対立を見る野党がどう感じるか。既にそれまでに、社会党も民社党も自民党から批准を進めようと言われ、一生懸命それぞれの党内をまとめたのに自民党の党内事情で中断するという経緯があつたわけですから。

岩間 中曽根さん自身は、もっと時間が必要だと党内外に言い続けたという感じですか。

数原 そうですね。この時三木さんをサポートしたのは、宮澤外相や鯨岡兵輔さんなどみなハト派で、逆に言えば一番根回ししなければいけないのはタカ派でした。

岩間 この問題に関しては、中曽根さんはタカ派だったということはないと。

数原 僕はないと思っています。少なくともNPT批准に関しては。タカ派かどうかではなく、批准するかどうかという選択をしなければいけなかった。もちろん前に触れたキッシンジャーとの論争の時のものを含め、中曽根さん自身のいろいろな思惑もあったと思います。

■ 審議再開から批准にかけての経緯

白鳥 1975年12月に継続審議が決まって、翌年3月に審議開始になるわけですけど、その間は臨時国会の際と同じように引き続き根回しをされていたのでしょうか。

数原 していたと思いますよ。僕は手帳とは別に、自分が何月何日にどこへ行ったかというのを別途記録しています。継続審議決定はいつ頃ですか。

白鳥 12月17日です。この前後の手帳を拝見しますと、15日には社会党の訪米団がアメリカに行って、批准の約束をしてきたとい

う報道があったことが記されています。

数原 その頃は国連総会の最中です。第1委員会で軍縮問題を扱いますので、たとえば非核兵器国の安全保障問題をどう扱っていくのかというようなことを、我々も国内からプッシュしなきゃいけない。ジュネーブにいる軍縮大使が小木曾本雄さんに交代されて、アメリカ等とも協力しつつ、日本が批准しやすくなるように議論を進めていきました。

武田 この間は国内ではいったん小休止でしょうか。

数原 そんな感じではないでしょうか。ただ、さっき言ったように次の国会が始まったら今度は正念場ですから、そのためにモメンタムは残そうとしていました。この手帳からおわかりだろうと思うのですけれども、そのために何回も、次官、有田外務審議官、国連局長などと戦術を練る会議をしています。

武田 手帳10、1976年1月から3月の頃のものに「日本の非核」というタグが貼られた箇所がありまして、2月12日、核防条約の本質は何かというメモ書きが残されています。このあたりでもう一度、改めて論点を確認し直しているところということでしょうか。

数原 審議やぶさかではない、これは河と書いてあるから河上さんです。それから2月12日、局長の勉強会と書いてありますね。

武田 では外務省内での議論でしょうか。

数原 今週の日本、これは何でしょう。新しい仕上げの日、入らせてほしい。その次は河上さん。いろいろな人が何を言っている

かという勉強会のメモだとしたら、情報をここで交換している。その下に核防条約の本質は何かというところがあるわけですね。

武田 外部の方を招いた勉強会でしょか。

数原 どういう場だったのかはわかりません。

議論で出てくる非核三原則の問題というのは、核持ち込みを認めるか認めないかという問題です。その議論が全然国内で進んでいないではないか、というのがタカ派の議論だったわけです。さらにシーレーンの問題等も含めてアメリカとの間で議論を詰めないと、核兵器を持たなくなった日本の安全保障が脅かされるという議論です。アメリカに頼るといつてもどのくらい頼りになるか。特にアメリカがシーレーンをどこまで守ってくれるか。産業界もそこに関心があった。それは核防条約の本質の話ではなくて、安全保障の話になる。

それと右ページの「今週の日本」という番組については、前から言っているように、本来NPTは安全保障の問題ではない。日本が核を持つという選択肢はもう誰も本気で考えないが、ためにする議論をタカ派が出してくる。それも説得しないといけない。反対のための反対をまともに受けとめて、相手をしなければいけない。NPTは不平等条約だけれども、ここにも書いてあるように、世論、新聞、産業界は支持していて、コンセンサスはある。なぜこんなに批准を急ぐのかという議論もあるが、遅れた場合にどんな不都合が生じるかを論じたのが、「今週の日本」という番組なのでですね、多分。

岩間 ロッキード事件に関しては何か影響したという印象をお持ちですか。

数原 内政の問題として、ワンクッション置いた上で影響した印象はあります。僕らはどうしようもありませんが、事件がもしも衆議院解散にでもつながったら、さっき言ったように直接の被害者になる。

白鳥 国会の審議日程などに影響する、というような懸念はありましたか。

数原 ありました。政治家の頭の中はNPTよりもそういったことの方が大きいですから。

武田 その後、質問9につけた大使作成のクロノロジーを見ておりますと、審議が始まった後は順調にいつているように見えます。

数原 批准に至るまでもう何もありませんよ。

武田 一旦始まったならもうそんなに抵抗はなかったということでしょうか。

数原 そうですよ。タカ派もこれ以上抵抗して、汚名じゃないけれども、責任をかぶせられるわけにはいかない。源田さんも非常にものわりのいい賢い人ですから、ここらあたりが矛の収め時と考えたのだと思います。

武田 質問票の参考に当時の衆参の外務委員会の方々の名前を挙げておきました。

数原 坂本三十次さん、水野清さん、毛利松平さんといった衆議院の理事はみんな三木派ですし、参議院外務委員会でも秦野章さ

ん、増原恵吉さんがそうです。あと印象に残っているのは社会党の河上民雄さん。

白鳥 名前が挙がっている中だと中山正暉さんは青嵐会のタカ派という印象があります。NPT批准に関しては何か御記憶ですが。

数原 いや、特に記憶に残っていません。

白鳥 意識的に三木派が外務委員会に送り込まれていたということなのでしょうか。

数原 そうでしょう。それはやはり総理が選べますからね。

武田 当時の関係者の方の話としては、前尾繁三郎衆議院議長が天皇陛下にお会いした際にこの件についてお話しされたということとです。

数原 陛下が関心を持っておられたということは私も前尾さんの言として新聞で知りました。広島などでの経験を考えても、核を持たないという選択は当然だということと。

武田 ただ、前尾議長が当時大変熱心に動いたという証言があるのですが、実際に衆議院の議長が条約の審議にどの程度の影響を及ぼせたのでしょうか。

数原 天皇陛下がこういうことを言われたからということとは絶対に表に出さなと思いますけれども、みんなそれぞれそういったことを心の中におさめて、それをふまえて、そして話をする。誰かがしゃべったかもしれませんが、それは知りませんけれども、表に出たことではないと思いますよ。

議長の影響力については内政の話なのでわかりません。ただ、

政局をはじめいろいろな情報を集めながら国会での審議について采配をふるうという意味で、大事な役割を負っておられたと思います。

白鳥 審議の日程はどう決まったのでしょうか。

数原 それはやはり外務委員長が各党の国会対策委員会と相談して決めていく。

白鳥 昭和天皇の御意向というのは、当時の外務省関係者には比較的広く知られていたのですか。

数原 いや、僕は誰かからそういったことを聞いたことは覚えていますが、自分が口にしたことはありません。

■ 自民党以外への根回し

武田 次の質問10からは経緯というより補足で、まず野党に説明されていた時の様子からです。大使作成のクロノロジーなどによると民社党は賛成、公明党は消極的に賛成、社会党は曖昧、共産党は米ソの陰謀だと言って反対するという状況のようですね。

数原 社会党は1975年末の訪米団の段階では、アメリカに行った以上は批准反対とは言わない、批准に向かうと話すということだったのだらうと思います。社会党の中でも、外務委員会の方は賛成でした。

武田 しかし党内には異論があったということですか。具体的に理事以外にも説明に行かれたのでしょうか。

数原 行ったと思いますが、誰にとというのは記憶していません。手帳に何か書いてあるかもしれません。

武田 外交史料館のファイルに関連する文書が入っていました。1975年3月4日付け、軍縮室が作成した社会党議員への説明についての文書です（国連局軍縮室「NPT問題（社会党議員への説明）」1975年3月4日、『日・IAEA国際原子力機関との核兵器不拡散条約（NPT条約）第三条1及び4の実施協定（保障措置協定）／批准問題に関する国会審議』（2014・2755）所収）。大使の作成されたものでしょうか。

数原 多分そうでしょうね。「野田参事官より川崎寛治、河上民雄前議員にNPT問題説明を行ったところ、特に注目すべき点は次の通り……」、これは説明資料ですね。「批准のこれを出したという問題に関して。なお、本件説明は当初社会党より公式機関での説明を私的な要請に基づき説明をすることです承」。なるほど。「先方は新聞報道を見る限り外務省の説明は専ら自民党が反対意見」。ここでもやはり政治家はメンツの話ですね。社会党はこっちは向かなかったら俺たちは反対するぞという。「社会党としてもNPTの批准が国会に提出されれば全く独自の観点から問題」と。まあそういうことだ。「IAEAの視察に、これは専ら大企業の利益を念頭に置きながら自主査察体制をつくって査察をいかに緩やかなものにするかが日本では象徴されているようである、我々としては、逆に原子力の利用の軍事転用を抑えるという観点から厳密なIAEA査察体制を続けたほうがよいのではないかと考えてい

る。核軍縮について外務省よりそれなりの進展があるとの立場であるようだが、我々としては中国が主張しているようにNPTは米ソの核軍拡を許容しており、完全軍縮が軍縮の唯一の方法である」と。これは左派の立場ですね。「軍備管理の面で若干の進展があるとしても、これは軍縮とは全く異なった次元の問題である」。それに対して軍縮室が、NPTの批准を行わない場合、我が国の核政策に対する不審があるという説明に対し、NPTの批准を行わない場合に、それが我が国と中国との関係に悪影響を与えるかの説明は全く根拠がないと説明している。中国はもともとNPTには入っていないわけですから。「右に対して我が国はこの点はいくまで予想の域を出ないことは御指摘のとおりである、中国はNPT批准を望んでいるかいないかについて質問したところ、特に返答はなかった」。それはやったほうがいいに決まっているのだけど、おまえやれよとは言わないよね。「NPT問題について、社会党の公式態度についてこれから党内で議論」。それはやはり自分たちの態度の幅を残して、少しでも内政運営、政局の運営を有利に持っていきたいという観点からでしょう。NPTとは直接関係ない。

武田 NPTそのものに反対というのではなくて、すぐに賛成とは言えないということですか。

数原 継続審議になったいきさつはNPTそのものに関する議論とは全然関係ないわけです。

白鳥 1976年3月に外務委員会での審議が始まりますが、そ

の段階では比較的心配はされていなかったのでしょうか。

数原 もうやることはありませんから。衆議院を通過して参議院に送ろうという段階です。

白鳥 もう今国会ではできるだろうという見通しだったと。

数原 そういうことだと思います。

白鳥 共産党の反対についてはどのようにお考えですか。

数原 共産党の主張は米ソが結託してNPTをつくり、日本に核を持たせないようにしているということですよ。なぜ最後まで賛成しなかったのかというと、理由は二つあると思います。ソ連から離れて独自の路線をとるべきということと、日本がますますアメリカの影響からますます逃れられなくなるということの2つです。

白鳥 この件に関して共産党の意見を何とか変えてもらいたいとお考えだったのですか。

数原 共産党に対して何か根回しをしたという記憶はないし、手帳にも記録はありません。正森（成二）さんという人が論客として一番国会での議論に参加していましたが、議論に参加するというのは、かなり賛成の意向です。ただ問題は、そうした議論で党内をまとめられないところにあったのだと思います。

武田 最後に質問の11番は同じように補足的なもので、産業界やメディアにはどういう点を中心に説明や根回しをされたのでしょうか。

数原 それはさっき言った二つで、核燃料の確保とアメリカから

の技術の導入です。これは日本が批准しない場合、今のように入ムーズに行くかどうかはわからない。産業界も現実的な利益があるわけですから、その点を一番心配していました。

武田 産業界には、NPTに入ることと受ける保障措置の種類が変わることへの心配はなかったのでしょうか。

数原 その点については、日本はユーラトム並みの待遇を確保していた。いろいろな国の人がいるIAEAによる査察ではなくて、ユーラトムというヨーロッパの組織が域内の保障措置を行うのと同じ仕組みです。西ドイツもそうでしたが、NPTを批准する際にはIAEAの査察がどんどん入り、産業秘密などが中国やソ連に筒抜けになるおそれがあるはあった。保障措置協定に関する交渉でユーラトム並みの待遇を得て、そういう問題を解決した。

武田 質問票の参考に当時の関係者の方のお名前を挙げてみました。特に接触していた、よく話をしていたという方はおられますか。

数原 この中では今井隆吉さん、読売の石井一さん、朝日の岸田純之助さん。

武田 あと原産会議には森一久さんが当時おられました。

数原 森さんとも会ったことがあります。

武田 経済界全体というよりは、原子力産業界の方が多いという感じですか。

数原 いえ、たくさんやった方がいいということで三菱重工など、経済界全体をカバーしました。

武田 説明には大使ご自身が行かれたのですか。

数原 それは相手のレベルによって違います。

岩間 通産省や科技庁とも連絡は取られていましたか。

数原 それはもちろん。国内産業は向こうのテリトリーですから、あまり外務省が出かけるのも問題です。ただIAEAとの保障措置は外交問題でも、それに関する国内への根回しや説明となると、通産省や科技庁のほうの色々と梃子を持っているわけです。防衛庁も核の持ち込みなどには関係してくる。よその省庁の懐の中に手をつ込むのは一番役人が嫌がることですから、自分のテリトリーをふまえて進めました。ジョンソン次官が訪日された時に久保次官はじめ防衛庁関係者に会ってもらったのも、外務省が情報を独占しているわけではないと示し、チームワークで一緒にやっていくためです。

武田 科技庁や通産省との連携はうまくいったのでしょうか。

数原 そうですね。NPTを批准するという目標で一致しているわけですから。それに総理がやろうとしているわけですから、それに盾突く役人はいない。

武田 通産省と外務省は色々と対立もありますが。

数原 色々とあるけれども、この問題ではありません。

岩間 まだ日本の原子力産業が成長している途上の時期ですが、通産省と科技庁の間に主導権争いみたいなものはあったのですか。
数原 それはなかったと思います。私が通産省の電子工業課でコンピューターを担当し、日本の産業の育成を進めようとした時も

そうですが、日本の役所というのは、省益より国益を踏まえて歩調を進めることができます。他人の懐に突っ込んで勝手にやることは嫌いますし、誰の仕事かという分担では争いますが、少なくとも国益という観点から一つになってやっていくということでは足並みを揃えている。

岩間 この頃にはもう次の発令が出ていましたか。

数原 発令は1976年の8月16日で、内示があったのはもっと前でしょう。

岩間 軍縮課長の間はほぼこのNPT批准に没頭されたわけですか。

数原 そうです。それでも他に仕事はあります。NPT再検討会議や国連の軍縮委員会での演説内容の検討、国連総会関係の仕事などです。それでも仕事のほとんど90%がこの関係ですし、政治家の間を回り、次官や審議官と一緒にあって大臣の前で御前会議をするというのはそうそうあることではないです。ところがそれが日常茶飯事だった。政財界の、軍縮室長のようなペーペーの事務方が普段出向かない所に出向いて説明をしました。みなさん内政上の関心があり、日本の安全保障は大丈夫なのかという関心があったのです。それに一番情報を持っていたのが私とか事務方で、アメリカでさえ話を聞きたがった状況でした。それに対して我々も、これをしゃべったら味方になってくれるかな、という政治的な判断もしながら話をしていた。

白鳥 関心があるのは安全保障問題というより平和利用の観点だ

ったのですか。

数原 それは人それぞれです。

武田 では、そんなところですね。

数原 もう私の持っているものは全部吐き出したような感じです。

武田 ちょっと休憩いたしまして、その後で大使の御意見をお伺いしたいと思います。

(休憩)

■ 核問題の展望

数原 今回のインタビューはどのように今後役立つのか、何を念頭に置いてされているのですか。

岩間 今改めてすごく重要だと思っているのは、日本の周辺が主戦場だということです。冷戦期の日本は周縁にいて、主戦場がヨーロッパだった。しかし21世紀は、米中になるにしろ、どのように動くにしろ、アジア太平洋が主戦場になると思っています。ですから日本の周辺で、核と抑止の問題は、向こう50年は存在し続けるでしょう。その問題に対して日本は現在のままで本当にいいのかという問いは、今後10年、20年、30年と、何度でも上がってくるはずです。

数原 それは核を持たないという決定が正しいかということですか。

岩間 あるいはアメリカの抑止は本当に信頼できるのか、信頼できないとしたら私たちはどうするのかという話ですね。その問いを考える時、1968年から76年の間に日本が何を議論していたの組み合わせを選択したのかという事実が重要です。あの時の選択を再考するとして、当時と今で条件は本当に違うのか、ということは繰り返し出て来る問いだと思います。

数原 それは出てくる。ただ現実には批准の際に何を求めたのかということと、政治家が選挙や政局を考えてどう動いたか、どのような権力闘争があったということもあるわけですね。

岩間 ただ私は現在の政策が今後も妥当かどうかということは常に頭の中にありまして、妥当な政策には国際的な支持と国内的な支持の両方が必要なのだと思います。たとえば日米安保はもちろん日本の国益に合っているけれども、日本人の半数以上が絶対に嫌だと思いついたら維持できないでしょうし、不公平感が強すぎるのであれば対応する必要があるでしょう。

数原 わかりました。日本の将来にとってこの選択がどういう意味を持つかを念頭に、何が真実なのかということをはっきり記録に残したいということでしょうね。

岩間 我々は外務省の史料を見ることはできるのですが、日本の場合は史料が残りにくいですね。

数原 ただ国内政治の話となると深淵をのぞくような話ですね。

岩間 そうですか。

数原 外交の場合、たとえば価値観のような切り口から見ると歴

史が残ります。一方の内政となると、誰の力が強かったかが結果として残るだけです。その力関係がどのように動くかを分析するのはまた別の話になる。とはいえ、価値観や理念がもまれる弱肉強食の権力争いを無視することはできない。この二つ、理念の問題とリアリズムの問題とが分けられないのです。どちらが主でどちらが従かということではなく、両方を見ながら考えていかないと、なかなか結論が出てこないというのが僕の持論です。

このうち外交に関して歴史を残すのは、私の主観も入りますが、条約です。僕は外務省でよく言うのですけれども、条約というのはそれぞれの時代のイシューを文書の形で固めたものです。明治の頃からそうですし、国連もその前の国際連盟が失敗したのを受けて形成され、その先の100年後には世界連邦のようなものが置かれているのでしょうか。そういう一つの理念から議論できるのが外交です。

内政と外交はそれぞれ *sein* (ザイン) と *sollen* (ゾレン) の側面が強い。*sein* は誰が強かったかという話です。結局、力の強いものが勝つ。またどちらの力が強かったのかは戦ってみないとわからない。それに対して条約は、ある時代の一つの理念、こうあるべきだという将来を見て、*sollen* の立場から理非曲直を踏まえて、それに人間社会がどのように近づいていくかを考えたものが、条約で固まるのです。

条約局の仕事というのは、そのように条約を一つ一つ固め、それを記録に残していくことにあると思います。先生方のやってお

られる政策研究も、条約ではないですが、なぜこの選択がなされたのか、他にどんな選択肢があったのか、何が議論されたのかを記録するという意味で興味深い。ですから私も、できるだけ自分の主観を入れないように議論に参加してきました。ただ、こうしたことへの関心は世の中にどれくらいあるのでしょうか。

白鳥 政府の内部で仕事をされていた方々にとっては、わざわざ伝える必要がないと思っているぐらい当たり前のことが、実は外から見ると全然わからないことが多いです。それをオーラル・ヒストリーという形で残すのは大変有意義だと思います。

数原 やはり *sein* と *sollen* の両方が NPT の批准過程にはあったということ、両方を見なくてはならないということは個人的には意識しています。政治学者としては、今までの NPT に関する研究は *sollen* の話をし過ぎて、その下にある力をちゃんと見てこなかったのではないか、というのが一つの疑問です。

岩間 御自身で振り返ってごらんになっていかがですか。あの時の NPT 批准という決断をめぐって、日本は随分苦しみましたよね。

数原 面倒くさい、厄介な問題でした。やろうとしていたことに疑問を持ったことはありません。日本の安全保障についてもその他についても、いろいろな議論がされた。人類益というほどではないですけれども、政府の中で国益をどうやって守っていくかという観点から、上の指示に従って、やることをやっていたということだけです。日本は核を持たないという選択肢は、いろいろ問

題はあるけれども、その問題点を踏まえて進めていくということではないのか、と僕は今でも思っています。

今の北朝鮮や中国の問題も、これから100年先を考えた時、タカ派の人たちの議論も再考するべき状況なのだろうと思います。しかしだからと言って、NPT批准が間違っていたということにはならない。1976年から数えてもう40年以上経っているわけですが、当時の議論は無駄ではなかったと思います。核を持つべきか否か、アメリカに頼っていていいのかといった議論が今現在の国際政治、日本の国内政治の関心事の一つになっているわけですから。

その中で批准にどういう意味があったのか、それを記録に残すことにどういう意味があるのかについては、僕は何も言うことはないのです。ただ、私はこれまで、*sein* という国益の権力闘争という分析が一番確かな道筋を教えてくれる、そこで判断したら選択を間違わないという考えでやってきました。それもなしに理想を掲げてやったのでは、大事な *sollen* の中の外交の道筋を誤るということですね。一方で、たとえば個人の場合には愛を全うしていけるかが問題になるように、国家の場合には国のあり方、平和や人権といった価値観が問題になる。人類益、国際益を考えて、100年先を見据えて議論をし、コンセンサスでどのような選択をするかを考える必要があると思います。

特に今の国際社会は、国内社会のような中央集権体制ではない、不平等な世界です。そういう中で100年後を想定してどこに向

かえばいいかを考えるのが *sollen* の議論で、そのために必要な手法、実際に何をやるかという選択は *Sein* です。

私はモーゲンソーの言う現実主義、*struggle for power* が国際政治の現実だという見方に従って40年間外交をしてきました。外務省はそれで通るわけで、逆に100年後の話をしたら笑われるだけです。その分、そういう立場になくて、純粋に学者として何が真実で何が正しかったのか、どうあるべきかという議論ができるあなたの方に期待しています。

岩間 *sollen* の側だけを見ると、NPTは非常に不平等な条約であるということはいまに至るまで言われていますが、いかがですか。

数原 NPTは国連安保理の流れをくんでいて、不平等さはその根底にあるのです。それを不平等だと言っても何も進みません。特に当時は批准するかしないかしかありませんでしたから。この問題を多少とも緩和するために、非核兵器国の立場で安保常任理事国になるべきだというのが私の意見です。

岩間 ただ、NPTは成立から100年は経っていないですが、ちょうど50年は経っていますね。

数原 そうですね。しかし現状は全然変わっていない。案外人間の歴史の進み方というのは遅いですね。

岩間 50年前と比べて、いまはそんなに悪くはなっていないと見る人もいれば、結構悪くなったと見る人もいますね。

数原 そうですね。特に東アジアを見たらそうです。しかしヨー

ロツパは非常によくなっていますよね。その点でドイツと日本の立場は違うと思います。原子力平和利用だけでなく、安全保障面でもヨーロッパとは違う。100年後を考えると、この状況がどうなっているか、アメリカがどうなっているかが重要な要素です。

＊本冊子は文部科学省科学研究費助成事業・基盤研究(A)「核不拡散体制の成立と安全保障政策の再定義」プロジェクト〔課題番号 17H00972〕により作成した。

＊許可なく公開、複製、転載を禁ず。

2019 年 2 月 28 日

政 策 研 究 大 学 院 大 学

〒106 - 0032 東京都港区六本木 7-22-1
TEL: 03-6439-6000 FAX: 03-6439-6010

